

# 長岡京跡右京第 1073 次調査報告書

－ 長岡京跡右京八条三坊九町、伊賀寺遺跡、友岡遺跡の調査 －



2 0 2 3

公益財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター

# 長岡京跡右京第 1073 次調査報告書

－ 長岡京跡右京八条三坊九町、伊賀寺遺跡、友岡遺跡の調査 －

2 0 2 3

公益財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター





## 序 文

今年度、当センターが長岡京市域における発掘調査事業を開始してから40年という時が経過しました。この間、長岡京市では人口が増加し、市の景観にも大きな変化が見られました。

本書に記した発掘調査地が所在する長岡京市の南西部地域は、小泉川の改修をはじめ、京都縦貫道及び側道の開通、阪急西山天王山駅や大型病院の建設など、長岡京市のなかでも大きな変貌を遂げた地域といえます。

本調査では、縄文時代中期の竪穴建物などを発掘し、この地に数千年前から人びとが定住し生活を営んでいたことが再確認できました。その他、飛鳥時代や長岡京期、中近世の成果も得られており、飛鳥時代は鞍岡廃寺を建立した豪族、長岡京期では西側の大型建物群との関連が注目されるところです。

こうした発掘調査成果は、この地に残された人びとの営みであり、永い時の経過で忘れ去られた歴史の一片でもあります。当センターでは、市民の皆さまや関係諸機関のご理解、ご協力を得ながら発掘調査を実施し、埋もれた歴史の断片を拾い上げ、永い時の経過を復元してゆきたいと考えています。そして、地域の歴史的な事実を明らかにすることで、私たちの生きる現代やさらに将来を考える一助となることを願っています。

当センターでは、今後とも発掘調査事業をはじめとした埋蔵文化財に関する諸事業を実施いたしますので、皆さま方には更なるご支援を頂きますようお願い申し上げます。

令和5年3月

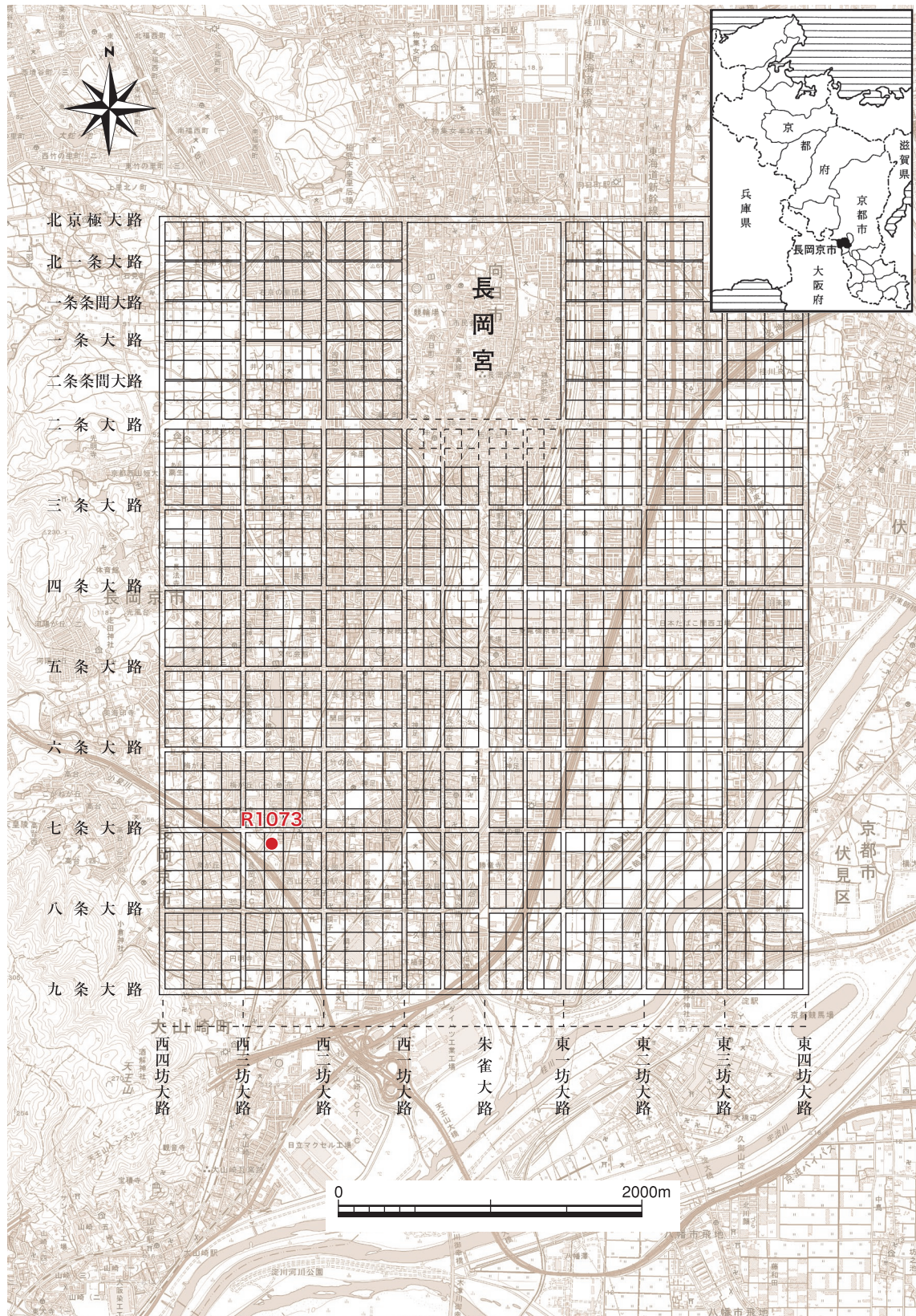
公益財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター

理事長 山本和紀

## 凡 例

1. 本書は、京都府長岡京市友岡西畑6番1他、下海印寺伊賀寺45番1他において実施した長岡京跡右京第1073次調査（7ANNNT-5地区、7ANOIR-8地区）に関する報告である。
2. 調査は、平成25（2013）年10月22日から平成26（2014）年2月28日まで公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センターが実施したもので、調査面積は1,690㎡であった。現地の調査は、本センター事務局次長（当時）の山本輝雄が担当した。
3. 調査の対象となった遺跡は、長岡京跡右京八条三坊九町、伊賀寺遺跡、友岡遺跡の3遺跡である。
4. 長岡京跡の調査次数は、右京域と左京域に分けて通算したものである。また、調査地区名は、前半が奈良文化財研究所の遺跡分類表示、後半が京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報』（1977年）収録の旧大字小字名による地区割りと同地区内における調査回数を示す。
5. 長岡京跡の条坊名称は、山中章「古代条坊制論」『考古学研究』第38巻第4号（1992年）の復原案に従った。
6. 本書で使用する地形区分は、特に断らない限り「長岡京市域地形分類図」『長岡京市史』資料編一（1991年）によった。
7. 本文の（注）に示した長岡京に関する報告書のうち、使用頻度の高いものについては、『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第2集（1985年）に従って略記した。
8. 本書において使用している遺構番号は、長岡京跡に関する調査の場合、調査次数+番号であるが、煩雑さを避けるため、調査次数を省略している。「SD01」の場合、調査次数を冠した「SD〇〇〇01」が正式な番号である。
9. 本書で使用している方位と国土座標値は、世界測地座標系の第VI系によっている。
10. 本書の挿図の土層名で〈〉を付けて表示した記号は、『新版標準土色帳』（1997年版）のJIS表記法による土色名である。
11. 現地調査および遺物整理などにあたっては、泉拓良、井上満郎、植村直博、千葉豊、都出比呂志、中尾芳治、中川和哉、矢野健一の各氏より、種々のご指導とご教示を賜った。
12. 本書の執筆・編集は山本が行い、編集にあたっては技術補佐員・整理員の協力を得た。





第1図 長岡京と調査地の位置 (1/40000)

# 本文目次

序文	.....	i
凡例	.....	ii
第1章 はじめに	.....	1
1 位置と環境	.....	1
(1) 位置と立地	.....	1
(2) 周辺の調査と歴史的環境	.....	2
2 調査経過	.....	4
第2章 検出遺構	.....	9
1 基本層序	.....	9
2 近世以降の遺構	.....	12
3 中世の遺構	.....	15
4 長岡京期の遺構	.....	15
5 飛鳥時代の遺構	.....	19
6 縄文時代の遺構	.....	30
7 時期不明の遺構	.....	36
第3章 出土遺物	.....	39
1 中世以降の遺物	.....	39
2 長岡京期の遺物	.....	40
3 飛鳥時代の遺物	.....	44
4 縄文時代の遺物	.....	46
(1) 縄文土器	.....	46
(2) 土製品	.....	56
(3) 石器	.....	56
第4章 まとめ	.....	64
1 長岡京期の様相	.....	64
2 飛鳥時代の集落	.....	66
3 縄文時代中期の集落	.....	69



## 図版目次

- 図版1 (1) 航空写真(南東上空から)  
(2) 航空写真(北西上空から)
- 図版2 (1) 航空写真(南東上空から)  
(2) 航空写真(北西上空から)
- 図版3 (1) 調査区全景(北から)  
(2) 調査区全景(東から)
- 図版4 (1) 調査区全景(西から)  
(2) 調査区全景(北西から)
- 図版5 (1) 土坑SK02全景(西から)  
(2) 井戸SE05全景(南から)  
(3) 井戸SE09全景(南から)
- 図版6 (1) 溝SD18完掘状況(南から)  
(2) 溝SD18礫出土状況(北から)  
(3) 溝SD18礫出土状況(南東から)
- 図版7 (1) 掘立柱建物SB11全景(北西から)  
(2) 柱穴P10(北西から)  
(3) 柱穴P7(北東から)
- 図版8 (1) 掘立柱建物SB50全景(南東から)  
(2) 柱穴P137(北西から)  
(3) 柱穴P140(北から)
- 図版9 (1) 土坑SK24遺物出土状況(北東から)  
(2) 土坑SK24完掘状況(南から)
- 図版10 (1) 土坑SK27全景(南東から)  
(2) 土坑SK25全景(南から)  
(3) 小穴P95全景(南東から)  
(4) 小穴P40全景(北西から)
- 図版11 (1) 竪穴建物SH12・13全景(北西から)  
(2) 竪穴建物SH12のカマド(南から)
- 図版12 (1) 竪穴建物SH14全景(南西から)  
(2) 竪穴建物SH14のカマド(西から)

- 図版 13 (1) 竪穴建物 SH15・16 全景 (西から)  
(2) 竪穴建物 SH15 のカマド (南から)
- 図版 14 (1) 竪穴建物 SH29 全景 (南西から)  
(2) 竪穴建物 SH29 のカマド (南から)
- 図版 15 (1) 竪穴建物 SH37・38 全景 (北西から)  
(2) 竪穴建物 SH37・38 全景 (北東から)
- 図版 16 (1) 竪穴建物 SH37 全景 (北西から)  
(2) 竪穴建物 SH37 のカマド (南から)
- 図版 17 (1) 竪穴建物 SH38 全景 (北西から)  
(2) 竪穴建物 SH38 のカマド (西から)
- 図版 18 (1) 掘立柱建物 SB20 全景 (南東から)  
(2) 柱穴 P8 (南から)  
(3) 柱穴 P9 (南から)
- 図版 19 (1) 掘立柱建物 SB23 全景 (南西から)  
(2) 柱穴 P2 (北西から)  
(3) 柱穴 P9 (南東から)
- 図版 20 (1) 竪穴建物 SH17 全景 (北から)  
(2) 竪穴建物 SH17 全景 (東から)
- 図版 21 (1) 竪穴建物 SH17 の石囲炉と主柱穴 (北から)  
(2) 竪穴建物 SH17 の石囲炉 (東から)
- 図版 22 (1) 竪穴建物 SH32 全景 (南西から)  
(2) 竪穴建物 SH32 の炉と主柱穴 (東から)
- 図版 23 (1) 竪穴建物 SH32 の炉遺物出土状況 (北から)  
(2) 竪穴建物 SH32 の炉 (南東から)
- 図版 24 (1) 竪穴建物 SH39 検出状況 (南西から)  
(2) 竪穴建物 SH39 完掘状況 (西から)
- 図版 25 (1) 竪穴建物 SH39 検出状況 (南から)  
(2) 竪穴建物 SH39 完掘状況 (南から)
- 図版 26 (1) 竪穴建物 SH39 の遺物出土状況 (西から)  
(2) 竪穴建物 SH39 の遺物出土状況 (南東から)  
(3) 竪穴建物 SH39 の遺物出土状況 (北から)  
(4) 竪穴建物 SH39 の遺物出土状況 (北西から)
- 図版 27 (1) 竪穴建物 SH39 の炉と主柱穴 (西から)  
(2) 竪穴建物 SH39 の炉 (南から)

- 図版 28 (1) 土坑 SK22 全景 (南西から)  
(2) 土坑 SK33 全景 (南東から)  
(3) 土坑 SK33 縄文土器出土状況 (北東から)
- 図版 29 (1) 井戸 SE03、溝 SD04・18、小穴 P102 出土遺物  
(2) 掘立柱建物 SB11・50、小穴出土遺物
- 図版 30 (1) 土坑 SK24 出土土師器  
(2) 土坑 SK24 出土須恵器
- 図版 31 (1) 土坑 SK24 出土瓦  
(2) 土坑 SK27 出土炉壁体
- 図版 32 土坑 SK24、竪穴建物 SH14、掘立柱建物 SB50 など出土遺物
- 図版 33 (1) 竪穴建物 SH14・38 出土遺物  
(2) 竪穴建物 SH12・15・16・37 出土遺物
- 図版 34 (1) 竪穴建物 SH39 出土縄文土器-1  
(2) 竪穴建物 SH39 出土縄文土器-2
- 図版 35 (1) 竪穴建物 SH39 出土縄文土器-3  
(2) 竪穴建物 SH39 出土縄文土器-4
- 図版 36 竪穴建物 SH39 出土縄文土器-5
- 図版 37 竪穴建物 SH39 出土縄文土器-6
- 図版 38 (1) 竪穴建物 SH17 出土縄文土器  
(2) 竪穴建物 SH32 出土縄文土器
- 図版 39 (1) 土坑 SK51 など出土縄文土器  
(2) 土坑 SK33 出土縄文土器
- 図版 40 (1) 竪穴建物 SH39 出土打製石器-1  
(2) 竪穴建物 SH39 出土打製石器-2
- 図版 41 (1) 竪穴建物 SH39 出土磨製石器-1  
(2) 竪穴建物 SH39 出土磨製石器-2
- 図版 42 竪穴建物 SH39 出土磨製石器-3
- 図版 43 (1) 竪穴建物 SH39 出土磨製石器-4  
(2) 竪穴建物 SH17、土坑 SK51 など出土打製石器
- 図版 44 竪穴建物 SH17 など出土磨製石器



## 挿 図 目 次

第 1 図	長岡京と調査地の位置 (1/40000) .....	iii
第 2 図	発掘調査地位置図 (1/5000) .....	1
第 3 図	調査前風景 (西から) .....	5
第 4 図	発掘作業風景 1 (北西から) .....	5
第 5 図	発掘作業風景 2 (南東から) .....	5
第 6 図	専門委員の視察風景 (東から) .....	5
第 7 図	千葉豊氏の視察風景 (北西から) .....	5
第 8 図	現地説明会風景 (南東から) .....	5
第 9 図	地区割り図 (1/500) .....	6
第 10 図	調査区検出遺構図 (1/200) .....	7・8
第 11 図	調査区東壁土層図 (1/50) .....	9
第 12 図	調査区北壁土層図 (1/50) .....	10
第 13 図	調査区西壁土層図 (1/50) .....	11
第 14 図	土坑 SK02 実測図 (1/40) .....	12
第 15 図	溝 SD04・06・08・19 土層図 (1/20) .....	13
第 16 図	溝 SD18 実測図 (1/100・1/40) .....	14
第 17 図	掘立柱建物 SB11 実測図 (1/80) .....	16
第 18 図	掘立柱建物 SB50 実測図 (1/80) .....	17
第 19 図	土坑 SK24 実測図 (1/40) .....	18
第 20 図	土坑 SK27 実測図 (1/40) .....	18
第 21 図	小穴 P95 実測図 (1/20) .....	18
第 22 図	小穴 P40・163 実測図 (1/20) .....	18
第 23 図	竪穴建物 SH12・13 実測図 (1/50) .....	20
第 24 図	竪穴建物 SH12 カマド実測図 (1/20) .....	21
第 25 図	竪穴建物 SH14 実測図 (1/50) .....	21
第 26 図	竪穴建物 SH14 カマド実測図 (1/20) .....	22
第 27 図	竪穴建物 SH15・16 実測図 (1/50) .....	23
第 28 図	竪穴建物 SH15 カマド実測図 (1/20) .....	24
第 29 図	竪穴建物 SH29 実測図 (1/50) .....	24
第 30 図	竪穴建物 SH29 カマド実測図 (1/20) .....	25
第 31 図	竪穴建物 SH37・38 実測図 (1/50) .....	26

第 32 図	竪穴建物 SH37 カマド実測図 (1/20)	27
第 33 図	竪穴建物 SH38 カマド実測図 (1/20)	27
第 34 図	掘立柱建物 SB20 実測図 (1/80)	28
第 35 図	掘立柱建物 SB47 実測図 (1/80)	28
第 36 図	掘立柱建物 SB23 実測図 (1/80)	29
第 37 図	竪穴建物 SH17 実測図 (1/50)	30
第 38 図	竪穴建物 SH17 の石囲炉と支柱穴実測図 (1/20)	31
第 39 図	竪穴建物 SH32 の炉と支柱穴実測図 (1/20)	33
第 40 図	竪穴建物 SH39 実測図 (1/50)	34
第 41 図	竪穴建物 SH39 から出土した礫	34
第 42 図	竪穴建物 SH39 の炉と支柱穴実測図 (1/20)	35
第 43 図	土坑 SK22 実測図 (1/20)	36
第 44 図	土坑 SK33 実測図 (1/20)	36
第 45 図	土坑 SK45 実測図 (1/40)	37
第 46 図	土坑 SK46 実測図 (1/20)	37
第 47 図	土坑 SK26・28・30・31・34・35 実測図 (1/40)	38
第 48 図	井戸 SE03、溝 SD04・18、小穴 P102 出土遺物実測図 (1/4)	39
第 49 図	土坑 SK24 出土遺物実測図 (1/4)	40
第 50 図	瓦類実測図 (1/4)	41
第 51 図	掘立柱建物 SB11・50、小穴出土遺物実測図 (1/4)	43
第 52 図	竪穴建物出土遺物実測図 (1/4)	45
第 53 図	竪穴建物 SH39 出土縄文土器実測図-1 (1/3)	47
第 54 図	竪穴建物 SH39 出土縄文土器実測図-2 (1/3)	49
第 55 図	竪穴建物 SH39 出土縄文土器実測図-3 (1/3)	50
第 56 図	竪穴建物 SH39 出土縄文土器実測図-4 (1/3)	51
第 57 図	竪穴建物 SH39 出土縄文土器実測図-5 (1/3)	52
第 58 図	竪穴建物 SH17 出土縄文土器実測図 (1/3)	53
第 59 図	竪穴建物 SH32 出土縄文土器実測図 (1/3)	54
第 60 図	竪穴建物、土坑、小穴出土縄文土器実測図 (1/3)	54
第 61 図	土坑 SK33 出土縄文土器実測図 (1/3)	54
第 62 図	竪穴建物 SH17 内土坑 SK44 出土耳栓実測図 (1/2)	56
第 63 図	竪穴建物 SH39 出土打製石器実測図-1 (1/2)	57
第 64 図	竪穴建物 SH39 出土打製石器実測図-2 (1/2)	58
第 65 図	竪穴建物 SH39 出土磨製石器実測図-1 (1/2)	59
第 66 図	竪穴建物 SH39 出土磨製石器実測図-2 (1/4)	60

第 67 図	竪穴建物 SH17、土坑 SK51、小穴など出土打製石器実測図 (1/2) .....	62
第 68 図	竪穴建物、土坑、小穴出土磨製石器実測図 (1/2・1/4) .....	63
第 69 図	長岡京跡右京八条三坊九・十六町周辺の遺構配置図 (1/2000) .....	65
第 70 図	伊賀寺遺跡の飛鳥時代遺構分布図 (1/2000) .....	67
第 71 図	伊賀寺遺跡の縄文時代中期末竪穴建物分布図 (1/2000) .....	70

## 付 表 目 次

付表-1	伊賀寺遺跡の飛鳥時代竪穴建物一覧表 .....	68
付表-2	京都盆地縄文中期末の竪穴建物一覧表 .....	71
付表-3	出土遺物観察表-飛鳥時代以降 .....	75
付表-4	出土遺物観察表-縄文時代中期 .....	79
付表-5	出土遺物観察表-石器 .....	83
付表-6	報告書抄録 .....	85





## 2 位置と環境

小の河川が形成した後背湿地や氾濫原に至っている。段丘や扇状地内には、いくつもの開析谷が存在し、谷を堰き止めて造られたいくつもの溜池を現在でも認めることができる。

本調査地は、長岡京市の南部地域にあたる下海印寺伊賀寺から友岡西畑にかけて所在しており、調査地の中央部を下海印寺と友岡との大字界が南北に通っている。また、阪急京都線の西山天王山駅より北北西約 250 m の地点に位置しており、調査地のすぐ西側に面して府道大枝高槻線（愛称・文化センター通り）が、約 100 m 東側には阪急京都線がそれぞれ北東から南西方向に走っている。さらに、南側約 120 m には、京都縦貫道が北西から南東に向かって走り、長岡京インターチェンジが設置されている。西山天王山駅は、長岡天神駅と大山崎駅の間で 2013 年 12 月 21 日に開業した新駅で、駅舎の真上を京都縦貫道が交差するように走っており、関東や北陸、中国地方など多方面に向かう高速バスの停車場が設置されている。

調査地の現状は、水田と畑地が大半を占めていたが、敷地の北西部は駐車場として造成された結果、一段高くなっていた。調査地を地形的にみると、北西から南東に向かって緩やかに傾斜する低位段丘 I 上に立地しており、地表面の標高は西端で約 29.2 m、東端で約 28.95 m を測る。調査地のすぐ南西には、比高が 1.5 m 前後ある段丘崖が北西から南東に向かって走っており、段丘崖の下は低位段丘 II に至り、さらに南西約 150 m の地点には南東方向に流下する小泉川とその氾濫原が広がっている。小泉川は、現在築堤の改修工事などによって北西から南東方向に向かう直線的な流路になっているが、かつては大きな蛇行を繰り返す暴れ川であったことが知られていて、川の両岸には蛇行する旧流路の痕跡が地割りとなって明瞭に残っている。

### （2） 周辺の調査と歴史的環境

調査地は、長岡京の条坊復原によると、京の南端に近い右京八条三坊九町にあたることはもとより、縄文時代以降の複合遺跡である伊賀寺遺跡および友岡遺跡の範囲にも含まれる所であり、さらに阪急京都線を隔てた東側には、乙訓地域で最古級の寺院跡として知られている鞆岡廃寺が所在するなど、恵まれた歴史的環境の中に位置している。

伊賀寺遺跡は、昭和 56（1981）年に実施された長岡京跡右京第 70 次調査<sup>(註1)</sup>（以下では煩雑さを避けるため長岡京跡右京を略して表示することにする）によって発見された重複遺跡であり、また、その東に位置する友岡遺跡は縄文時代から鎌倉時代にかけての重複遺跡であることが知られている。本調査地の周辺では、第 70 次調査以降に昭和 57（1982）年の第 118 次調査<sup>(2)</sup>や昭和 58（1983）年の第 136 次調査<sup>(3)</sup>、それに平成 4（1992）年の第 387 次調査<sup>(4)</sup>などがわずかに実施されている程度であった。ところが、平成 15（2003）年から始まった京都縦貫道路敷設工事、およびそれに関連する府道の敷設工事などに伴う事前の発掘調査が公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターによって継続的に実施された。さらに、平成 21（2009）年からは、長岡京市教育委員会と当埋蔵文化財センターが伊賀寺遺跡の規模や遺存状況などを確認するための国庫補助事業による調査を継続的に実施した結果、いくつもの注目に値する重要な成果が得られつつあった。以下では、これまでの伊賀寺遺跡の調査で検出された遺構、遺物の概要について、時代ごとにまとめておこう。

**縄文時代** まず、草創期の石器である有茎尖頭器が、第70次調査と第941次調査<sup>(5)</sup>で出土しているが、この時期に該当する縄文土器はもとより、遺構もまったく確認されていないので、遺跡の実態は不詳である。

次いで中期末（北白川C式期）になると、大量の遺構・遺物が発掘されていて、集落の形成が始まったことを知ることができる。この時期の遺構としては、竪穴建物が第910次調査<sup>(6)</sup>で1棟、第927次調査<sup>(7)</sup>で4棟、第941次調査で1棟、第943次調査<sup>(8)</sup>で1棟、第988次調査<sup>(9)</sup>で1棟がそれぞれ検出されており、そのうち石囲炉を伴うものが2棟（第927次・第943次調査）確認されている他、土坑も8基（第927次調査）が発掘されている。こうした中期末の竪穴建物を中心とする遺構群がまとまって確認された事例は京都府下はもとより、近畿地方においても極めて稀少であるだけに、集落の規模や構造などを検討する上で貴重な成果を提供してくれた。

後期に下っても引き続き集落形成が行われていて、前半（中津式～北白川上層式期）の竪穴建物が第927次・第988次調査で2基確認されている他、土坑も大量に確認されている。また、後半（元住吉山式～宮滝式期）では、第941次調査で竪穴建物が7棟、第943次調査では竪穴建物2棟と土壙墓16基などが確認され、居住域と墓域の双方が一体となって発掘された意義は大きい。とりわけ、第943次調査で火葬骨を埋納した土坑が2基確認されたことは注目に値する。いずれも数人分の成人を集骨した状態で埋葬した土坑で、そのうちの1基からは完形に近い注口土器が1点、またもう1基からは碧玉製の玉類が20点ほど出土しており、これらの遺物は副葬品である可能性が考えられている。さらに、第975次調査<sup>(10)</sup>では、碧玉製玉類の未成品などが出土していることから、この地で石器とともに、玉類の加工・生産も行われていたことが確実視できる。

晩期では、第988次調査で滋賀里Ⅲ式の深鉢と礫を埋納した円形の小土坑が1基確認されている他、第910次調査で類例の乏しい石冠が1点出土していることは興味深い。

**弥生時代** この時代の遺構・遺物は後期末～庄内式期のものが確認されているが、他の時代に比べて確認事例が乏しいといえる。ここでは、庄内式期のものを弥生時代後期末として扱うことにする。

第927次調査で竪穴建物が2棟、第943次・第947次調査<sup>(11)</sup>で竪穴建物2棟と土坑2基などが確認されている。竪穴建物は、いずれも隅円方形を呈しており、中央炉と辺の中央に貯蔵穴とみられる小土坑を設けていた。土器の中には、受け口状口縁をもつ近江系の甕などが出土している。

**古墳時代** 古墳時代では、庄内式期をのぞく大半が後期の遺構・遺物であり、後期の集落が低位段丘Ⅱ上を中心として広範囲に営まれていることが知られている。

後期の竪穴建物は、第927次調査で3棟と第941次調査で8棟確認されている他、第943次調査で溝1条、第988次調査で溝1条と落ち込みなどの遺構が確認されている。竪穴建物は、平面形態が隅円方形を呈するものが大半を占めており、辺の中央部付近に馬蹄形のカマドを造り付けていた。時期的には、陶邑編年のMT15型式からTK209型式まで及んでおり、おおむね6世紀代を通じて継続的に集落の営まれていることが明らかになっている。

#### 4 調査経過

**飛鳥時代** 第70次調査で竪穴建物7棟、右京第941次調査で竪穴建物1棟が確認されており、いずれも低位段丘I上に立地している。この時期の竪穴建物は、古墳時代後期のものに比べて平面形態が隅円長方形になるだけでなく、規模も小さくなるという特徴が認められる。また、支柱穴が不明瞭で、カマドの設置位置も辺の中央部ではなく、どちらかに偏在している事例が多いことも特徴の一つに加えることができる。

**長岡京期** 長岡京の条坊復原によると、当地周辺は右京七条三坊～八条三坊に相当することになるが、長岡京期の遺構・遺物の確認事例は必ずしも多いとはいえない。

まず、右京八条三坊九町では、第708次調査で溝<sup>(12)</sup>1条、第910次調査で掘立柱建物3棟と土坑1基、第941次調査で土坑1基が確認されている。掘立柱建物は、おおむね正方位を向いていたが、方形土坑は北で西に27°程度振れる特徴がある。

次に、西隣の右京八条三坊十六町では、第927次・第941次・第988次調査で平行して延びる幅2.6～4.5mの東西方向の溝が2条確認されており、平瓦や丸瓦などがまとまって出土している。2条の溝は、正方位ではなく、東で北に7°程度振れる特徴があり、溝間の幅が3.2～3.5m前後しかなく、道路面としては狭すぎることから、築地堀の雨落ち溝であった可能性が推察できる。この他、この町内では、第941次調査で方形土坑や第1033次調査で銭貨を土師器甕<sup>(13)</sup>に入れた埋納遺構なども確認されている。

**平安時代以降** 平安時代以降の遺構・遺物については、確認事例が他の時代に比べて必ずしも多くない状況である。

第70次調査では、13世紀代に比定される掘立柱建物6棟と土坑3基などの遺構群が確認されている。掘立柱建物は、いずれも地形の傾斜に沿った方位で建てられているが、重複関係や建物の方位などから3期に細分されている。時期が下るに従って、建物規模が大きくなり、その方位も正方位に近づく傾向にあることが指摘されている。また、第70次調査地の南東で実施された第941次調査では、12世紀後半～13世紀前半の土壙墓1基と集石墓3基などが検出されている。両者は、同時期の居住域と墓域の関係として捉えることができ、低位段丘I上に中世集落が形成されていたことを知ることができる。

## 2 調査経過

今回の第1073次調査は、店舗建設工事に伴う事前の発掘調査として実施したものである。調査にあたっては、敷地周辺の擁壁施工および造成工事と並行して行うことになったため、当初より調査区全体を掘り下げて調査を進めることはできず、工事の影響を受ける部分については、後日工事の終了を待って行うことになった。

調査は、まず平成25(2013)年10月22日から30日までの6日間、重機によって盛土と耕作土などの除去を行い、一部それと並行するように10月28日からは作業員を動員して遺構を検出するための精査を開始した。調査区が広範囲に及ぶため、調査区全体を5m方眼に地区割りを行って遺物などの取り上げを行った(第9図)。調査が進むに従って、近世以降の溝、土坑、





第3図 調査前風景（西から）



第4図 発掘作業風景1（北西から）



第5図 発掘作業風景2（南東から）



第6図 専門委員の視察風景（東から）



第7図 千葉豊氏の視察風景（北西から）



第8図 現地説明会風景（南東から）

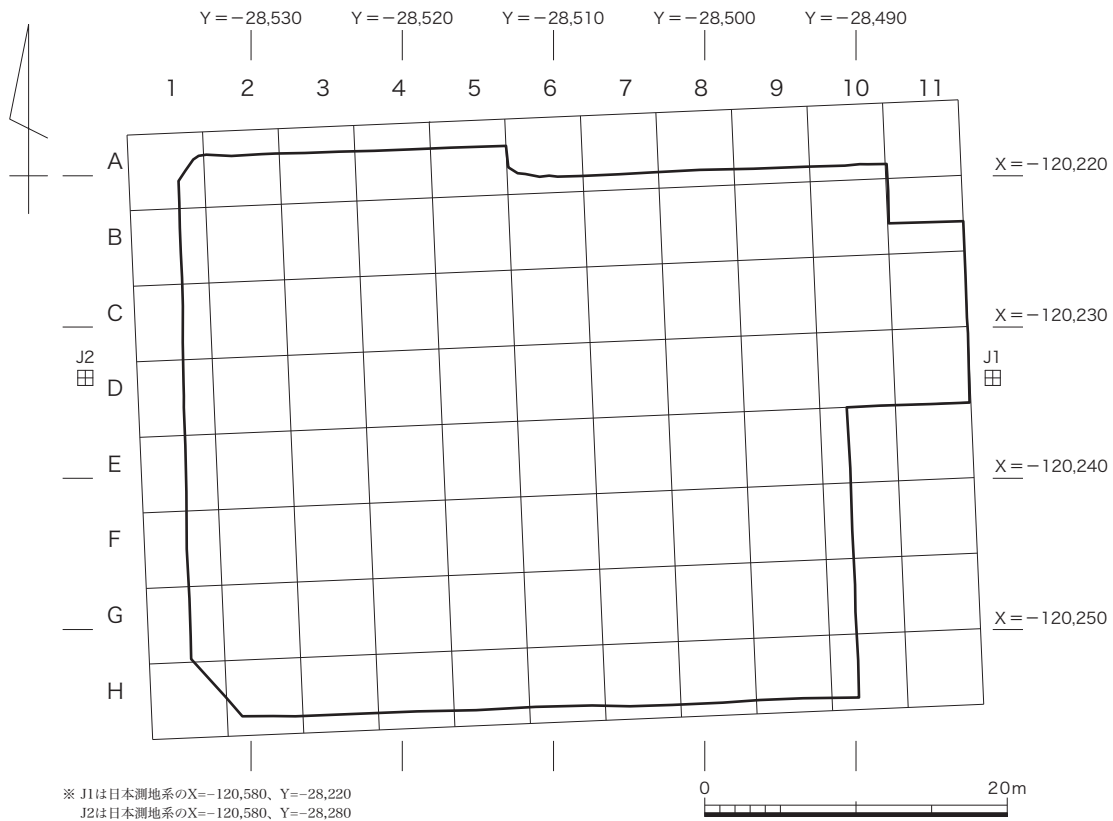


6 調査経過

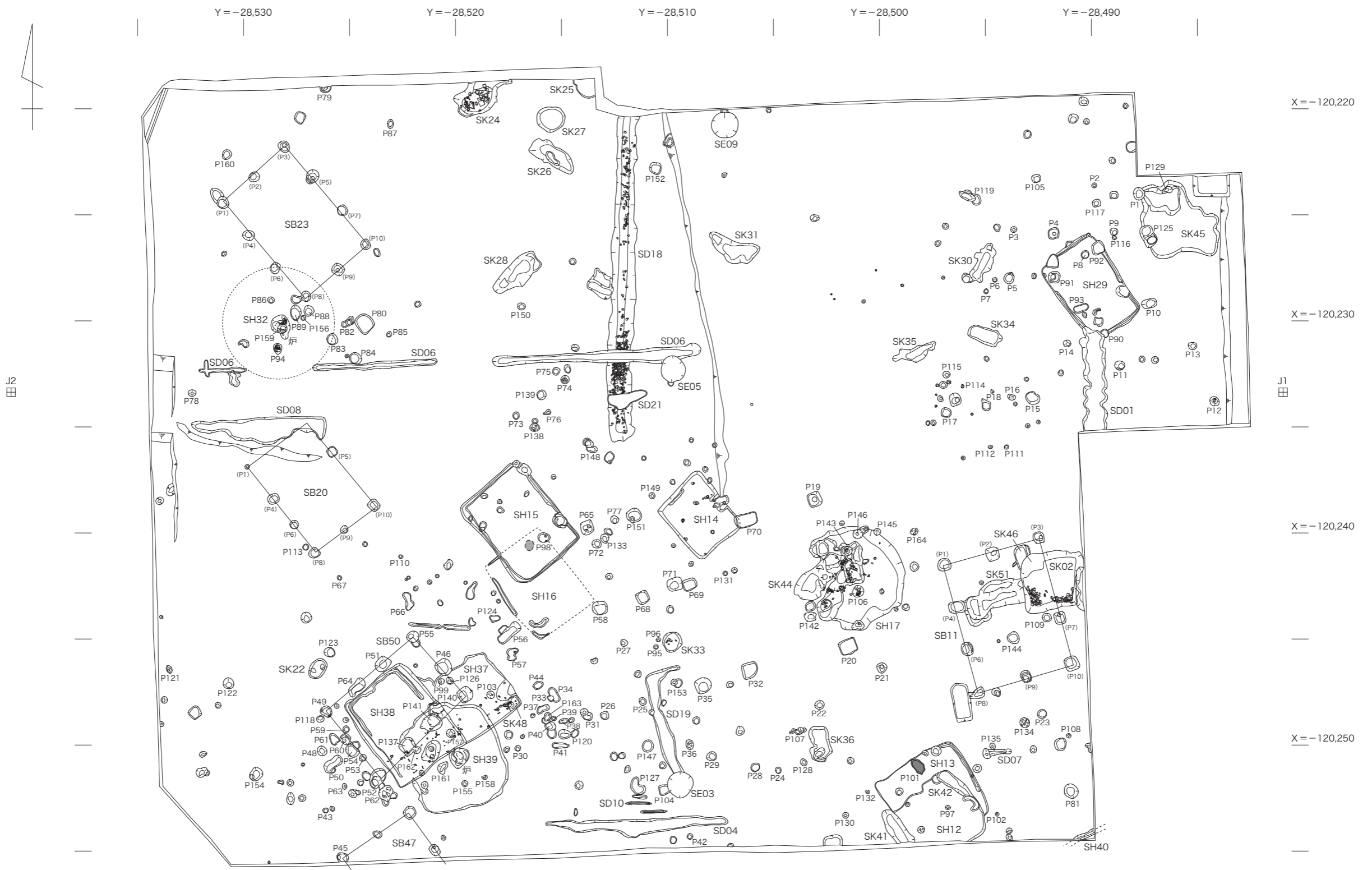
井戸および中世の溝などを検出するとともに、長岡京期の掘立柱建物や土坑、飛鳥時代の竪穴建物と掘立柱建物、さらには縄文時代の竪穴建物や土坑など各時代、各種類に及ぶ数多くの遺構を検出することができた。11月29日には、工事用通路として掘り残しておいた調査区の南東隅と南西隅を重機で掘削して調査を進め、12月5・6両日に検出した遺構群の実測作業を行い、年末にあたる12月26日に現地での調査を一旦中断した。

翌平成26(2014)年1月6日から調査を再開し、9日に最後まで手付かずであった調査区北西隅部分を重機で掘削して、ようやく当初に計画した調査区全体を掘り下げることができた。1月14日から遺構の実測作業を行い、1月18日には1回目の全景写真を撮影した。そして、2月5日に調査成果の内容を報道機関に発表するとともに、2月8日に現地説明会を開催した。現地説明会は、前日からの積雪と当日も曇交じりの悪天候で開催が危ぶまれたが、80人余りの参加者を得て、無事に終了できた。その後も縄文時代の竪穴建物などの調査を進め、2月21日に2回目(最終)の全景写真を撮影した後、2月24・25日には実測作業を行い、2月28日に約4ヶ月間に及ぶ現地での調査を終了することができた。この間、1月16日に当センターの専門委員である井上満郎、植村博直、都出比呂志、中尾芳治の各氏による現場視察を受けたことをはじめ、当日不参加であった泉拓良氏からも後日種々のご指導を受けた。さらに2月4日には、京都大学の千葉豊氏に現地で縄文時代に関する遺構・遺物の御教示を受けるなどした。

なお、調査区心の世界測地座標値は、 $X=-120,237$ 、 $Y=-28,510$ であった。



第9図 地区割り図 (1/500)



※ J1は日本測地系のX=-120,580、Y=-28,220  
 J2は日本測地系のX=-120,580、Y=-28,280

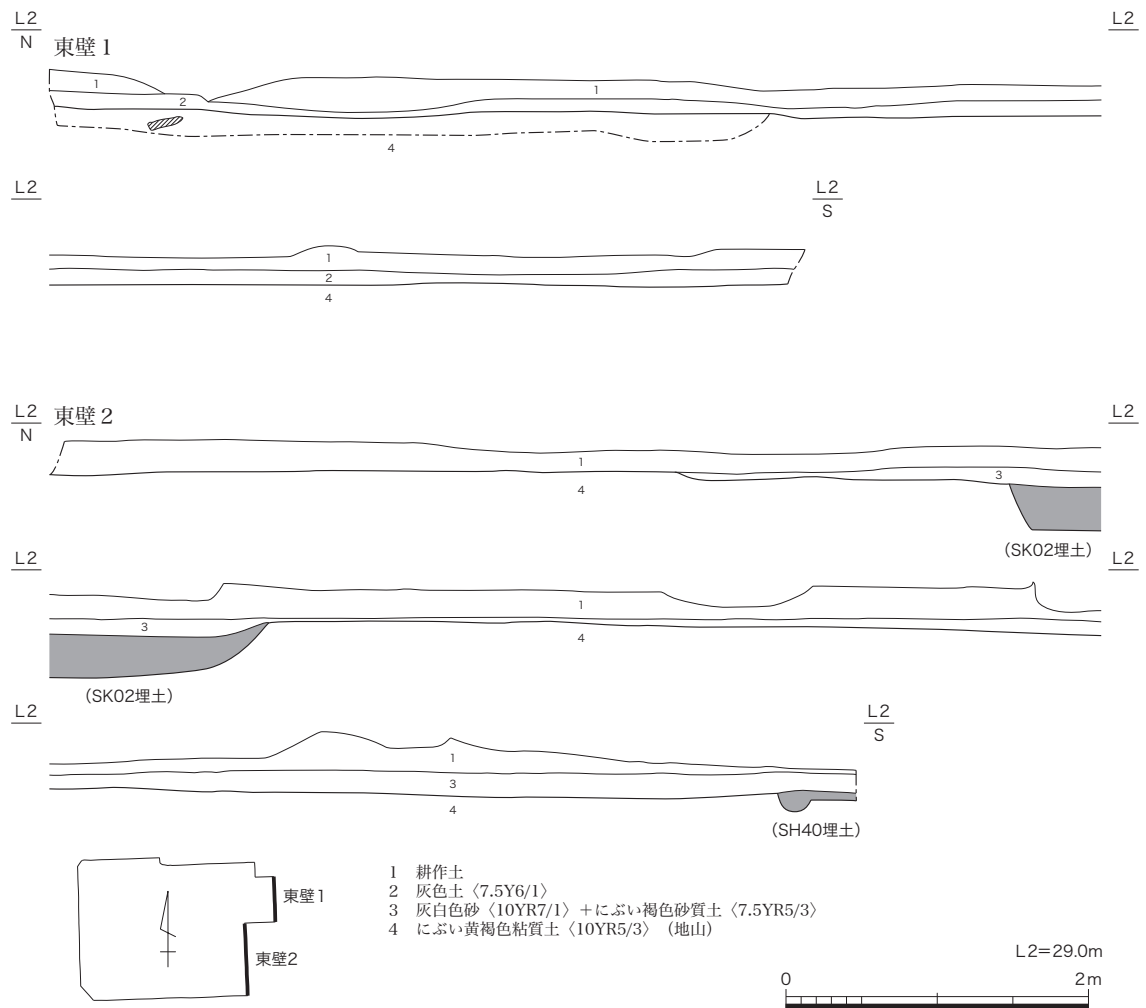
第 10 図 調査区検出遺構図 (1/200)

## 第2章 検出遺構

### 1 基本層序

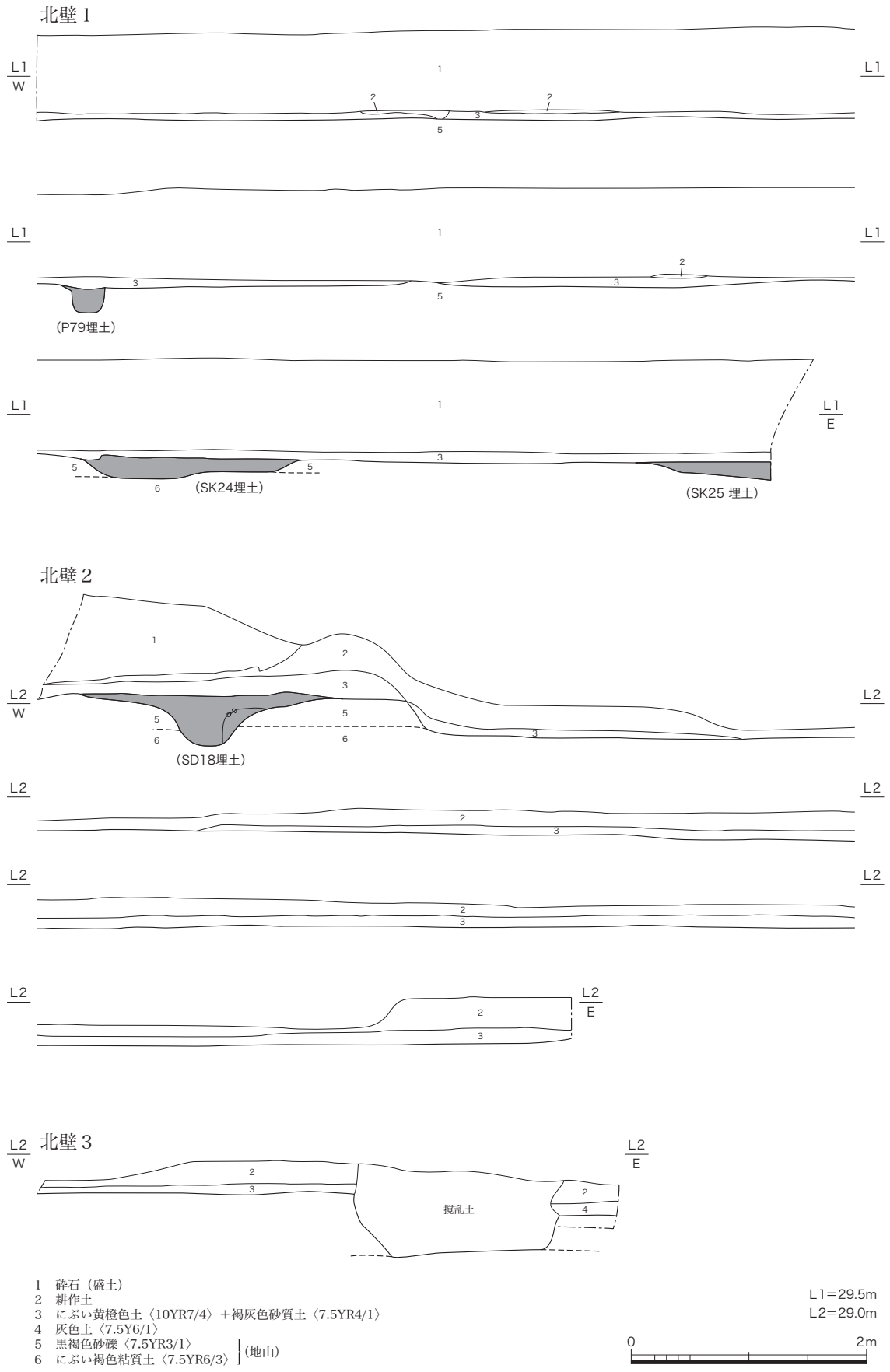
調査対象地の現状は、先にも述べたように水田および畑地になっており、対象地の北西部のみが盛土で造成された駐車場として利用されていた。水田と畑地は、大きく4面程度に分かれていて、調査区の中央部で西から東に落ち込む段差、および北から南に下る段差が認められた。

調査区内の基本層序は、上から耕作土（第2層）、にぶい黄橙色土と褐灰色砂質土が混じった土層（第3層）、黒褐色砂礫層（第5層）やにぶい褐色粘質土層（第6層）からなる地山であった（第12・13図）。耕作土は、厚さが0.1～0.25 mほどあり、にぶい黄橙色土と褐灰色砂質土が混じった土層は厚さが0.1 m程度の薄い土層であった。調査区の東端部では、耕作土と地山の間に灰色土層および灰白色砂とにぶい褐色砂質土が混じった土層が薄く堆積するなど、場所によって層序の状況が若干異なることを知ることができた（第11～13図）。とはいえ、地表面から地山面まで浅いことに大きな差はなかった。



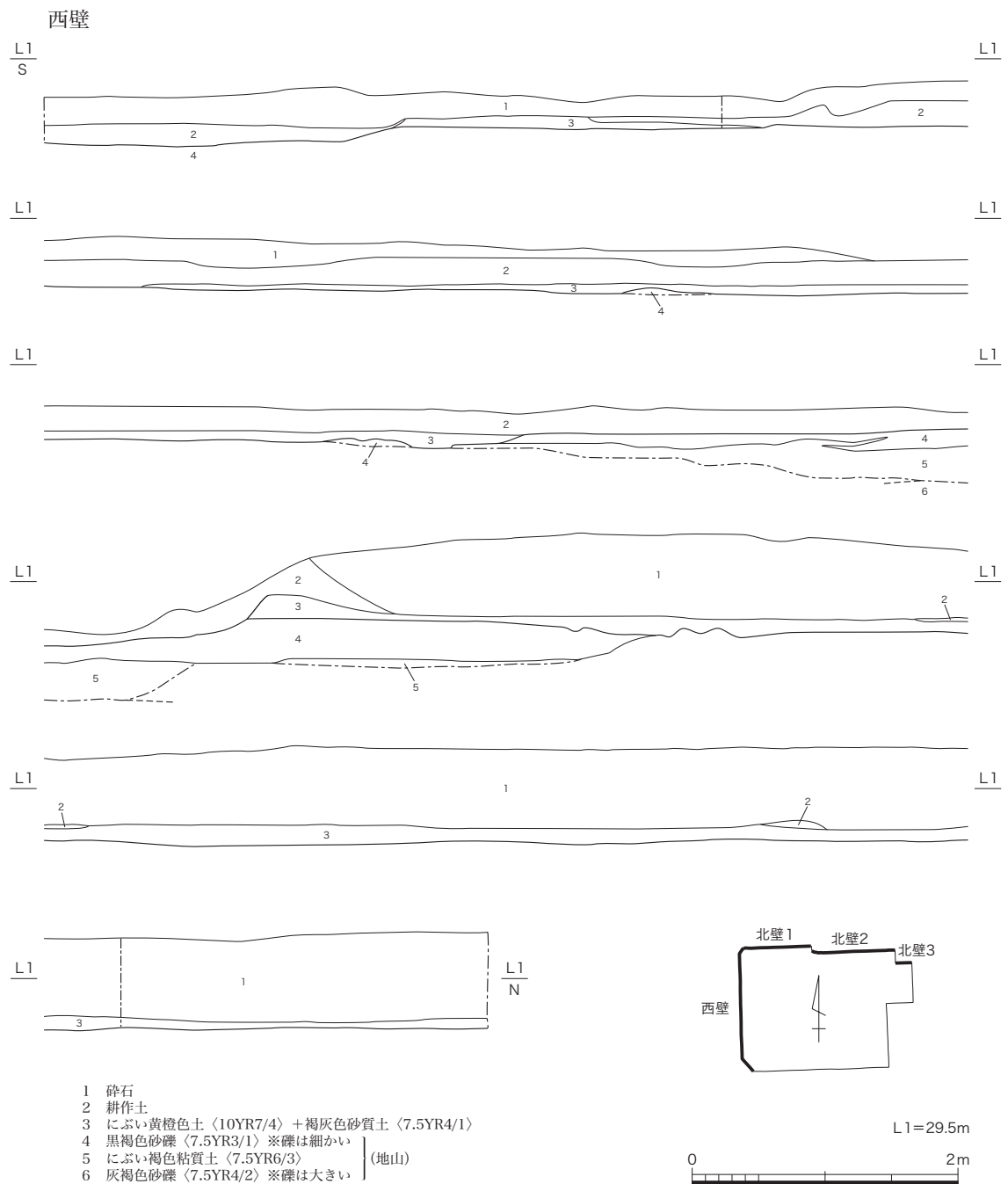
第11図 調査区東壁土層図 (1/50)

10 基本層序



第 12 図 調査区北壁土層図 (1/50)

地山は、今から数十万年前の更新世に形成された低位段丘を構成する土層であって、粘質土層系と砂礫層系に大きく分けることができそうである。地山面の標高は、調査区の北西隅で約 29.15 m、南西隅で約 28.9 m、北東隅と南東隅がともに約 28.5 m となり、おおむね北西から南東の方向に向かって緩やかに傾斜していることが分かった。遺構は、すべてこれら地山面上において検出したものであるが、遺構の残存状況が極めて悪いことを考慮するならば、地山面は後世に大きく削平を受けていることは確実である。したがって、すでに削平されて消滅してしまった遺構が多い可能性も十分にありうるものと予想された。



第13図 調査区西壁土層図 (1/50)

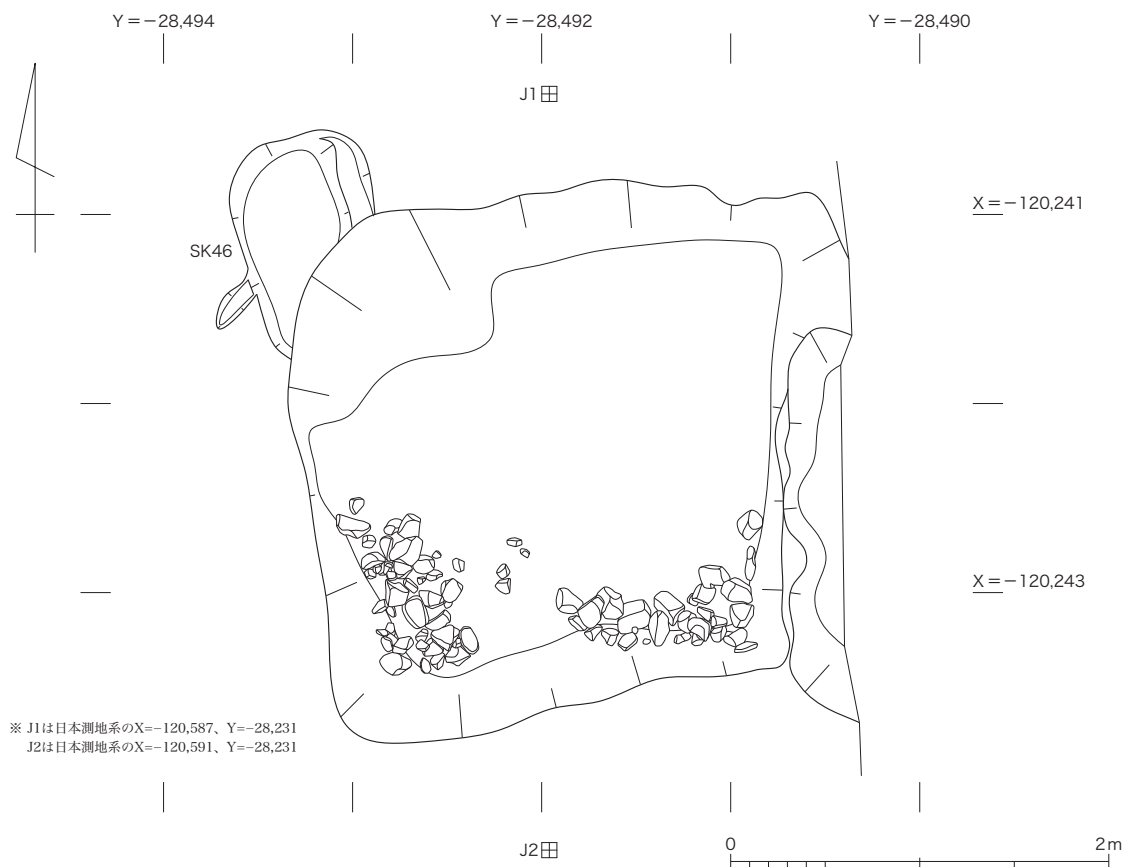
## 2 近世以降の遺構

近世以降と考えられる遺構には、溝6条、土坑1基、井戸3基、それにいくつかの小穴などがある。溝は、東西溝と南北溝の二者あり、井戸は南北に並んでいた。

**溝 SD01** 調査区の北東部で検出した南北方向に延びる素掘り溝で、長さ約 4.9 m分を確認したが、北側は調査区内で途切れ、また南側は調査区域外に延びている。溝の東西両肩は出入りが顕著にあり、幅は 1.1 m前後、深さ約 0.3 mの規模がある。埋土は灰褐色砂質土層であり、須恵器や染付などの遺物片が少量出土している。

**土坑 SK02** (第 14 図、図版 5) 調査区の南東部において検出した隅円方形の土坑である。土坑は、東西 3 m以上、南北約 2.8 m、深さは約 0.3 mの規模があり、埋土は灰黄褐色小礫混じり土層であった。土坑内には、拳大から人頭大の礫が南側に片寄った状態で埋没していた他、それらに混じって縄文土器や土師器、須恵器、棧瓦など新旧の遺物の破片が少量出土している。

**井戸 SE03** 調査区の南辺に近い中央部で検出した素掘りの井戸である。平面の形態は円形を呈しており、径は約 1.2 mの規模がある。壁面崩壊の危険があったため、検出面下 1.5 mまで掘り下げたところで断念した。土師器や須恵器、陶器などの破片が少量出土しており、水田耕作などに伴う給水用のものと考えられる。



第 14 図 土坑 SK02 実測図 (1/40)

**溝 SD04** (第 15 図) 調査区の中央部の南辺に沿って検出した東西方向の素掘り溝で、長さ約 8.6 m 分を確認した。幅 0.35 ~ 0.9 m、深さ約 0.1 m の規模があり、埋土は暗黄灰色砂質土層であった。染付や陶器の破片が少量出土している。

**井戸 SE05** (図版 5) 井戸 SE03 の北約 19.5 m の地点で検出した素掘りの井戸である。平面形は、径約 1.1 m の楕円形を呈していたが、この井戸の場合も 1.5 m 前後まで掘り下げたところで終わった。井戸内からは、土師器や染付、陶器などの破片が少量出土している。

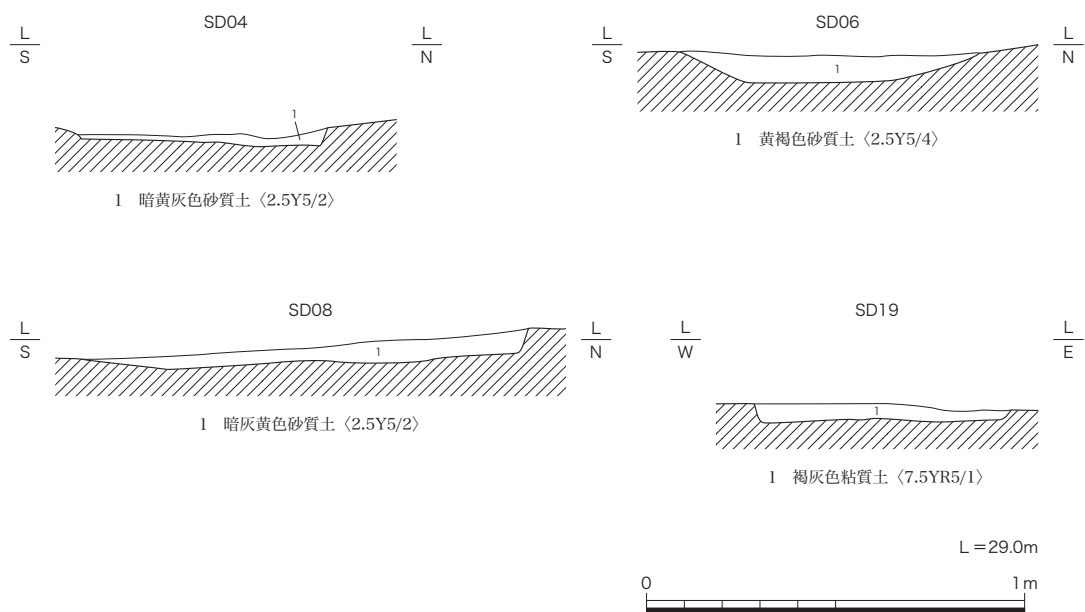
**溝 SD06** (第 15 図) 調査区の北西部において検出した東西方向の素掘り溝で、断続しながらも総長約 23.7 m 分を確認した。井戸 SE05 と重複しており、それよりも古いことが知られた。溝の幅は、0.2 ~ 0.7 m 前後、深さ約 0.1 m の規模があり、埋土は黄褐色砂質土層であった。土師器、須恵器、陶器の破片が少量出土している。

**溝 SD07** 調査区の南東部で検出した東西方向の素掘り溝であるが、長さにして約 1.1 m 分を確認したにすぎなかった。溝の幅 0.2 ~ 0.3 m、深さは 0.05 m ほどの規模で、出土した遺物はなかった。

**溝 SD08** (第 15 図) 溝 SD06 の南約 2.2 m の地点で検出した東西方向の素掘り溝で、長さ約 6.3 m 分を確認した。溝の幅 0.5 ~ 1.3 m、深さ約 0.1 m の規模があり、埋土は暗灰黄色砂質土層であった。土師器、須恵器、陶器の破片が出土している。

**井戸 SE09** (図版 5) 調査区の中央部北端、井戸 SE05 の北北東約 10.5 m の地点で検出した素掘りの井戸であるが、この井戸も検出面下約 1.5 m で掘り下げを断念した。平面形は、径約 1.1 m の円形を呈しており、陶器やガラスの破片が出土したことから、近代以降のものと考えられる。

**溝 SD10** 溝 SD04 のすぐ北で検出した東西方向の小溝で、陶器片が少量出土したのみである。

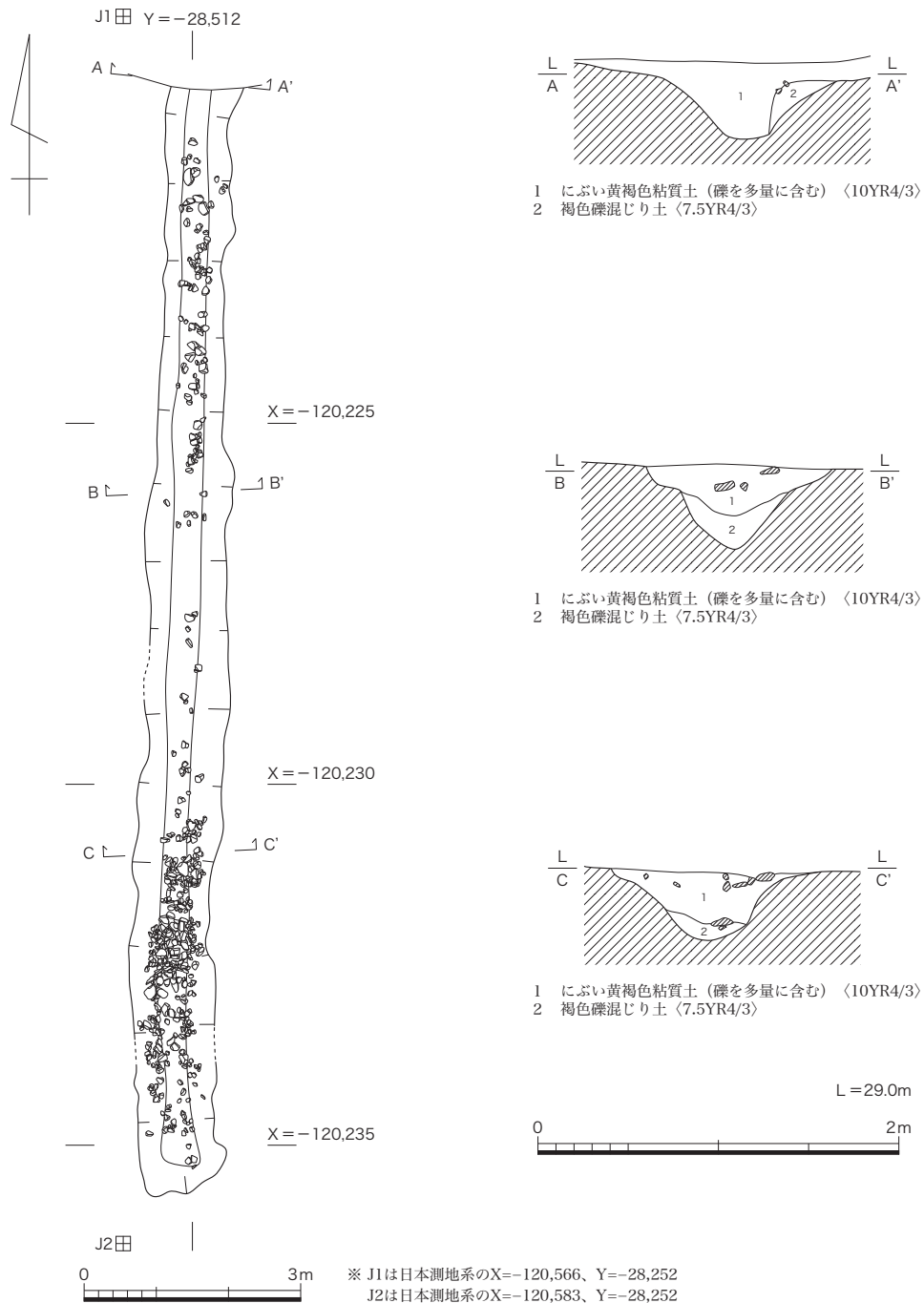


第 15 図 溝 SD04・06・08・19 土層図 (1/20)



**溝SD19** (第15図) 井戸SE03から北北西の方向に伸び、北端で東に短く折れ曲がる素掘り溝。溝幅0.3～0.7m、深さは約0.1mの規模がある。埋土は、褐灰色粘質土1層であり、土師器の破片が少量出土している。

**小穴P102** 調査区の南東部で検出した。径約0.2m、深さは0.2m前後の大きさがあり、埋土は灰褐色の砂質土層であった。小穴内からは、陶器の壺(第48図4)が1個体出土している。



第16図 溝SD18実測図 (1/100・1/40)



### 3 中世の遺構

この時期の遺構としては、溝を1条確認できたのみである。

**溝SD18** (第16図、図版6) 調査区のほぼ中央部で検出した南北方向に延びる素掘り溝で、溝SD06およびSD21と重複しており、それらよりも古いことを確認した。西から東に落ち込む段差の上部に位置していて、溝の方位は北で東にわずか3°程度振れている。南北に約15.4m分を確認したが、北側は調査区域外に続いているのに対して、南側は調査区の中央部で途切れている。この溝は、幅0.9～1.2m、深さが0.4～0.45mほどの規模があり、横断面はU字形を呈している。溝底にはほとんど凹凸が認められず、北から南に向かって緩やかに傾斜していた。溝の埋土は、にぶい黄褐色粘質土層と褐色礫混じり土層の上下2層に分けることができた。そのうち上層には拳大から人頭大ほどの大きさの礫が多量に埋没していた他、土師器、須恵器、緑釉陶器、瓦器、平瓦など平安時代と鎌倉時代の新旧の遺物片が混在した状態で出土している。

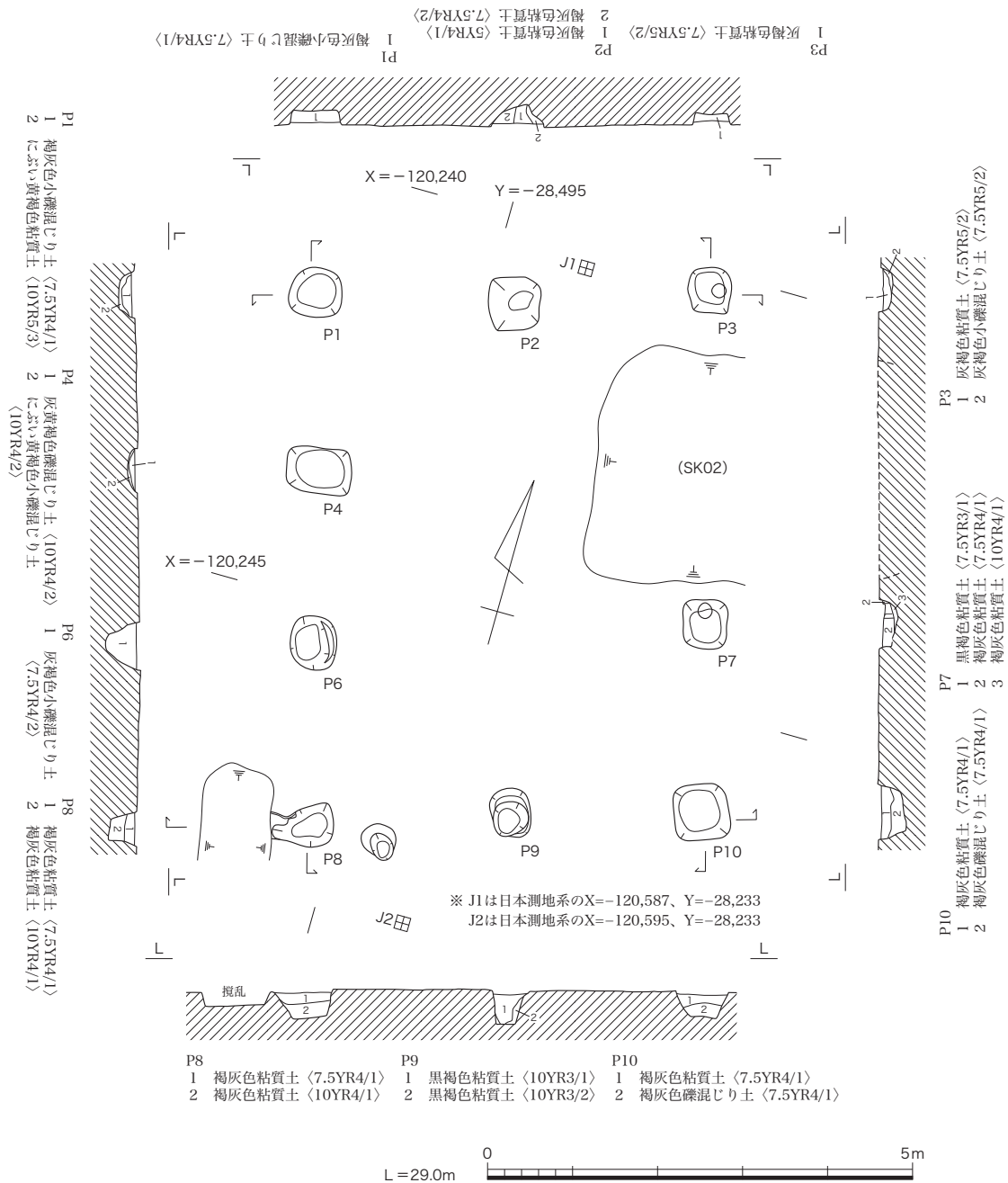
この溝の位置が、現在の大字界にほぼ重なっていることを考慮するならば、下海印寺と友岡の大字を限る境界溝として掘り窪められた可能性が濃厚と考えられる。

### 4 長岡京期の遺構

この時期の遺構には、掘立柱建物2棟と土坑3基、それにいくつかの小穴が確認されているが、数量的には多くない状況であった。

**掘立柱建物SB11** (第17図、図版7) 調査区の南東部で検出した桁行3間、梁行2間に復元できる南北棟建物で、方位は北で西に15°程度振れている。東側柱列の北から二番目の柱掘形は、近世の土坑SK02によって完全に破壊されていた。柱掘形は、隅円方形ないしは隅円長方形を呈しており、一辺が0.45～0.75m、深さは0.1～0.35mほどの規模がある。柱痕跡は、すべての柱掘形内で確認できたわけではないが、検出できた柱痕跡の径は約0.15mであった。出土した遺物は、全体的に乏しく、柱掘形P3から須恵器の杯A、P10から縄文時代の石匙などが出土しているにすぎない。柱間寸法は、桁行が約2.1m(7尺)等間、梁行約2.4m(8尺)等間に復元でき、面積にすると約30.24㎡となる。

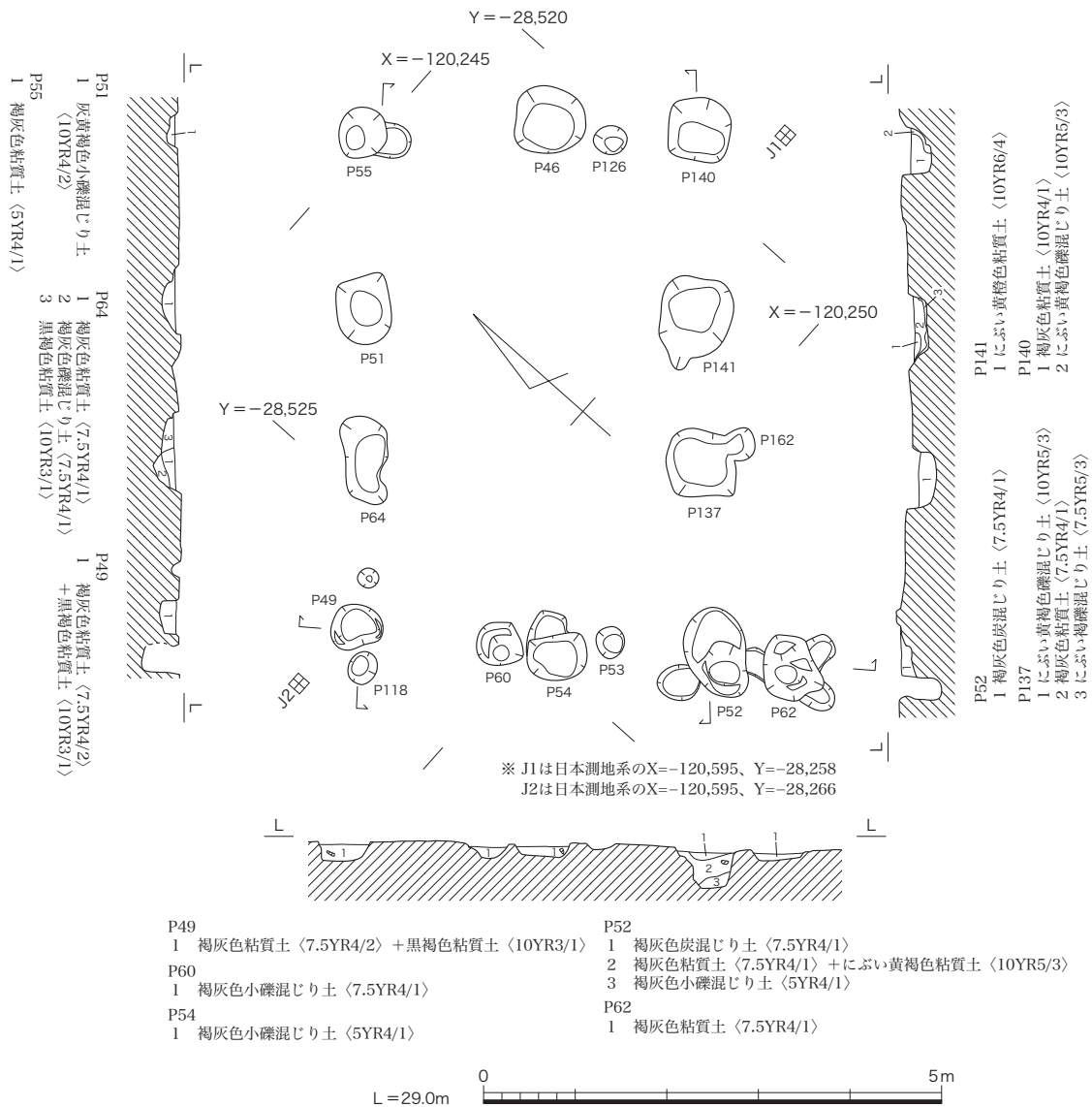
**掘立柱建物SB50** (第18図、図版8) 調査区の南西部において検出した桁行3間、梁行2間に復元できる東西棟建物で、方位は北で東に48°前後と大きく振れていた。飛鳥時代の竪穴建物SH38および縄文時代中期の竪穴建物SH39と重複していたため、重複する場所において柱掘形の検出に苦慮したが、それらよりも新しいことが確認できた。柱掘形は、隅円方形および楕円形を呈しており、一辺ないし径が0.5～0.8m、深さは0.2～0.4m程度残存していた。柱掘形内では、柱痕跡や柱抜き取りの痕跡を確認することはできなかったが、柱掘形P54・55・140・141からは土師器や須恵器の破片が出土した他、P137からはほぼ完形の状態の土師器の杯A(第51図47)や縄文時代の打製石鏃(第67図263)などが出土している。柱間寸法は、桁行がおおむね1.8m(6尺)等間であるのに対して、梁行は1.7～2mと不揃いであった。面積は、約



第17図 掘立柱建物SB11実測図(1/80)

20.52㎡に復元することができる。

**土坑SK24** (第19図、図版9) 調査区の北西部において検出した不整形な土坑で、北側は調査区域外に続いているため、全容は不明である。長辺2.8m以上、短辺約1.45m、深さは約0.35mの規模があり、埋土は暗褐色炭混じり土層とにぶい黄褐色粘質土層の上下2層に分けることができた。土坑内からは、土師器の皿や須恵器の杯B・杯B蓋・壺・甕、それに平瓦など長岡京期に比定することのできる遺物がまとめて出土している。



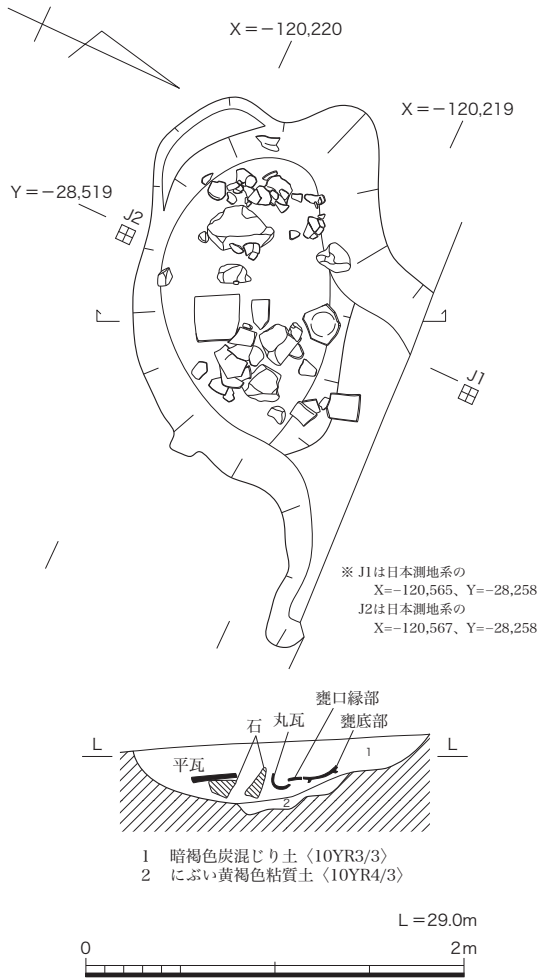
第18図 掘立柱建物SB50実測図 (1/80)

**土坑 SK25** (図版 10) 土坑 SK24 の東側で確認した不整形な土坑であるが、大半が調査区域外にあるため、全体の様相は不明であった。東西 1 m 以上、南北 0.9 m 以上、深さは 0.1 m ほどの規模しかなく、埋土は暗褐色粘質土層であった。土坑内からは、土師器と須恵器の破片が少量出土したのみである。

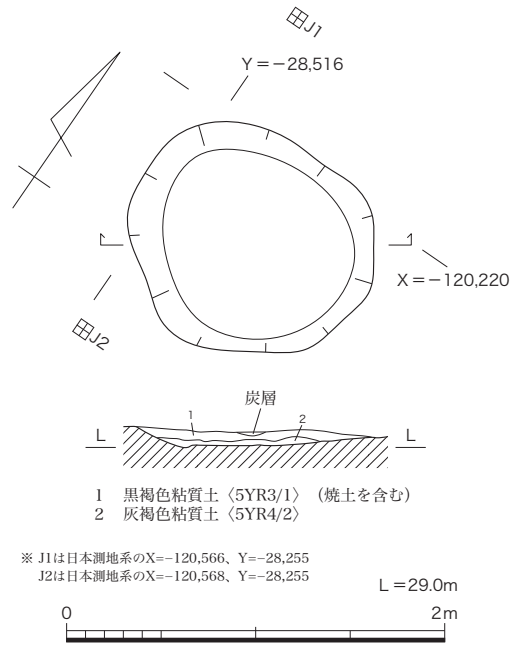
**土坑 SK27** (第 20 図、図版 10) 土坑 SK25 のすぐ南西で検出した楕円形を呈する土坑である。直径は 1.2 ~ 1.3 m、深さは約 0.1 m しか遺存しておらず、埋土は黒褐色粘質土層と灰褐色粘質土層の上下 2 層に分けられ、上層には焼土が含まれていた。土坑内からは、土師器や須恵器の細片に混じって炉壁体とみられる破片がまとめて出土している。

**小穴群** (第 21・22 図、図版 10) 当該時期の遺物が出土した小穴は、調査区内の各所で検出したが、その数は多くはなく、しかも形態や規模は一様ではなかった。そして、掘立柱の建物や塀として明確に並ぶものは確認できなかった。

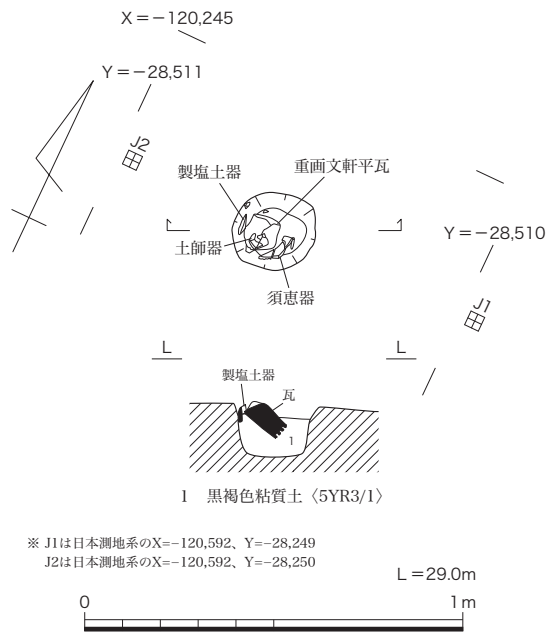
18 長岡京期の遺構



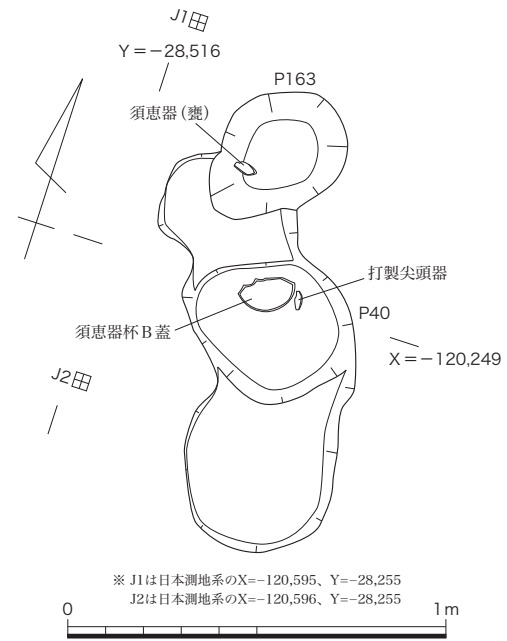
第19図 土坑SK24実測図 (1/40)



第20図 土坑SK27実測図 (1/40)



第21図 小穴P95実測図 (1/20)



第22図 小穴P40・163実測図 (1/20)

小穴 P8 は、調査区北東部の SH29 と重複した状態で検出したもので、径が 0.3 m ほどの楕円形を呈し、須恵器の杯 B 蓋などが出土した。

小穴 P12 は、調査区北東部で検出した径約 0.45 m の楕円形を呈する小穴で、須恵器の杯 B などが出土した。

小穴 P40 は、調査区南西部で検出した径約 0.2 m、深さ 0.13 m ほどの小穴で、反転した状態の須恵器杯 B 蓋が縄文時代の打製尖頭器とともに出土している。

小穴 P56 は、調査区南西部の飛鳥時代の竪穴建物 SH16 と SH37 の間で確認した隅円方形の小穴で、土師器の壺 E などが出土している。

小穴 P84 は、調査区北西部で検出した径 0.55 m 程度の楕円形を呈する小穴。製塩土器の破片が少量出土した。

小穴 P91 と P92 は、ともに調査区北東部の竪穴建物 SH29 と重複した状態で検出したもので、いずれも一辺 0.5 m 前後の隅円方形を呈していた。P91 から須恵器の杯 B や甕などが、P92からは土師器の杯 B などが出土している。

小穴 P95 は、調査区中央の南部、縄文時代の土坑 SK33 のすぐ西で検出した小穴で、径約 0.21 m 前後の楕円形を呈しており、深さは 0.13 m 程度あった。埋土は、黒褐色粘質土層で、重弧文軒平瓦をはじめ土師器や須恵器、製塩土器などの破片が少量出土している。

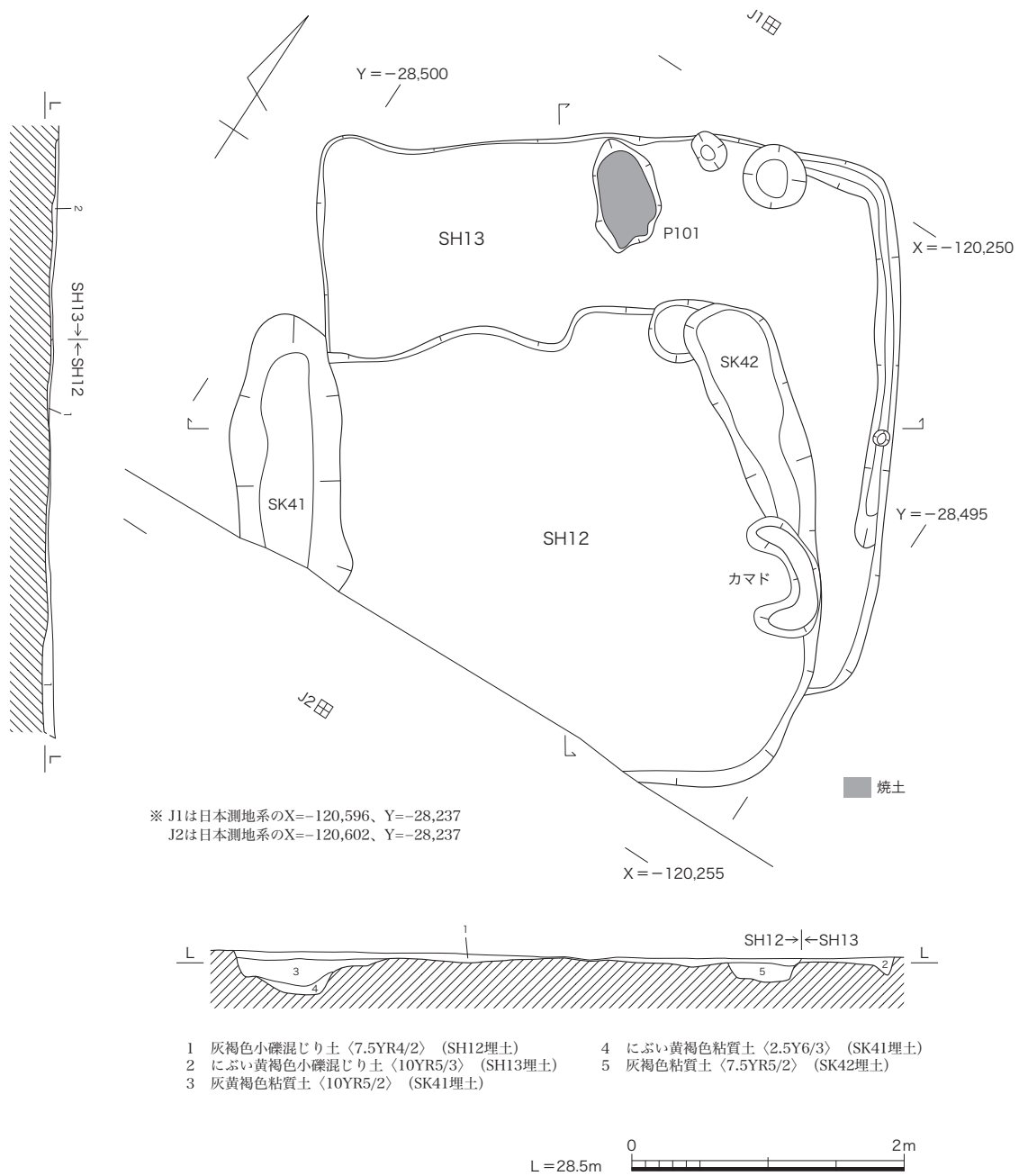
## 5 飛鳥時代の遺構

この時代の遺構としては、竪穴建物 9 棟、掘立柱建物 3 棟、それに小穴などがある。そのうち、掘立柱建物については、出土した遺物が極めて乏しいため、明確な時期を確定できない要素を残すが、竪穴建物との方位の類似性を重視して、この時代に属するものと考え記述することにする。

**竪穴建物 SH12** (第 23・24 図、図版 11) 調査区の南東部で検出した竪穴建物である。建物は、東西約 4.3 m、南北約 3.5 m の規模に復元できる東西に長い隅円長方形を呈しているが、約 0.15 m 分の深さしか遺存していなかった。建物の北東辺に土坑 SK42、南西辺に土坑 SK41 が掘り窪められており、これらは幅の広い周壁溝になるかも知れない。床面は、おおむね平坦であるものの、支柱穴を全く確認することはできなかった。

北東辺の中央やや南寄りにカマドを造り付けており、カマドを主軸とした建物の方位（以下同じ）は北で東に 55° 程度振れていた。カマドは、幅約 0.9 m、奥行き約 0.55 m の馬蹄形を呈するものであるが、遺存状態が極めて不良であり、高さは約 0.1 m しか残っていなかった。カマド内はもとより、建物内からもほとんど遺物は出土しなかったが、土坑 SK41 から須恵器の杯 H 蓋と刀子などの遺物が出土している。この遺物の特徴から、建物の埋没年代を類推すると、7 世紀の前半に比定することができる。

**竪穴建物 SH13** (第 23 図、図版 11) 竪穴建物 SH12 と重複した状態で検出した竪穴建物で、SH12 よりも古いことが明らかになった。建物は、東西約 4.25 m、南北約 4 m の規模に復元できる隅円方形を呈しているが、深さはわずかに 0.04 m しか遺存しておらず、土師器の破片が少



第 23 図 竪穴建物 SH12・13 実測図 (1/50)

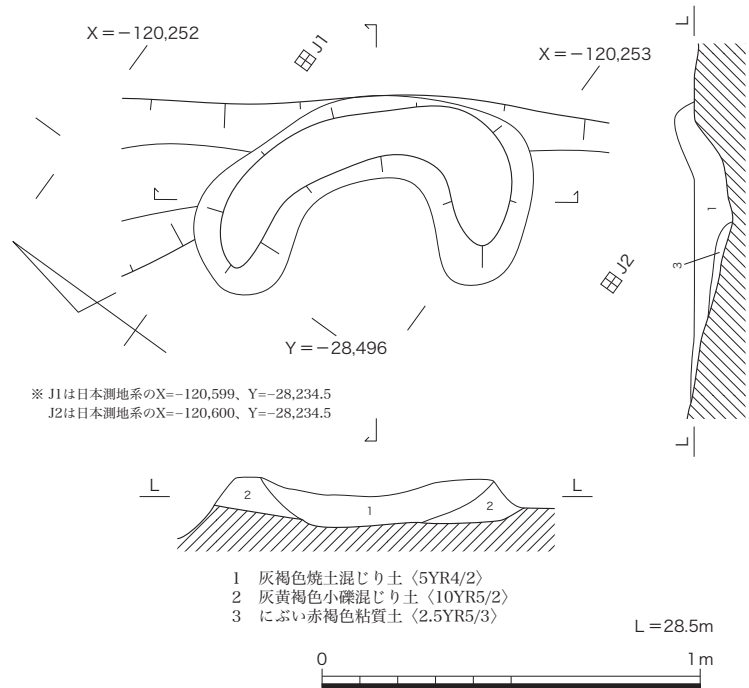
量出土したのみであった。したがって、建物の詳細な年代を知ることはできなかった。周壁溝は、北東辺から北西辺の一部にかけて確認できたのみであり、平坦な床面では支柱穴を検出することはできなかった。北西辺中央のやや北寄りでは焼土塊を確認できたことから、この部分がカマドの残骸ではないかと判断し、よって建物の方位は北で西に約 34° 振れていることになり、SH12 の方位とは約 90° も異なることが判明した。

焼土塊は、東西約 0.45 m、南北約 0.8 m の不整形な土坑状の窪みである P101 内に認められたが、遺存状態は良好ではなく、遺物が出土することもなかった。

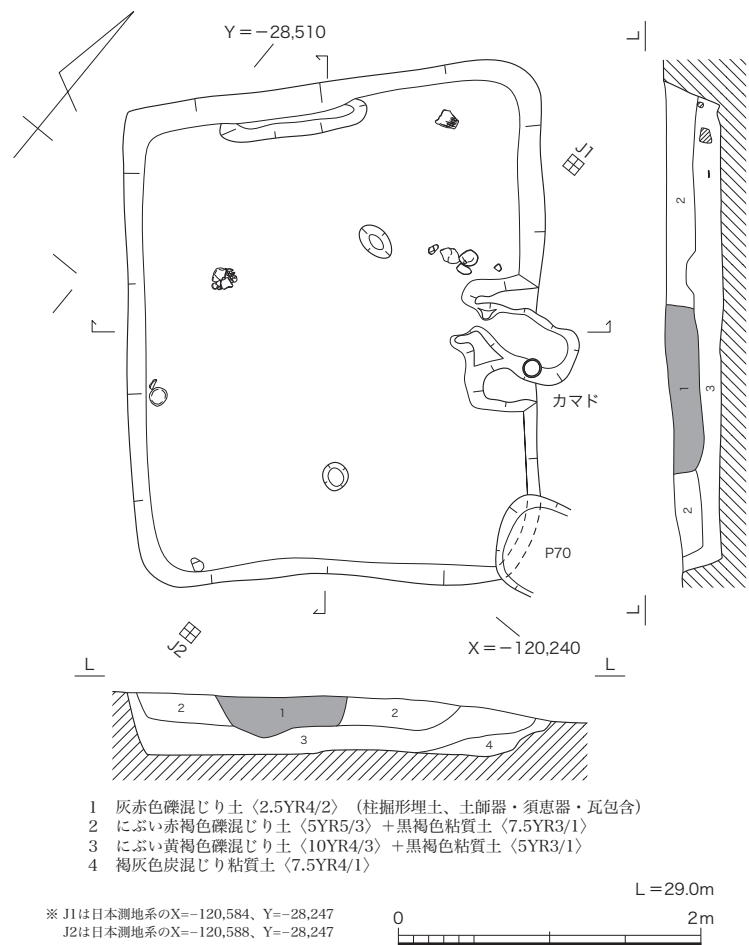


**竪穴建物 SH14** (第 25・26 図、図版 12) 調査区のほぼ中央部において検出した竪穴建物で、今回の調査で確認できた竪穴建物の中では最も遺存状態が良いものであった。建物の平面形態は、東西約 2.75 m、南北約 3.4 m の規模がある隅円台形を呈しており、深さは約 0.4 m 分が遺存していた。床面は、おおむね平坦であって、北西辺において周壁溝の一部を検出したが、支柱穴は確認することができなかった。建物の方位は、北で東に約 52° 振れていた。建物内の埋土は、にぶい赤褐色礫混じり土層と黒褐色粘質土層が混じった土層および褐色灰炭混じり粘質土層に分けることができ、北東辺中央のやや南寄りにカマドを造り付けていた。

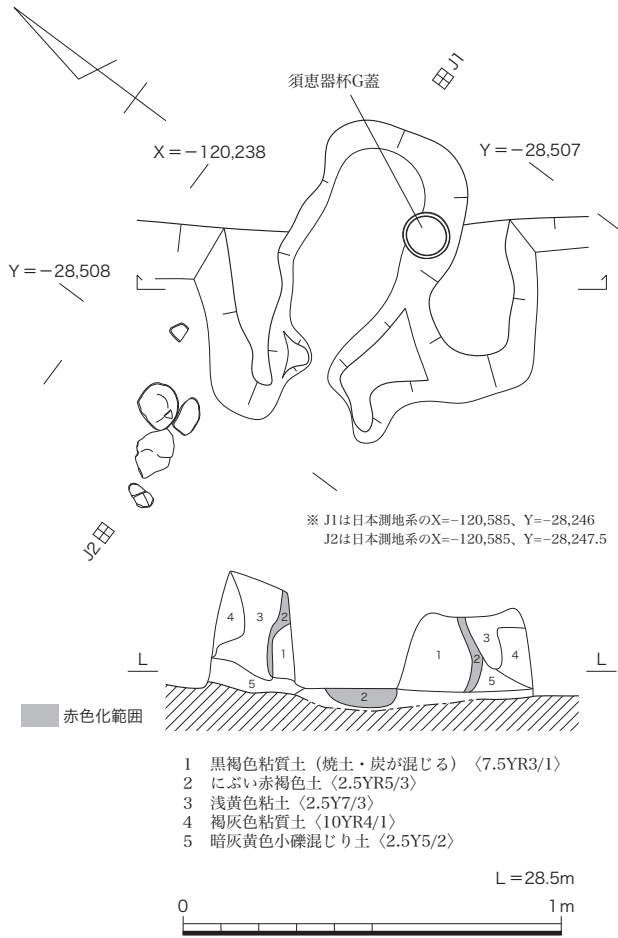
カマドは、黄白色系の粘土を用いて馬蹄形に構築したもので、幅約 0.9 m、奥行き約 0.5 m の規模があり、建物外に長さ約 0.3 m、幅約 0.45 m の煙道とみられる窪みが延びていた。カマドの内側は、火を受けたために堅く焼き締まって赤色化していた。煙道部内には、須恵器の杯 G 蓋が反転した状態で置かれており、またカマドの南西部には



第 24 図 竪穴建物 SH12 カマド実測図 (1/20)



第 25 図 竪穴建物 SH14 実測図 (1/50)



第26図 竪穴建物SH14カマド実測図 (1/20)

約52°振れており、北東辺中央からかなり南へ片寄った位置でカマドとみられる焼土の痕跡を確認できた。

焼土の痕跡は、建物壁面に接した状態で、幅約0.73m、奥行き0.53mの楕円形の範囲に広がっているが、厚さ0.2mほどがわずかに遺存している程度で、火を受けたカマドの基部に堆積したものと考えることができた。

**竪穴建物SH16** (第27図、図版13) 竪穴建物SH15と重複した状態で検出した竪穴建物で、SH15よりも古いことを確認した。全体に大きく削平を受けているために遺存状態は極めて悪く、周壁溝は北西辺と南西辺、それに南東辺の一部がわずかに遺存しているにすぎなかった。周壁溝は、幅が0.15～0.2m、深さ0.1m前後の規模があり、その範囲を考慮して東西約3.45m、南北約4.4mの隅円長方形を呈する建物に復元することができた。支柱穴は確認できず、遺物も土師器や須恵器杯の破片がごく少量出土したのみであったため、明確な時期を掌握するまでには至らなかった。建物の方位は、北で西に約37°振れている。北東隅付近で焼土の痕跡をわずかに確認することができたので、この部分がカマドではないかと推察できた。

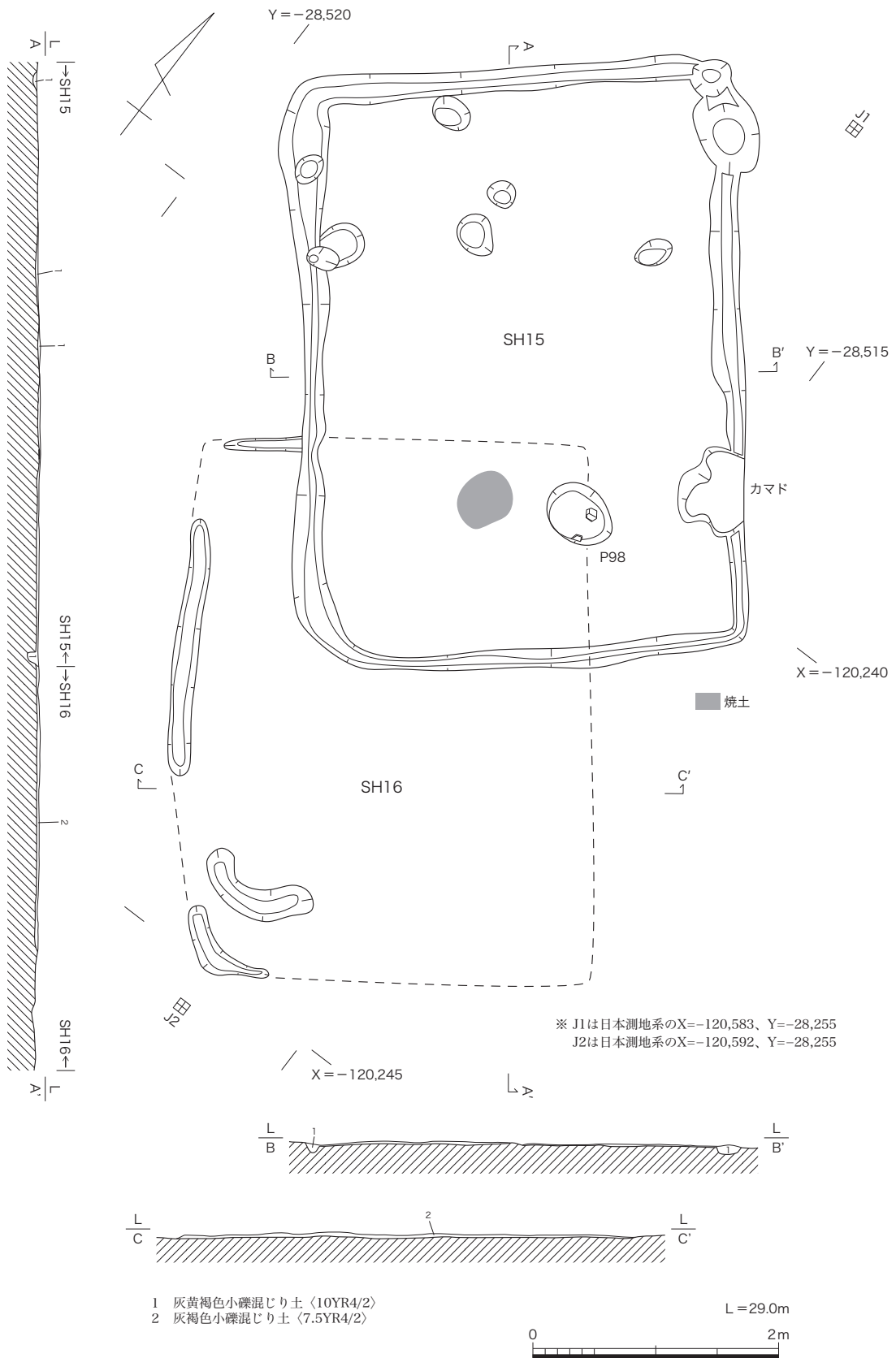
焼土の痕跡は、径が0.45m前後の楕円形の範囲に広がっており、火を受けたカマドの基部に相当するものと推察された。

須恵器杯Gや土師器杯C、甕などの土器類が床面からやや浮遊し、散在した状態で出土した。

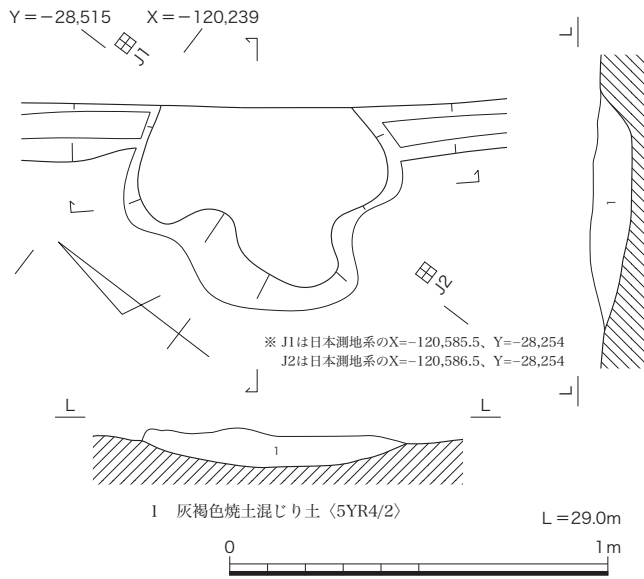
出土した遺物の特徴からみて、飛鳥時代の前半、西暦にすると7世紀前半代の所産に比定することができよう。

**竪穴建物SH15** (第27・28図、図版13) 竪穴建物SH14の西約4mの地点で確認できた隅円長方形を呈する竪穴建物であるが、壁面は完全に削平を受けており、周壁溝の存在から形態と規模が明らかとなったものである。東西約3.6m、南北約4.9mの規模があり、幅0.15～0.4m、深さ約0.1mの周壁溝を全周させていた。床面はおおむね平坦であるが、支柱穴を確認することはできず、土師器碗の破片が少量出土したにすぎなかった。このため、建物の詳細な時期を知ることはできなかった。建物の方位は、北で東に

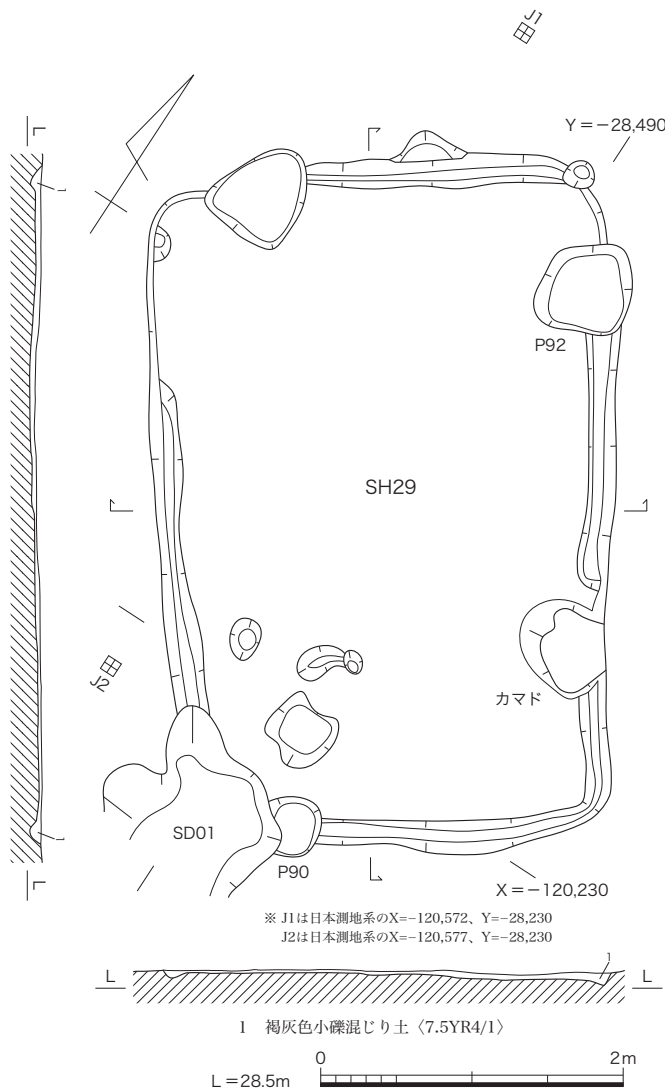




第27図 竪穴建物 SH15・16 実測図 (1/50)



第 28 図 竪穴建物 SH15 カマド実測図 (1/20)



第 29 図 竪穴建物 SH29 実測図 (1/50)

**竪穴建物 SH29** (第 29・30 図、図版 14) 調査区の北東部において検出した竪穴建物で、南西隅は溝 SD01 によって破壊されていた。建物は、東西約 3.1 m、南北約 4.6 m の規模に復元できる隅円長方形を呈しており、深さはわずかに 0.05 m ほどしか遺存していなかった。周壁溝は、各辺で確認でき、幅が 0.15 ～ 0.2 m、深さは約 0.1 m の規模があり、埋土は褐灰色小礫混じり土層であった。床面は、おおむね平坦であるが、支柱穴を確認することはできなかった。

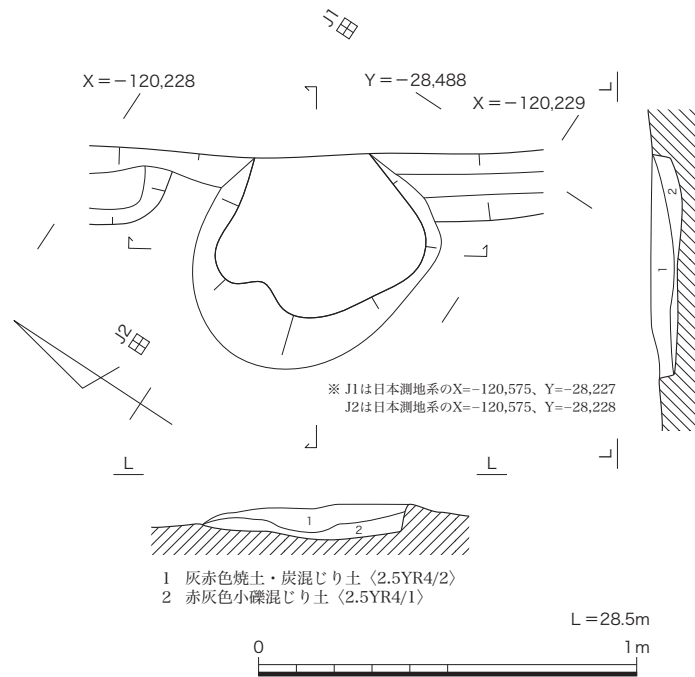
北東辺の中央より南に偏在した位置にカマドを造り付けており、建物の方位は北に対して東に 57° 前後振れていた。カマドは、残存状態が良好ではなく、幅約 0.65 m、奥行き約 0.56 m の範囲で焼土の広がり認められた。

ちなみに、この建物から出土した遺物がないため、明確な時期を決めることはできなかったが、建物の形態や規模などからみて、飛鳥時代の所産と推察することができる。

**竪穴建物 SH37** (第 31・32 図、図版 15・16) 調査区の南西部で検出した竪穴建物であるが、西側は SH38 によって破壊されている可能性が高く、深さもわずかに 0.05 m 程度しか遺存していなかった。このため、建物の全容は不明だが、東西約 3.25 m 以上、南北約 3.4 m の規模がある隅円長方形を呈しているも

のと考えることができよう。建物の方位は、北に対して東に $53^\circ$ 前後振れていて、周壁溝はもとより、支柱穴についても確認することはできなかった。建物の埋土は褐灰色粘質土層であり、北東辺中央の南寄りに造り付けられていたカマドの周辺からは、土師器の甕、須恵器の杯・杯B蓋・平瓶の他、縄文土器片などが出土した。

カマドは、遺存状態が不良であり、幅、奥行きとも約0.9 mの範囲で焼土塊の広がりか認められるのみであった。出土した遺物の特徴からみて、7世紀の後半代の時期に比定することができよう。



第30図 竪穴建物 SH29 カマド実測図 (1/20)

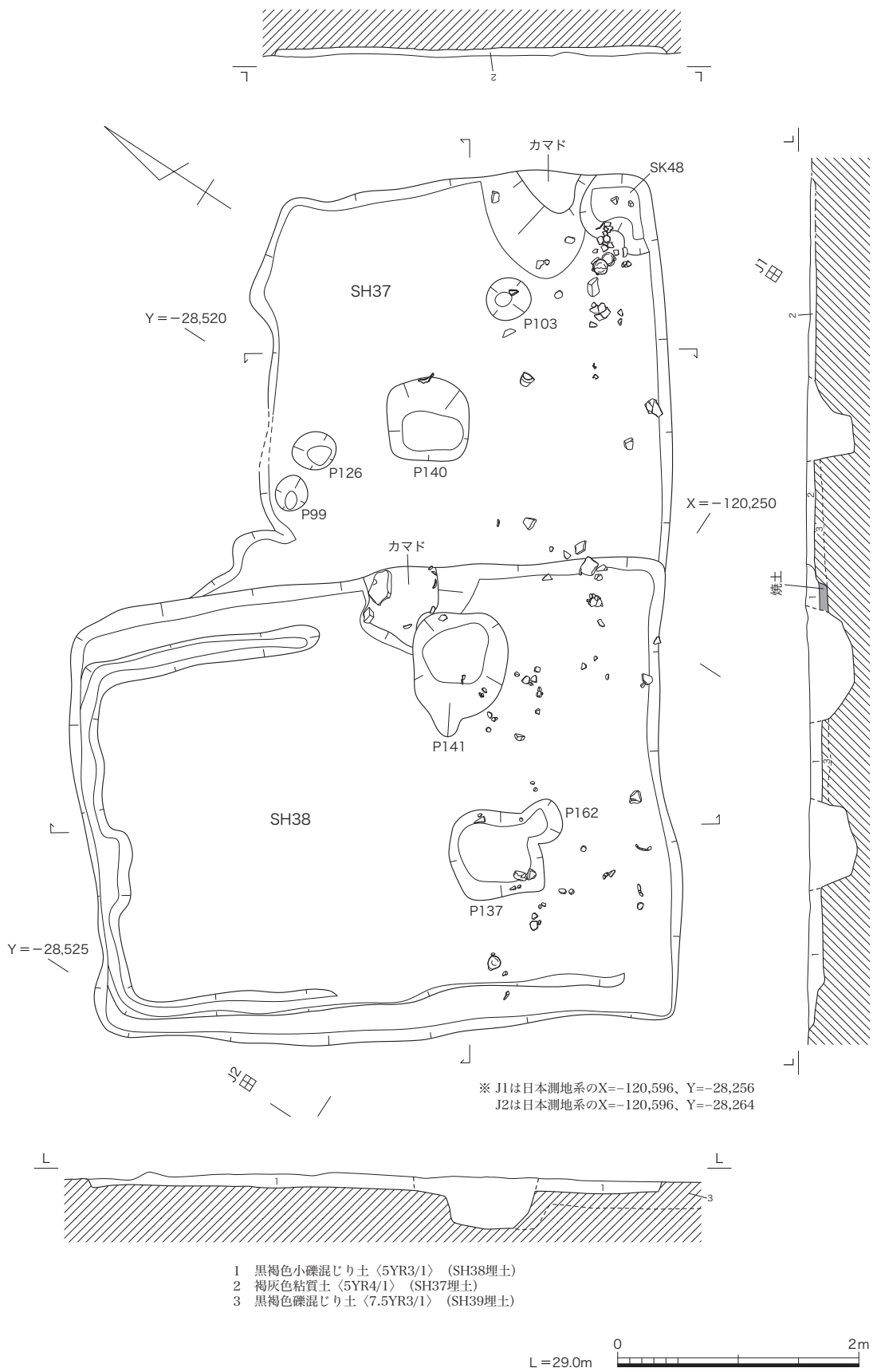
**竪穴建物 SH38** (第31・33図、図版15・17) 竪穴建物 SH37 のすぐ西側にあり、それと辺を接する状態で検出した竪穴建物で、SH37 よりも新しいことを確認できた。東西約3.8 m、南北約4.8 mの隅円長方形を呈しており、深さはわずかに0.05 mほどしか遺存していなかった。建物の方位は、北で東に約 $51^\circ$ 振れており、SH37 との振れ角に大差はない。周壁溝は、北辺および東辺と西辺の一部において確認されたもので、幅が0.2～0.25 m、深さは約0.05 mの規模がある。床面は、おおむね平坦であるが、支柱穴を確認することはできなかった。建物内の埋土は、黒褐色小礫混じり土層であり、須恵器の杯A・杯B・杯B蓋・壺、土師器の杯、それに紡錘車や釘などの鉄製品が出土している。カマドは、北東辺の中央から南へ偏在した位置に造り付けられていた。

カマドは、掘立柱建物 SB50 の柱掘形によりその一部が破壊されていたことに加え、全体の遺存状態も良好ではなかった。幅約0.95 m、奥行き約0.7 mの範囲に焼土塊が残るのみで、縄文時代の石皿を転用して埋置しており、その上面からは土師器甕の破片が出土した。

この建物も、出土遺物の特徴からみて、7世紀後半代の時期と考えることが可能であり、SH37 と大きな時期差はないものと推察することができる。

**竪穴建物 SH40** 調査区の南東隅で検出した。幅約0.15 mの周壁溝と考えられる溝の一部しか確認しておらず、出土した遺物もないために確証はないが、溝の形状や規模、方位などからみて竪穴建物の可能性を指摘しておきたい。

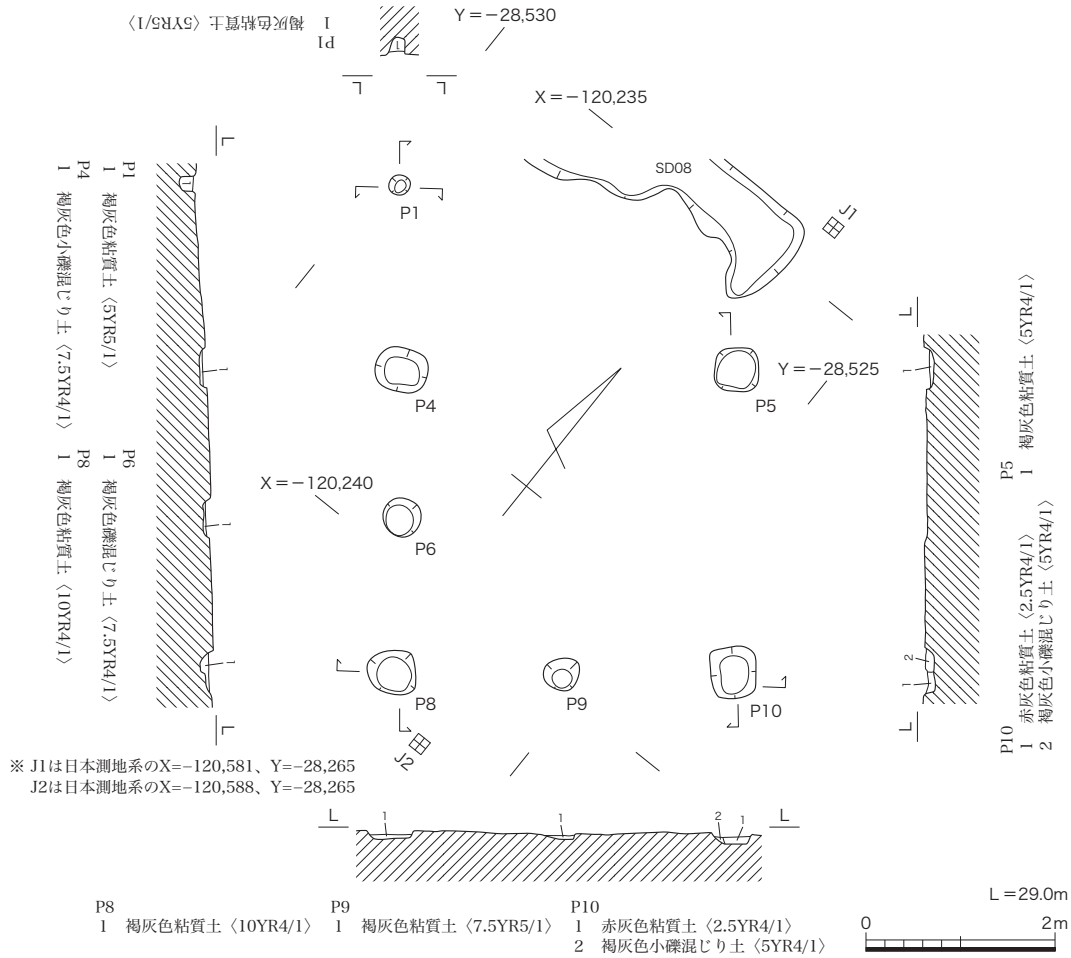
**掘立柱建物 SB20** (第34図、図版18) 調査区の西部中央付近で確認した桁行3間、梁行2間の南北棟建物で、方位は北で西に $39^\circ$ 前後振れている。柱掘形は、径ないし一辺が0.2～0.4



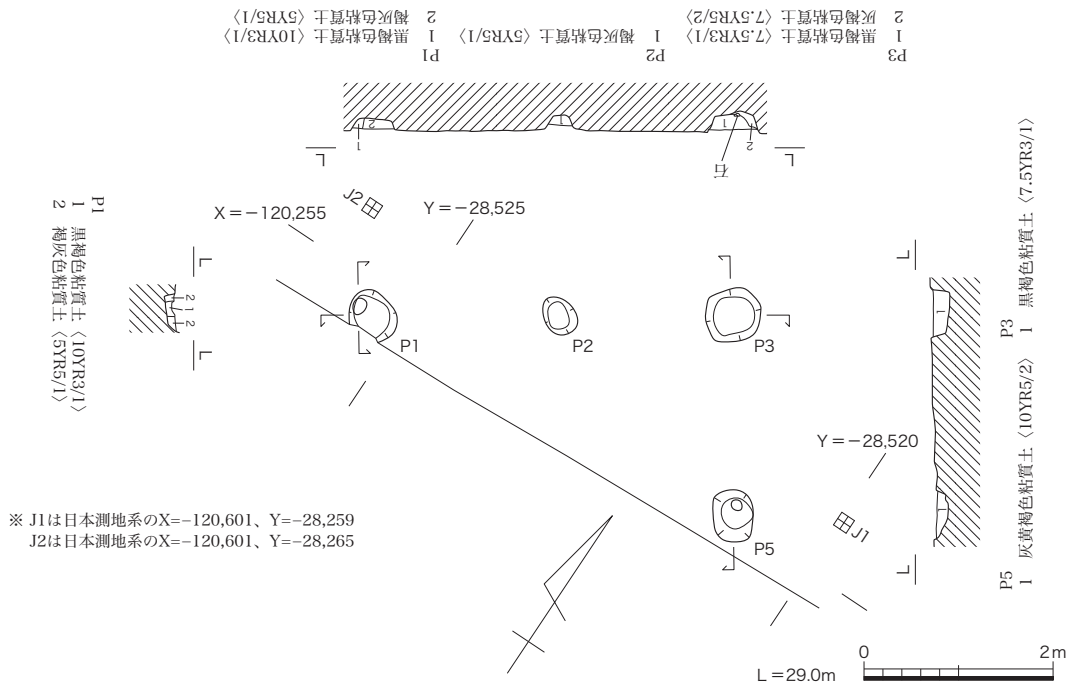
第 31 図 竪穴建物 SH37・38 実測図 (1/50)







第 34 図 掘立柱建物 SB20 実測図 (1/80)



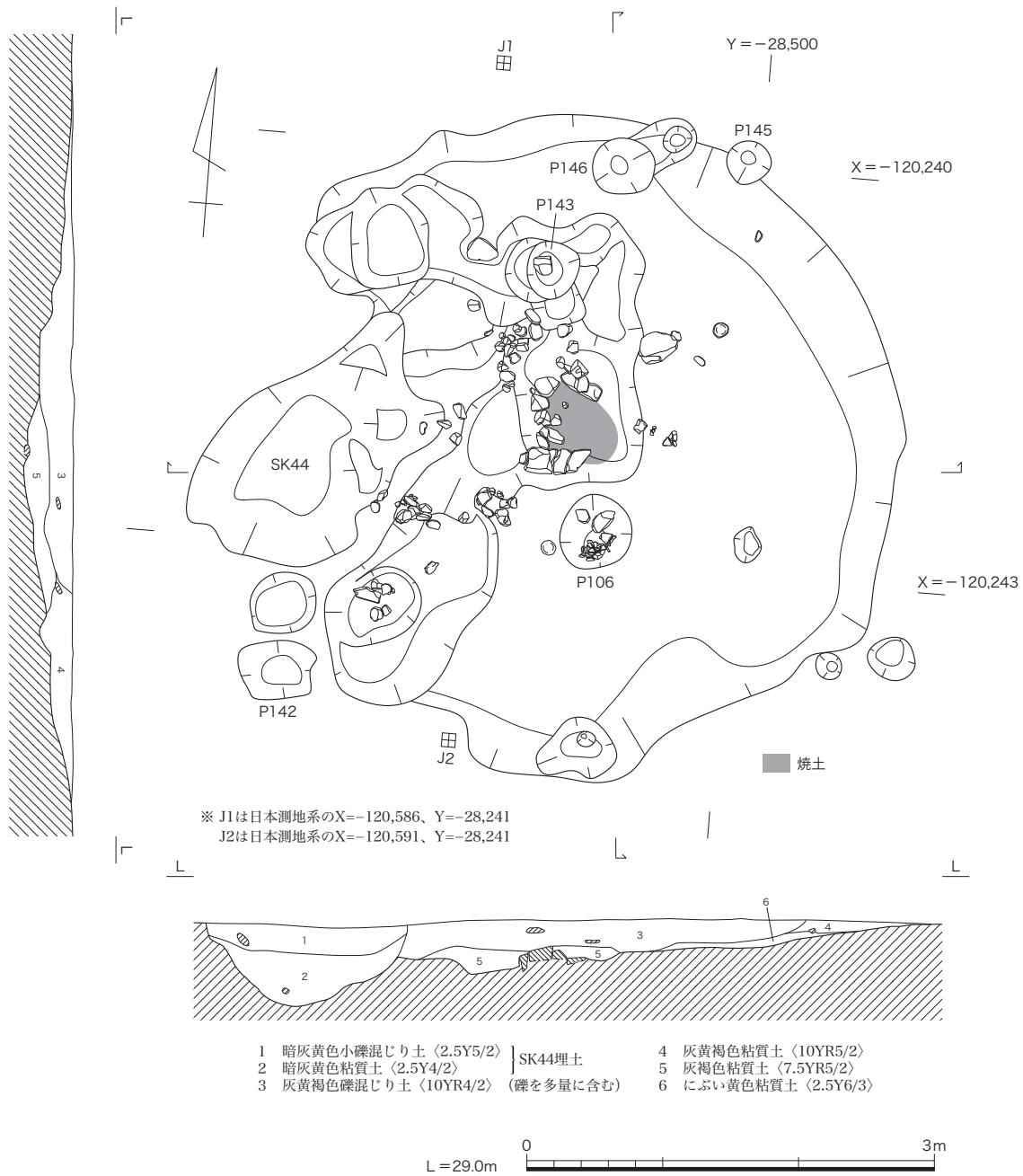
第 35 図 掘立柱建物 SB47 実測図 (1/80)



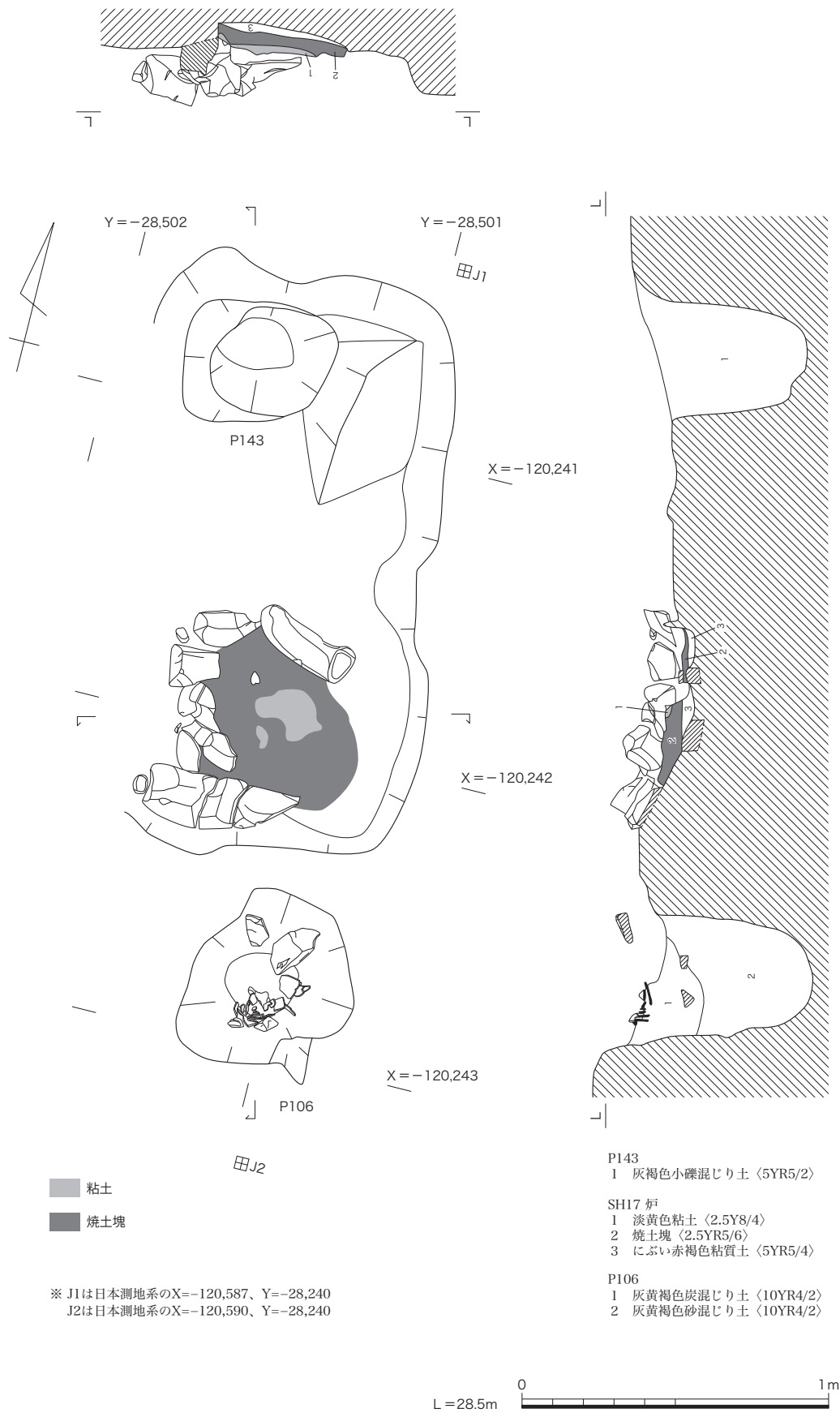
## 6 縄文時代の遺構

この時代の遺構としては、竪穴建物3棟と土坑4基、それに小穴などがある。

**竪穴建物 SH17** (第 37・38 図、図版 20・21) 調査区の南東部で確認した竪穴建物である。平面の形態は、径が 4.8 m 程度の楕円形を呈しており、壁面は中央に向かって掘り鉢状に深くなっていき、最深部までの深さは約 0.4 m であった。周壁溝は施されていないようで、確認することはできなかった。建物の中央からやや北寄りの所には、石囲炉が設置され、それを挟んだ南北で支柱穴を 2 基、また西半部で不整形な土坑 SK44 を確認することができた。



第 37 図 竪穴建物 SH17 実測図 (1/50)



第38図 竪穴建物 SH17 の石囲炉と支柱穴実測図 (1/20)

石囲炉は、東辺の石材が全く遺存していなかったが、北辺は1石、西辺は5石、南辺には3石が残っており、そのうち南辺と北辺の石材はおおむね旧状を保持しているものと推察された。炉の内法は、東西0.4 m以上、南北約0.5 mの規模があり、石材はおもにチャートや砂岩が使用されており、炉の内面側は火を受けたことにより赤色化していた。炉内の底面には、厚さが約0.1 mある黄色系の粘土を貼り付けていて、その部分は長時間火を受けていたために赤く焼け締まっていたが、炉内から縄文土器などの遺物はまったく出土しなかった。

石囲炉の南北では、支柱穴と考えられる小穴を2基確認することができた。南側の支柱穴P106は、径が0.5～0.65 mほどある歪な楕円形を呈しており、0.7 mほどの深さが残っていた。柱穴内の埋土は、灰黄褐色炭混じり土層と灰黄褐色砂混じり土層の上下2層に分けられ、縄文時代中期末の土器片がまとまって埋没していた。北側の支柱穴P143は、一辺が0.4～0.5 mの隅円方形を呈しており、深さが0.55 m程度遺存していた。埋土は、灰褐色小礫混じり土層のみで、少量の縄文土器片が出土したにすぎなかった。2基の支柱穴の間隔は、柱穴心で約2.05 mを測り、両支柱穴を結んだ方位は北で西に約13°振れていた。

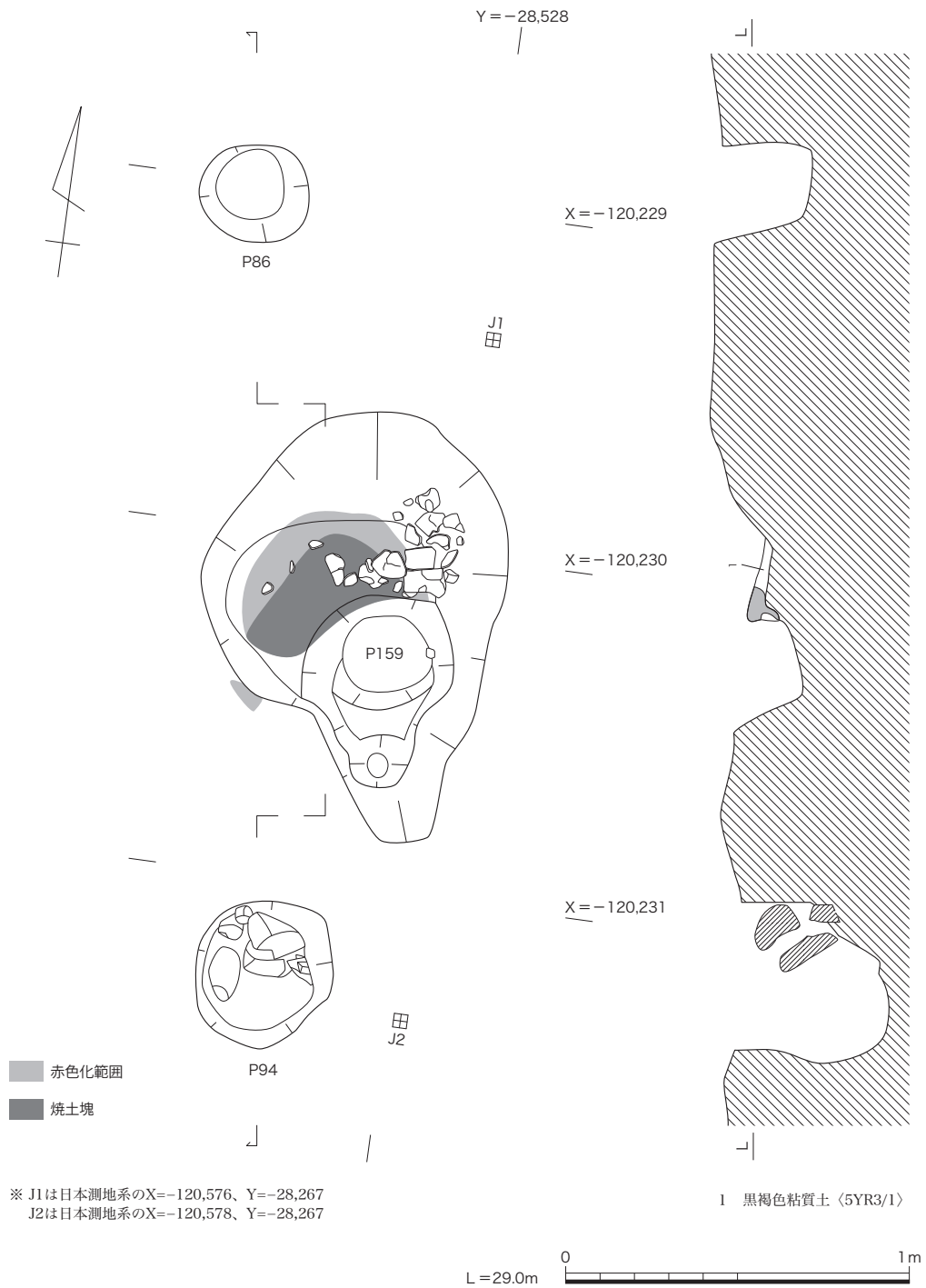
**竪穴建物 SH32** (第39図、図版22・23) 調査区の北西部において検出した竪穴建物であるが、壁面が完全に削平を受けていたため、当初は竪穴建物と認識することができず、調査を進めるに従って炉跡と支柱穴を確認できたことで、竪穴建物であることが判明したものである。したがって、本来の建物の平面形態や規模などの詳細は不明といわざるを得ない。

炉跡は、中央部が後世の小穴P159によって破壊されていたが、平面の形態は不整形で、東西約0.9 m、南北約1.25 m、深さが0.15 mほどの規模に復元できた。炉内の上層には縄文時代中期末の土器片が埋没しており、炉の壁面は火を受けていたために赤く変色していたことから、地床炉であると判断した。

支柱穴は、炉跡を挟んで南北に2基確認することができた。南側の支柱穴P94は、径0.45 m程度の楕円形を呈しており、深さは0.45 mほどの規模があった。柱穴内には、北白川C式の縄文土器片や拳大ほどの自然礫が埋没していた。北側の支柱穴P86は、径約0.32 mの楕円形を呈しており、深さは約0.3 mであった。縄文土器片が少量出土している。両支柱穴の間隔は約2.3 mであり、両支柱穴を結んだ方位は北で西に約8°振れていた。

**竪穴建物 SH39** (第40～42図、図版24～27) 調査区の南西部において検出した建物で、北半部が竪穴建物SH37・38、掘立柱建物SB50らと重複しており、そのいずれよりも古いことを確認できた。建物の平面形は、東西約4.4 m、南北約5 mの隅円方形を呈しており、深さは0.2 m程度しか遺存していなかった。壁面は緩やかに傾斜して床面に至っているが、周壁溝は施されていなかったようで、確認することはできなかった。床面はおおむね平坦であって、建物の中央からやや南寄りの所に炉を設置し、炉を挟んだ南北で支柱穴とみられる柱穴を2基確認することができた。建物内には、黒褐色礫混じり土層が堆積しており、数多くの縄文時代中期末の土器片が散在した状態で埋没していた他、打製石鏃や石斧、石錘や磨石など各種類の石器などが出土した。さらに、第41図にあるように、拳大から人頭大もある自然礫も大量に埋没しており、自然





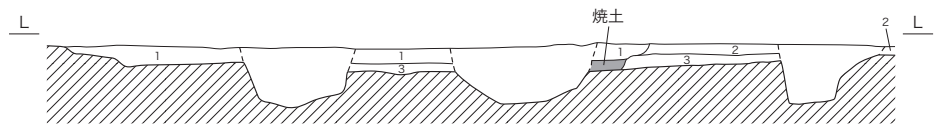
第39図 竪穴建物 SH32 の炉と支柱穴実測図 (1/20)

礫の中には表面が火を受けて赤色に変色しているものも少なからず含まれていた。

炉跡は、東西約 0.95 m、南北約 1 m の楕円形を呈しており、0.15 ~ 0.2 m ほどの深さがあり、壁面は火を受けていたために赤く変色していた。中央部には径約 0.35 m、厚さが 0.06 m 程度の堅く焼き締まった焼土塊があり、その周囲が幅 0.1 ~ 0.15 m の空間になっていた。この空間部分に、本来石材が埋め込まれていて、それらが建物の廃棄時点ですべて抜き取られたと考える



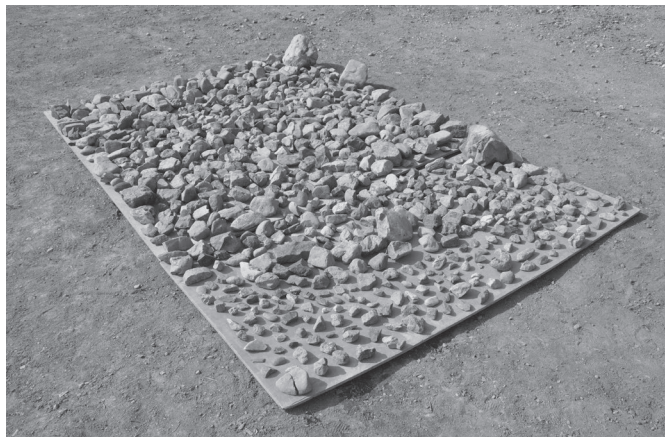
※ J1は日本測地系のX=-120,594、Y=-28,260  
 J2は日本測地系のX=-120,600、Y=-28,260



- 1 黒褐色小礫混じり土 (5YR3/1) (SH38埋土)
- 2 褐灰色粘質土 (5YR4/1) (SH37埋土)
- 3 黒褐色礫混じり土 (7.5YR3/1) (SH39埋土)

L = 29.0m 0 2m

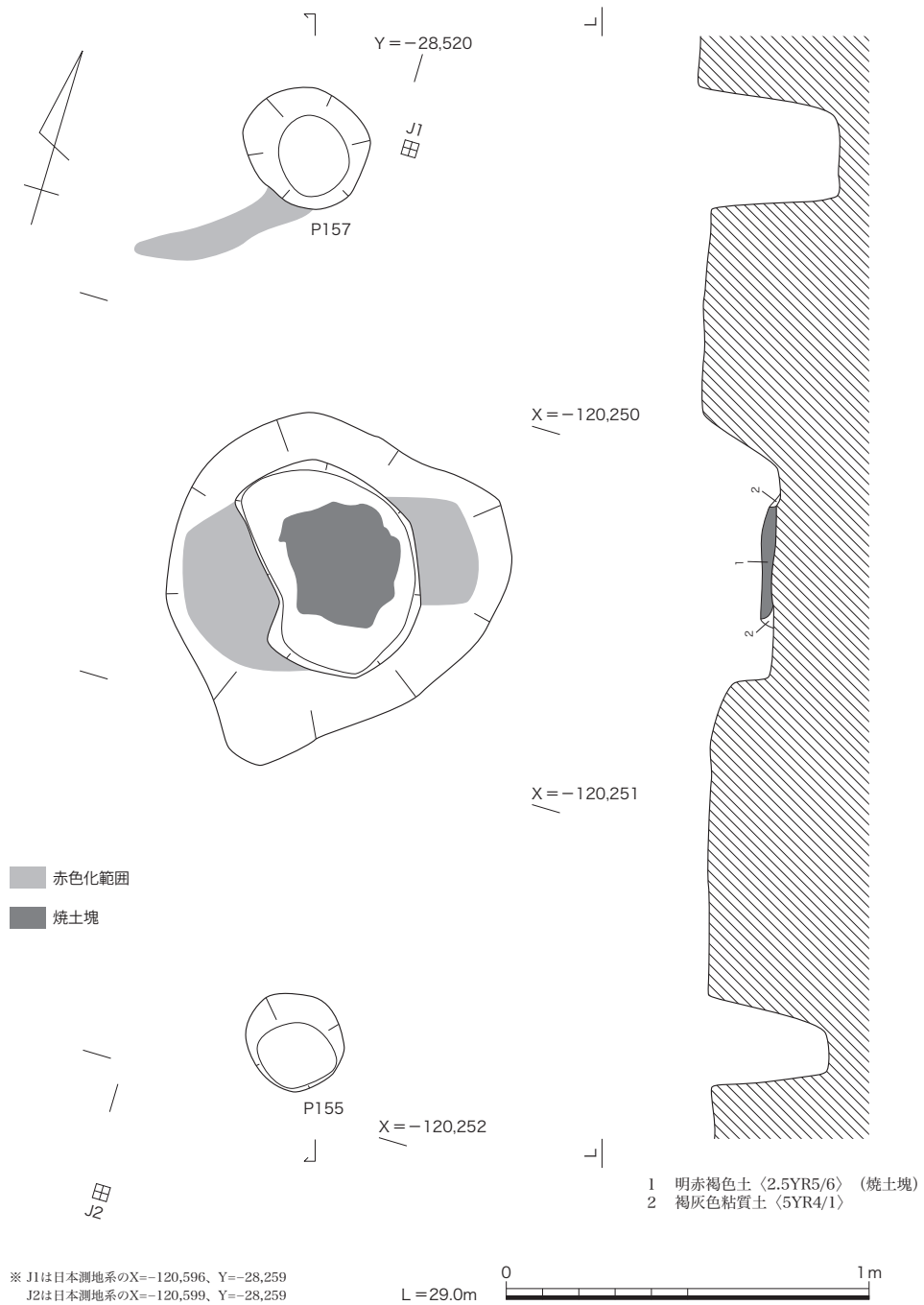
第40図 竪穴建物 SH39 実測図 (1/50)



第41図 竪穴建物 SH39 から出土した礫

余地が充分にあり得るわけで、このように考えてよければ、炉跡は地床炉ではなくて石囲炉であった可能性が濃厚といえそうである。

主柱穴は、炉を挟んだ南北に約2.5 mほど離れた状態で確認することができた。南側の主柱穴P155は、径約0.25 mの楕円形を呈しており、深さは0.35 mほどの規模があった。柱穴内には、縄文土器の破片がまと

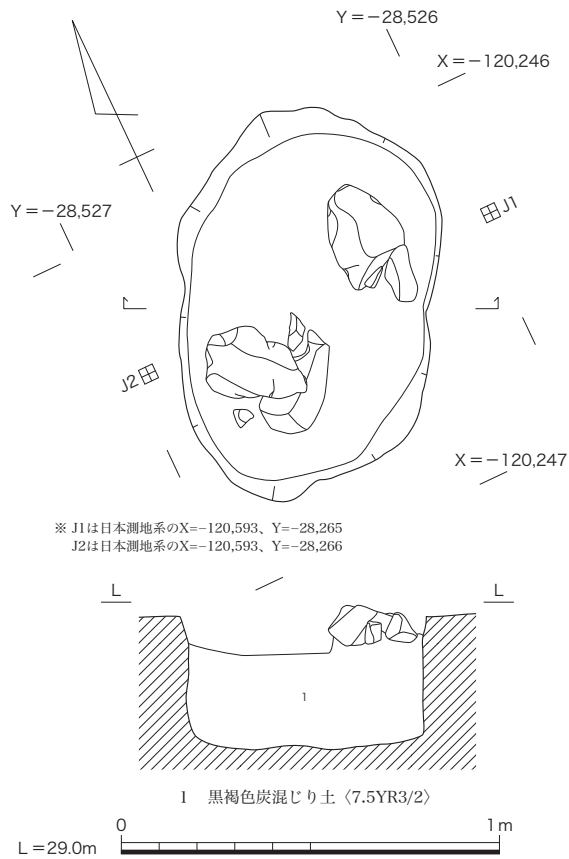


第42図 竪穴建物 SH39 の炉と支柱穴実測図 (1/20)

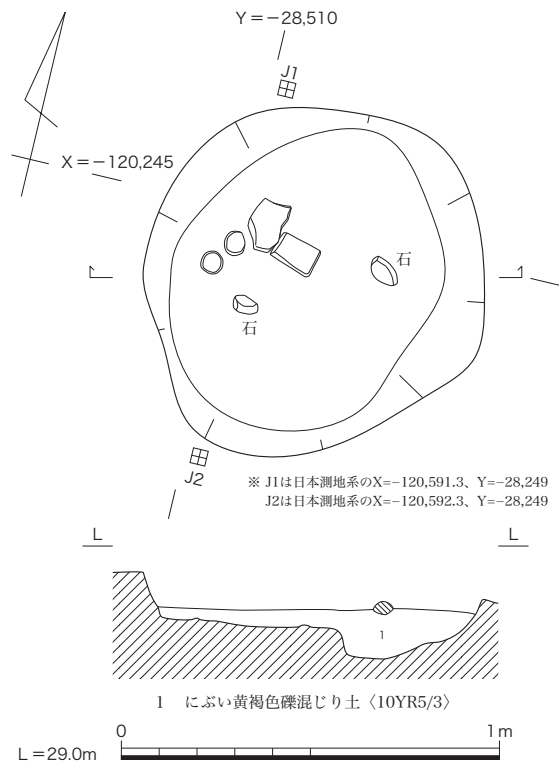
まっけて埋没していた。北側の支柱穴 P157 は、径約 0.35 m の楕円形を呈しており、深さは約 0.4 m 前後あったが、遺物はほとんど出土しなかった。両支柱穴を結んだ方位は、北で西に約 15° 振れていた。

**土坑 SK22** (第 43 図、図版 28) 竪穴建物 SH39 の北西約 5 m の地点で検出した長楕円形を呈した土坑である。長軸約 1.05 m、短軸約 0.68 m あり、深さは約 0.35 m 分が遺存していた。土坑内の埋土は、黒褐色炭混じり土層で、人頭大ほどもある自然礫が 3 個埋没していた。

**土坑 SK33** (第 44 図、図版 28) 調査区の中央南部で検出した楕円形を呈する土坑である。



第43図 土坑 SK22 実測図 (1/20)



第44図 土坑 SK33 実測図 (1/20)

土坑は、径約 0.95 m、深さは 0.12 ~ 0.2 m 程度の規模があり、埋土はにぶい黄褐色礫混じり土層であった。土坑内からは、凸帯文土器の破片が少量出土している。

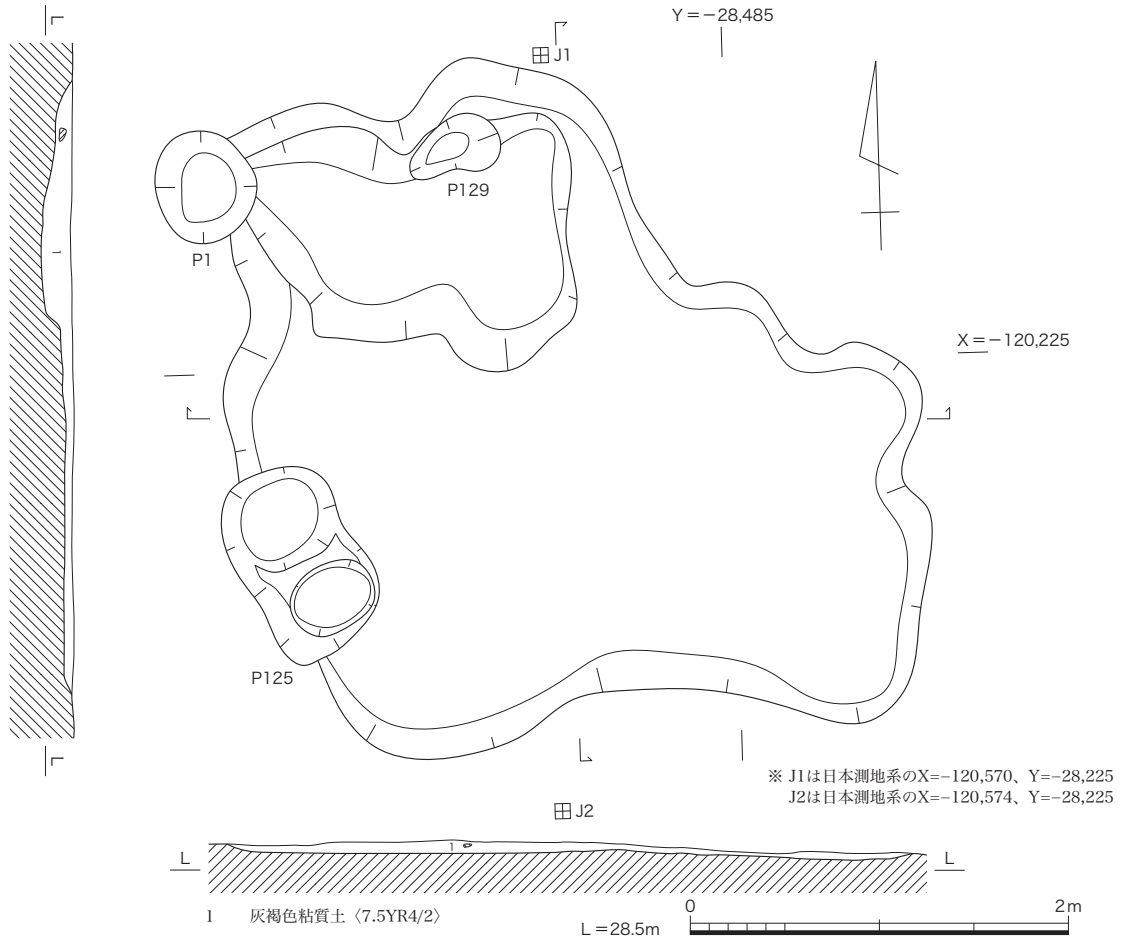
**土坑 SK44** (第 37 図) 竪穴建物 SH17 内の西半部にある不整形な土坑で、長軸約 2.15 m、短軸約 1.45 m、深さは約 0.6 m の規模がある。埋土は、暗灰黄色小礫混じり土層と暗灰黄色粘質土層の上下 2 層に分けられ、縄文時代中期末の土器片や磨石、それに耳栓などが少量出土している。

**土坑 SK45** (第 45 図) 調査区北東部で検出した不整形な土坑で、東西、南北とも約 3.7 m の規模がある。北側が 1 段深く掘り窪められていたため、深さは浅い所で約 0.05 m、深い所で約 0.15 m の規模しかなく、灰褐色粘質土層が堆積していた。

**土坑 SK51** 調査区の南東部で検出した東西方向に長い不整形な土坑で、東側は土坑 SK02 により、また西端部は掘立柱建物 SB11 の柱掘形 P4 によって破壊されていた。東西 3 m 以上、南北 1.3 m、深さが約 0.15 m 程度の規模があり、土坑内からは縄文時代中期の土器片やサヌカイトの剥片などが少量出土している。

## 7 時期不明の遺構

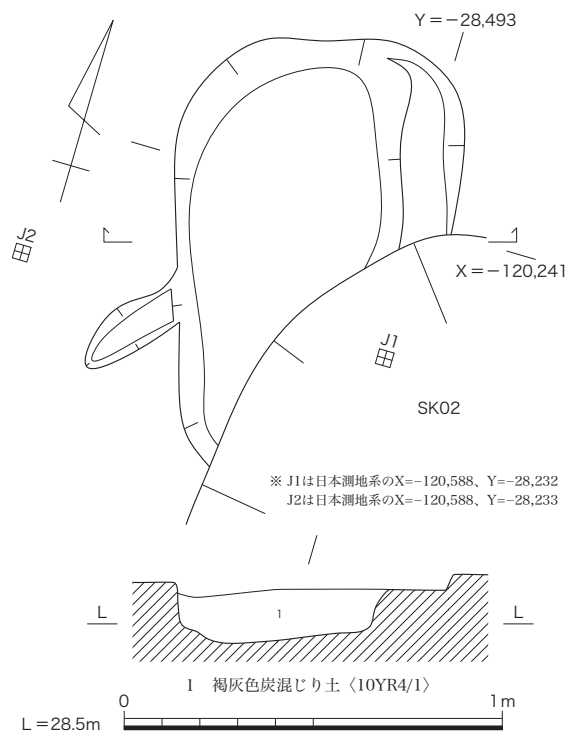
**土坑 SK46** (第 46 図) 調査区の南東部で検出した土坑であるが、土坑 SK02 によって南側は破壊されていたため、全形は不明である。東西約 0.75 m、南北 1.15 m 以上の隅円長方形を呈するものと推察され、深さは約 0.15 m で、埋土は褐灰色炭混じり土層であった。形態を考慮すると、土壙墓の可能性がないとはいえないが確証はなく、ここでは



第45図 土坑SK45実測図 (1/40)

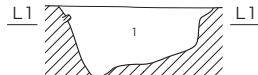
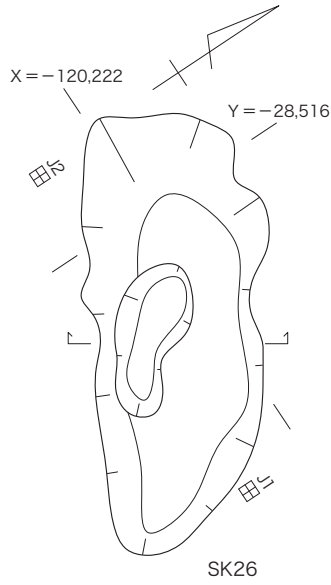
推測するにとどめておきたい。

**土坑SK26・28・30・31・34・35** (第47図) これらの土坑は、いずれも調査区の北部中央から北東部において検出されたものである。長さ1.6～2.6m、幅が0.65～1.1m程度の細長い不整形な形態を呈していること、灰黄褐色系や灰褐色系の粘質土層を埋土とするなどの共通点が認められる。ただし、いずれも不整形で類似した形態を呈していること、遺物も出土しなかったことなどから、遺構ではない可能性も十分に考えられる。



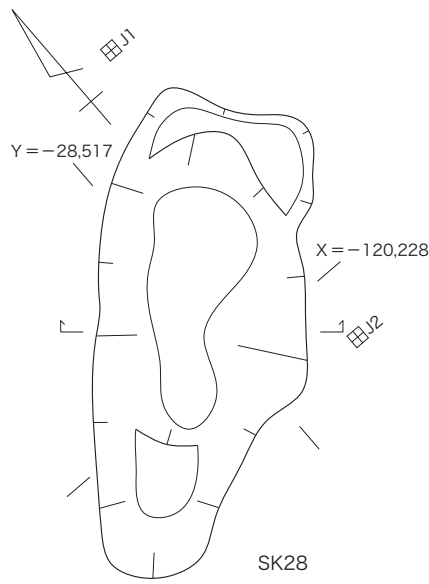
第46図 土坑SK46実測図 (1/20)





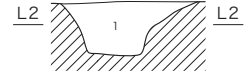
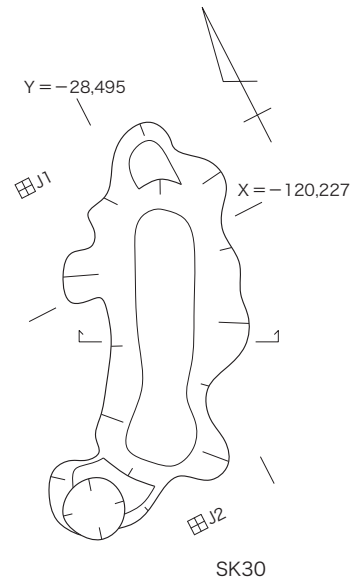
1 灰褐色礫混じり土 <7.5YR4/2>

※ J1は日本測地系のX=-120,569、Y=-28,253.5  
J2は日本測地系のX=-120,569、Y=-28,255.5



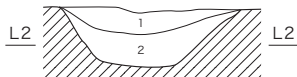
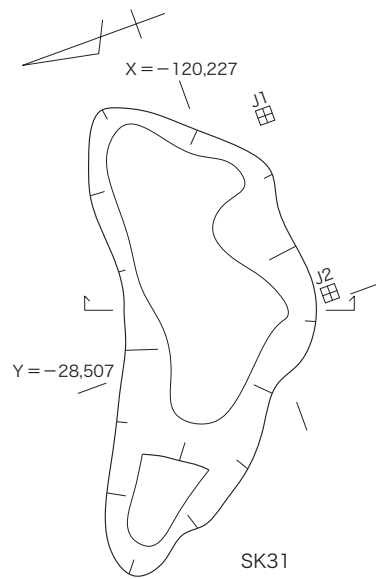
1 灰黄褐色礫混じり土 <10YR4/2>  
2 にぶい灰褐色粘質土 <7.5YR5/3>

※ J1は日本測地系のX=-120,573、Y=-28,255.5  
J2は日本測地系のX=-120,575、Y=-28,255.5



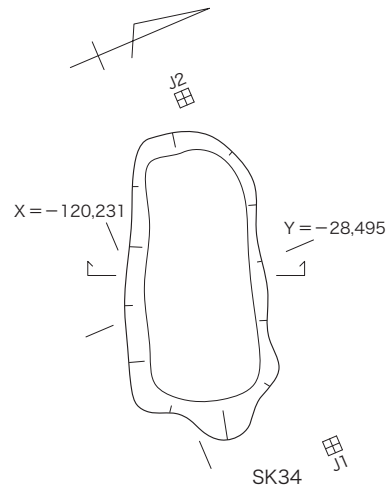
1 灰褐色礫混じり土 <7.5YR4/2>

※ J1は日本測地系のX=-120,573、Y=-28,234.5  
J2は日本測地系のX=-120,575、Y=-28,234.5



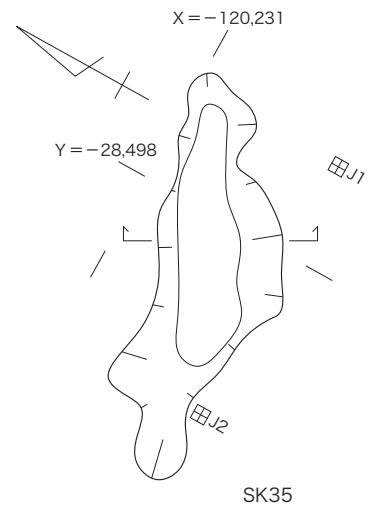
1 灰黄褐色粘質土 <10YR4/2>  
2 褐色礫混じり土 <7.5YR4/1>

※ J1は日本測地系のX=-120,574、Y=-28,245  
J2は日本測地系のX=-120,574、Y=-28,246



1 褐色灰混じり土 <7.5YR4/1>

※ J1は日本測地系のX=-120,577、Y=-28,233  
J2は日本測地系のX=-120,577、Y=-28,235



1 灰黄褐色礫混じり土 <10YR4/2>  
2 にぶい黄褐色粘質土 <10YR5/3>

※ J1は日本測地系のX=-120,578.5、Y=-28,236.5  
J2は日本測地系のX=-120,578.5、Y=-28,238



第 47 図 土坑 SK26・28・30・31・34・35 実測図 (1/40)

### 第3章 出土遺物

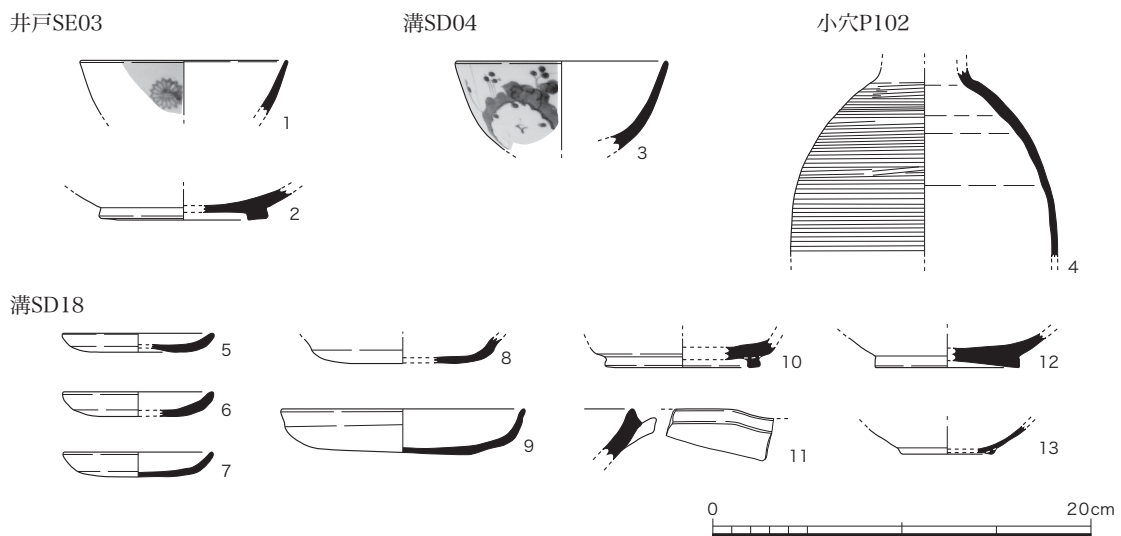
今回の調査では、縄文土器、土師器、須恵器、緑釉陶器、製塩土器、陶磁器、軒平瓦、平瓦、丸瓦、鉄製品、石器など各時代、各種類の遺物が整理箱に17箱出土した。この数量は、調査した面積に比べると、決して多い数量とはいえず、むしろ少ないというべきであろう。以下では、主な遺物について時代順に説明を加える。

#### 1 中世以降の遺物

**井戸 SE03、溝 SD04、小穴 P102 出土遺物** (第48図、図版29、付表-3) 1はSE03、3はSD04から出土した染付碗の口縁部片である。2はSE03から出土した青磁碗の底部片で、高台は蛇ノ目、見込みにはトチンの痕跡をとどめている。4は陶器壺の頸部から体部上半の破片で、P102から出土した。外面全体にカキメを施して仕上げしており、素地は灰色であるが、釉は暗赤褐色を呈する。以上の遺物は、いずれも近世のものと推察される。

**溝 SD18 出土遺物** (第48図、図版29、付表-3) 土師器、須恵器、緑釉陶器、瓦器、陶器などの遺物が出土している。土師器皿(5~9)は、口径8cm前後のもの(5~7)と13cm前後のもの(9)がある。いずれも口縁部外面と内面をナデ調整するが、底部外面は未調整である。瓦器碗(13)は、底部の破片で、断面三角形の低い高台を貼り付けている。11は須恵器鉢の片口部の口縁部片で、東播系のものと推察される。これらの土器は、13世紀後半の時期に比定することができる。

なお、10は須恵器杯Bの底部片、12は緑釉陶器形態の須恵器碗ないし皿の底部片で、体部の内外面をミガキ調整して仕上げている。前者は長岡京期、そして後者は平安時代前期のものと考えられることから、ともに混入品とみられる。

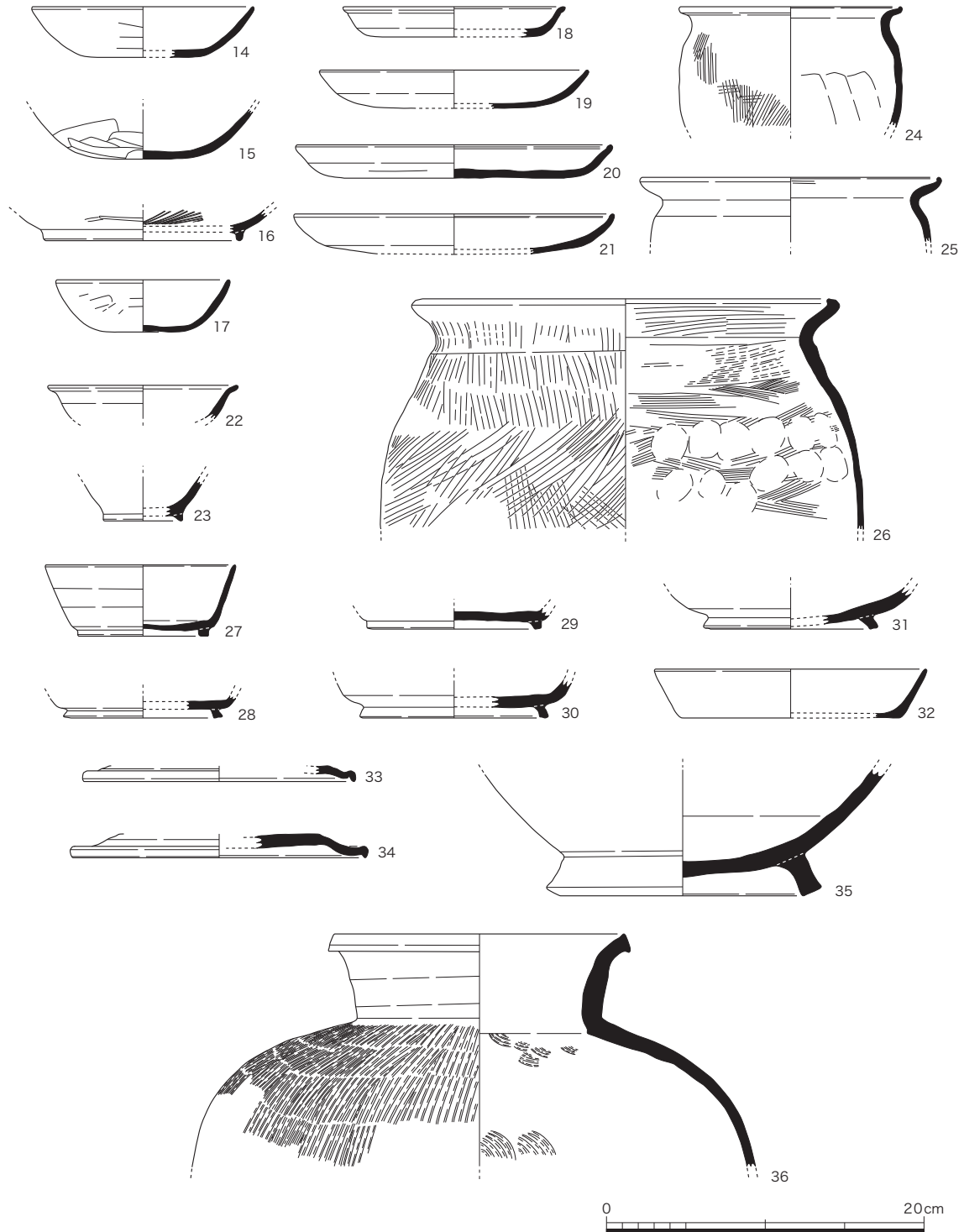


第48図 井戸 SE03、溝 SD04・18、小穴 P102 出土遺物実測図 (1/4)

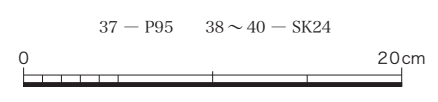
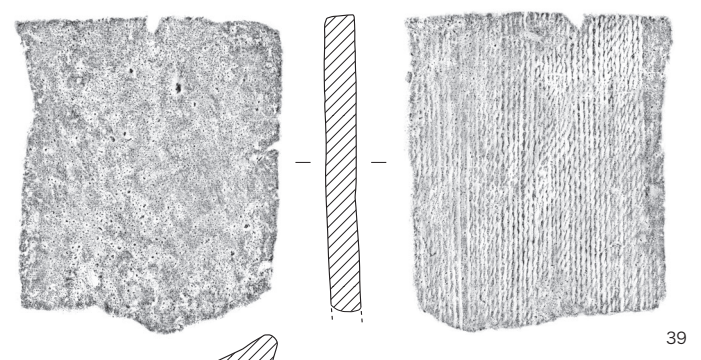
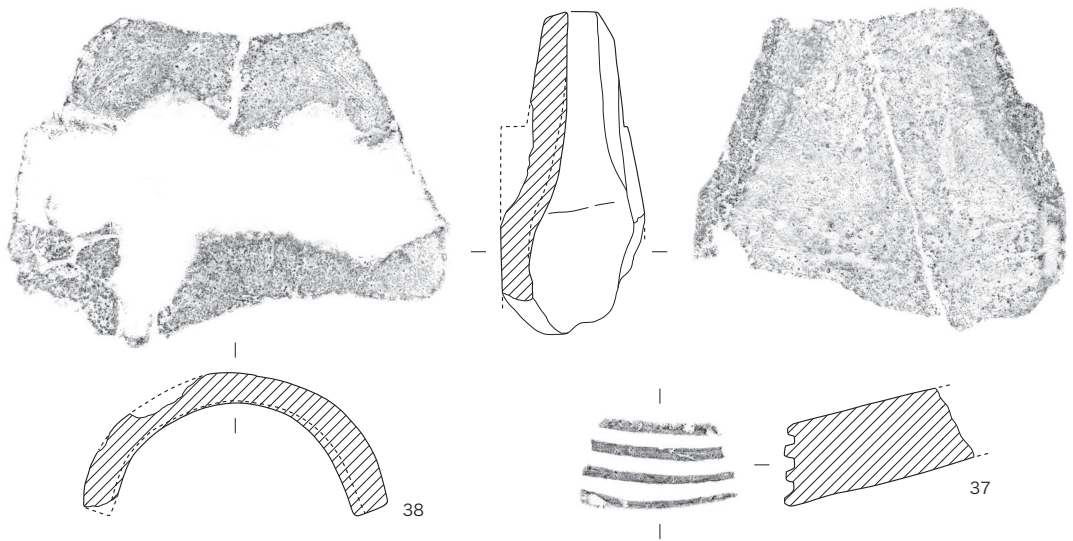
## 2 長岡京期の遺物

土坑 SK24 出土遺物（第 49・50 図、図版 30～32、付表-3） 土師器、須恵器、製塩土器、瓦などの遺物がまとめて出土している。

土師器には、杯 A・杯 B・皿 A・椀 A・壺 C・壺 E・甕などの器種がある。杯 A（14・15）は、



第 49 図 土坑 SK24 出土遺物実測図 (1/4)



第50図 瓦類実測図 (1/4)

ともに外面全体をヘラケズりするc手法で調整して仕上げる。杯B(16)は、断面台形の短い高台が付く底部の破片で、内面には放射状の暗文が密に施されている。椀A(17)は、外面全体をケズリ調整するc手法。皿A(18～21)は、短く外上方に伸びる口縁部と平底の底部からなる形態で、口縁端部を丸くおさめるもの(18・19)と肥厚させて段をなすもの(20・21)の二者がある。口径が14cm前後のもの(18)、17cm前後のもの(19)、20cm前後のもの(20・21)などの法量に分けられる。全体に摩滅しているものが多いため、調整手法の不明なものが多いが、20は底部外面のみをケズリ調整するb手法で仕上げている。壺C(22)は、口径が約12cmのいわゆる墨書人面土器タイプの小型品であるが、人面は描かれていない。壺E(23)は底部の破片で、断面が三角形に近い高台を貼り付けている。甕(24～26)は、口径が14cm前後のもの(24)、19cm前後のもの(25)、27cm前後の大型品(26)などに分けられる。いずれも口縁端部をつまみ上げて肥厚させており、26の外面全体には煤の付着が認められ、煮炊用に使われたことが知られる。

須恵器には、杯A・杯B・杯B蓋・壺・甕などの器種がある。杯A(32)は底部が平底で、杯B(27～30)は、杯Aの底部に高台を貼り付けた形態で、杯B蓋(33・34)をともなう。31と35は壺の底部片と考えられるもので、ともに底部の高台を外下方に大きく張り出している。特に35は大形品で、外面には自然釉の付着を認めることができた。甕(36)は、口縁部から体部上半にかけての破片である。口縁部の内外面は回転ナデ調整し、体部は外面が平行タタキ、内面は同心円の当て具痕をナデ調整して消し去っていた。体部外面全体には、自然釉が厚く付着している。

瓦類には、平瓦と丸瓦がある。39・40は平瓦の破片で、ともに凸面は縄タタキの痕跡、凹面は布目の痕跡をとどめ、側面はケズリを施して仕上げる。39は瓦質、40は軟質に焼成されている。38は丸瓦の玉縁部の破片で、全体に摩滅しているため遺存状態は不良である。凹面には布目の圧痕をとどめ、凸面はナデ調整する。軟質に焼成されている。

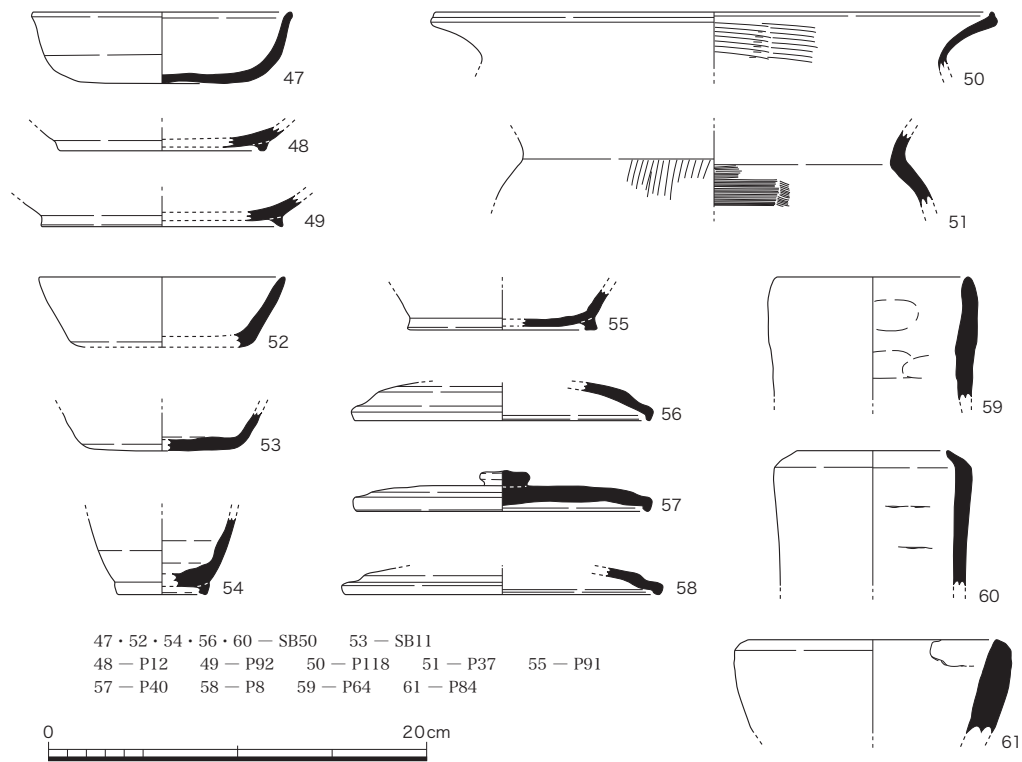
**土坑SK27出土遺物**(図版31) 土師器、須恵器の他、炉壁体の破片がまとまって出土している。41～46は、炉壁体の破片である。最も大きい破片の41は、長さ約12.5cm、最大幅約7cm、厚さ約3.3cm、小さい46は長さ約3.5cm、幅約3cm、厚さ約2.5cmあって、いずれも外面はスサ混じりの粘土が灰色を呈し、内面は溶着により黒色化している。

**掘立柱建物SB11・50出土遺物**(第51図、図版29・32、付表-3) SB11からは須恵器(53)、SB50からは土師器(47)、須恵器(52・54・56)、製塩土器(60)などが出土している。

土師器の杯A(47)は、直線的に外上方に伸びる口縁部と平底の底部からなる形態で、口縁端部を丸く収める。内面と口縁部外面をナデ調整するが、底部外面を調整しないa手法<sup>(14)</sup>。この形態、手法の杯Aは、長岡京で通常出土するものではないが、第162次調査<sup>(15)</sup>の土坑SK01、第941次調査の土坑SK221など近接する調査地点においても、少量ではあるが出土していることは興味深い。

52・53は須恵器の杯A、54は須恵器壺Mの底部である。56は須恵器杯B蓋の口縁部片で、





第51図 掘立柱建物SB11・50、小穴出土遺物実測図(1/4)

屈曲する口縁端部には、重ね焼きの痕跡をとどめている。

60は体部が垂直に近く立ち上がり、口縁端部が内傾する形態の製塩土器で、器壁は比較的薄く作られている。

**小穴出土遺物**(第50・51図、図版29・32、附表-3) 小穴からは、土師器、須恵器、製塩土器、瓦など各種の遺物が出土している。

48はP12から、49はP92から出土した土師器杯Bの底部片で、ともに断面三角形の短い高台を貼り付けている。

50はP118から、51はP37から出土した土師器甕の破片で、50は口縁端部をつまみ上げて肥厚させ、内面を横方向にハケメ調整する。

55は、P91から出土した須恵器杯Bの底部片。57・58は、口縁端部を屈曲させる須恵器の杯B蓋で、57はP40から、58はP8から出土したものである。57の天井部には、扁平なつまみを貼り付けており、屈曲する口縁端部には重ね焼きの痕跡をとどめる。

59はP64、61はP84から出土した製塩土器で、59は器壁が薄くて垂直に近く立ち上がり、61は器壁が厚くて外上方に開く形態である。

37はP95から出土した4重弧文軒平瓦の瓦当片で、瓦質に硬く焼成されている。長岡京期よりも古い瓦ではあるが、土師器や須恵器、製塩土器など長岡京期の遺物と共に出土しているのでここに記した。

### 3 飛鳥時代の遺物

**竪穴建物 SH12 出土遺物**（第 52 図、図版 33、付表-3） 須恵器、鉄製品などの遺物がわずかに出土したのみであった。

須恵器には、杯H蓋・甕などの器種がある。杯H蓋（87）は、垂直に近く立ち上がる口縁部と丸味を帯びた天井部からなる形態を呈している。口縁端部を丸く収め、天井部の回転ヘラケズリの範囲は狭い。陶邑編年の TK209 型式に比定することができる。

鉄製品の刀子（88）は、両関式の柄部の先端を欠損し、切っ先付近は大きく婉曲している。

**竪穴建物 SH14 出土遺物**（第 52 図、図版 33、付表-3） 土師器、須恵器、鉄製品などの遺物が出土している。

土師器には、杯C（65）、壺（66）、甕（67）などがある。65 は全体に摩滅しているため、調整手法は不明。66 は丸底を呈する壺の底部片で、外面は摩滅しているが、内面はハケを施した後にナデ調整する。67 はくの字状に外反する甕の口縁部片で、内外面とも摩滅しているため調整手法は不明であった。

須恵器には、杯H、杯H蓋、杯G（63・64）、杯G蓋（62）、甕などが出土している。62 は天井部の宝珠つまみを欠損し、内面には自然釉が付着している。杯Gの口縁形態は、63 が垂直に近く立ち上がるのに対して、64 は外反するが、ともに端部を丸く収めている。64 は硬く焼成されて灰色、63 は軟質に焼成されているために灰白色を呈する。これらの須恵器は、陶邑編年の TK217 型式、飛鳥編年では飛鳥Ⅱ期ないしⅢ期に比定することができよう。

鉄製品には、鉄釘（68～70）がある。鉄釘は、いずれも厚さが約 0.7cm 前後ある断面方形を呈し、68 は頭部の破片、69 は先端に近い部分の破片である。

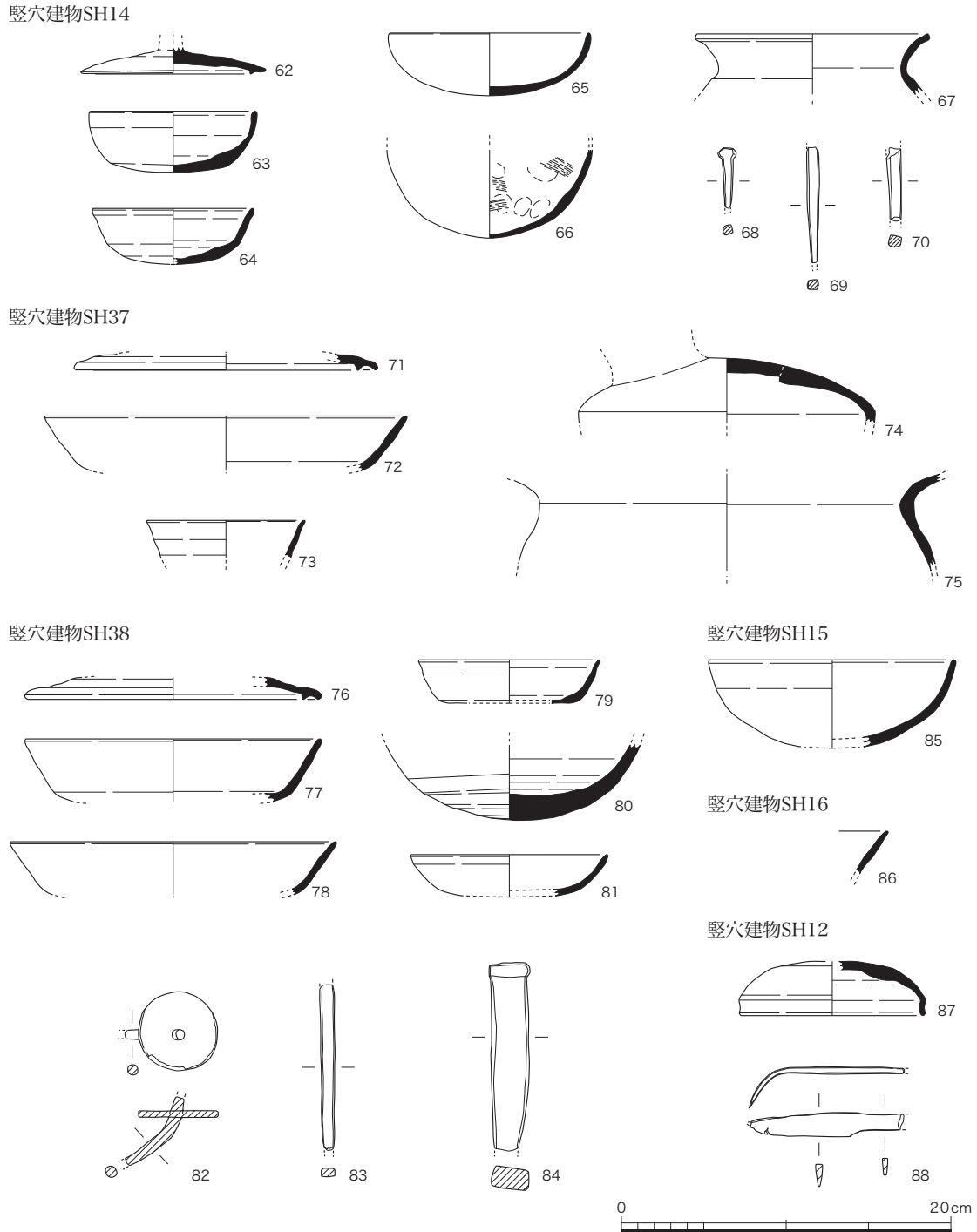
**竪穴建物 SH15 出土遺物**（第 52 図、図版 33、付表-3） 土師器などの遺物が少量出土したにすぎなかった。85 は土師器の杯Cである。外面に黒斑を有するが、内外面とも摩滅が顕著であるため、調整手法は不明であった。

**竪穴建物 SH16 出土遺物**（第 52 図、図版 33、付表-3） 須恵器などの遺物が少量出土したのみである。86 は、須恵器の杯と考えられる口縁部片である。細片のため、口径など法量を復元することはできなかった。

**竪穴建物 SH37 出土遺物**（第 52 図、図版 33、付表-3） 土師器や須恵器などと共に、縄文の遺物も混在した状態で出土している。

土師器甕（75）は、屈曲する口頸部の破片であるが、内外面とも摩滅が顕著なために調整手法は不明であった。

須恵器には、杯（72・73）、杯B蓋（71）、平瓶（74）などの器種がある。73 は高台をもたない杯と考えられるが、杯Gか杯Aかの区別は困難であった。71 は口縁部内面にかえりが付く蓋で、法量から杯Bの蓋と考えられる。72 は杯Bの口縁部片と考えられるが、小片から復元したため、口径はもう少し小さいかもしれない。74 の外面には、自然釉の付着が認められる。上記の須恵



第 52 図 豎穴建物出土遺物実測図 (1/4)

器は、飛鳥IV期の範疇にとらえられるものと考えられる。

**豎穴建物 SH38 出土遺物** (第 52 図、図版 33、付表-3) 土師器や須恵器、それに鉄製品などの遺物が少量出土している。

土師器には、口径 12cm に復元できる杯G (81) があるが、内外面とも摩滅が顕著であるため、調整手法は不明であった。

須恵器には、杯A・杯B・杯B蓋・壺の底部などがある。79 は杯A、77・78 は杯A ないし

杯Bの口縁部片と考えられる。76は口縁部内面にかえりの付く形態の杯B蓋で、杯Bと組み合わせるものと考えられる。壺(80)の外面は、回転ヘラケズリを施して調整している。これらの須恵器は、おおむね飛鳥IV期に比定でき、SH37からの出土品と大きな時期差を認めることはできない。

鉄製品には、紡錘車(82)と鉄釘(83・84)などがある。紡錘車は、紡輪はほぼ完形であるが、断面円形の紡軸は破損していて、しかも大きく曲がっていた。紡輪の径は4.8cm、厚さ0.4cm、紡軸径は0.7cmである。類例が、神足遺跡の飛鳥時代の竪穴建物SH52から出土している<sup>(16)</sup>。鉄釘は、83が断面長方形の小形品、84は断面長方形の大形品であり、前者は長辺0.9cm、短辺0.5cm、後者は長辺2.5cm、短辺1.3cmである。

#### 4 縄文時代の遺物

この時代の遺物としては、縄文土器と石器、それに土製品などがある。その大半を占めているのが中期末に比定できる縄文土器であり、次いで各種の石器類が多く、晩期の縄文土器と土製品はごくわずかであった。これらの遺物は、縄文時代の竪穴建物や土坑などの遺構から出土したものがほとんどであったが、新しい時代の遺構に混在した状態で出土したものもある。以下では、縄文土器、土製品、石器に大別し、さらに遺構ごとに分けてそれらの概要を説明することにした。

##### (1) 縄文土器

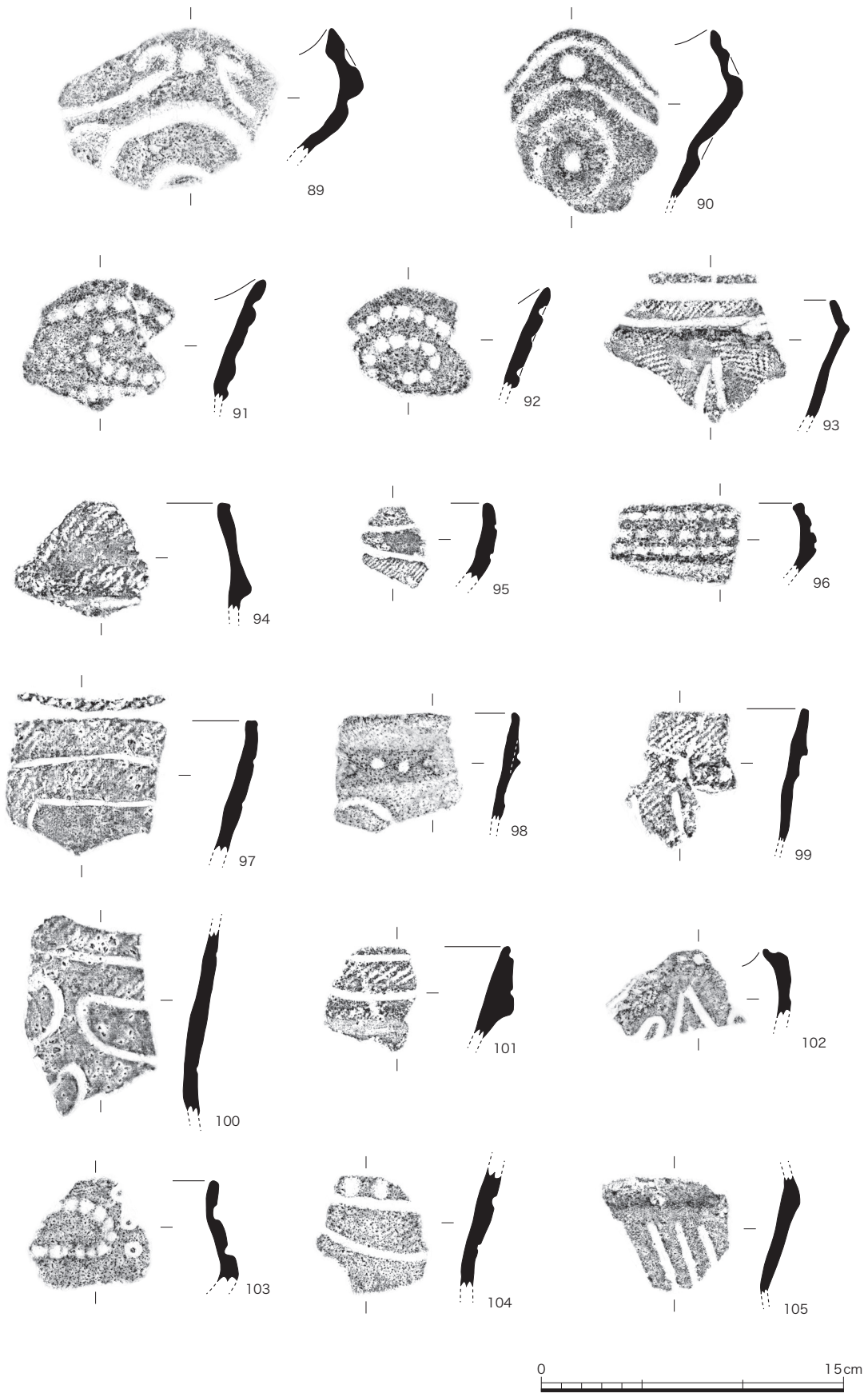
縄文土器のうち、大半を占めているのは中期末にあたる北白川C式期のものであり、他に晩期の長原式に比定できるものがごく少量出土している。

**竪穴建物 SH39 出土土器** (第53～57図、図版34～37、附表-4) この遺構からは、最も多量の縄文土器が出土している。しかしながら、縄文土器は小片が多いこともあって接合率が乏しく、ほとんど全形を窺い知れるものはなかった。このことにより、縄文土器の大半が破砕された状態で廃棄された可能性が濃厚と考えられる。いずれの縄文土器も、中期末の北白川C式期に位置づけられるものであって、縄文土器の説明にあたっては、北白川追分町遺跡の報告書で提唱された泉拓良氏の分類<sup>(17)</sup>を参考にした。

縄文土器は、形態的な特徴から深鉢と浅鉢に大きく分けることができ、深鉢はさらにA類～D類に細分することができた。

深鉢A類は、口縁部の直下に文様帯をもち、口縁部が水平ないしは波状を呈する深鉢形土器で、最も破片の数量が多い器種である。89～92・102は波状の口縁部をもつ形態で、89・90は沈線で多重の円弧文を施し、口縁部の先端には凹点を配している。91・92は刺突文を渦巻き状に施して加飾したもので、同一個体の可能性が考えられる。

93～99・101・103・106・108・111は、水平の口縁部をもつ形態である。93は頸部の屈曲により口縁部と胴部を区分する形態で、口唇部に至るまで縄文を施し、胴部には垂下沈線文で加飾している。94は112と同一個体の可能性があるのではないかと考えられる。



第53図 竪穴建物 SH39 出土縄文土器実測図-1 (1/3)



95・96・103は口縁部が内湾気味に立ち上がる形態で、95は沈線を2条施し、96は湾曲部に刺突文を3列平行するように施している。103は刺突文によって長楕円形の区画文を表現していて、104と同一個体の可能性がある。97は口唇部も含めて縄文を施してから、沈線により平行および区画の文様を描いている。100も同じ文様構成の胴部片で、胎土や色調も類似していることから97と同一個体の可能性が濃厚と考えられる。98と99は口縁の下に隆帯が1条巡り、隆帯より下には刺突文を施している。101は口縁部を肥厚させた形態で、縄文を施した後に平行する2条の沈線で施文している。105・110・112は口縁部と胴部の境を隆帯によって区画するもので、105と110は隆帯の下に複数の垂下沈線文を施している。106は口縁部から一段下がった部位に突帯を施すもので、縄文を施した口縁端部に沈線を1条巡らせている。111は口唇部にまで縄文を施している口縁部片で、口縁部の下半に突帯を施す。

深鉢B類は、隆起帯で楕円形の区画文を水平に連続させる文様のある深鉢形土器であるが、数量的には乏しいとみられる。109は隆起帯の一部が遺存する破片で、隆起帯の上に凹点を施す。107は、橋状の突起を有する口縁部の破片である。117は渦巻状の沈線の上に隆帯がある。

深鉢C類は、突起状の山形口縁をもつ特徴的な形態の深鉢形土器であるが、出土量はB類と同様にそれほど多くはない。124・127～130は、突起部分の破片である。124は口縁部に楕円形の区画文を施したもので、125と同一個体であると考えられる。126は底部径が12.6cmに復元できる平底の底部片であるが、胎土や色調などから判断すると、124・125と同一個体である可能性が強い。127・128は突起の先端部分の破片で、いずれも二重の沈線で区画文を施している。

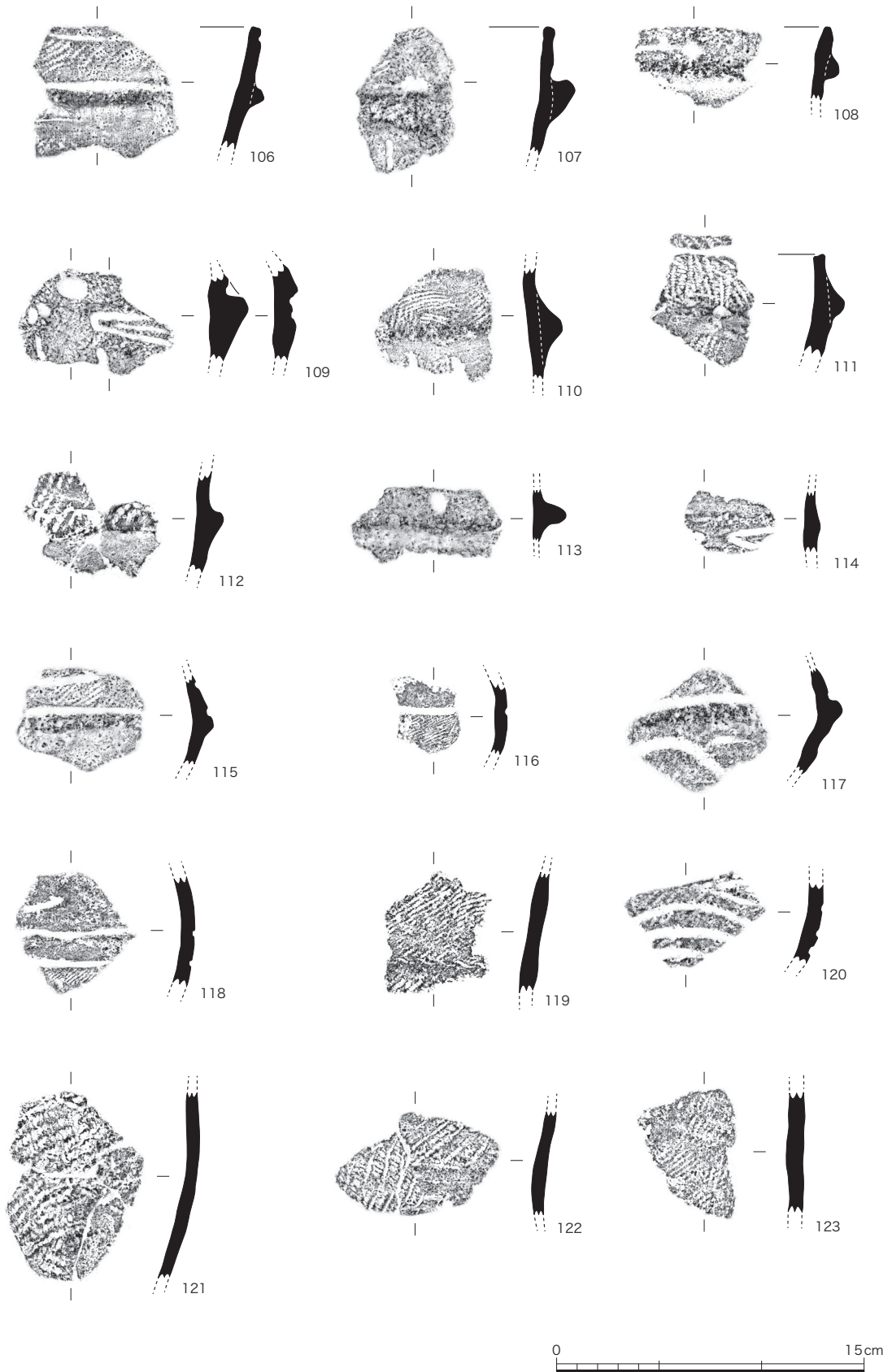
深鉢D類は、器壁を沈線などで描いた文様で装飾することなく、縄文のみを施して仕上げた深鉢形土器で、119や121～123がこれに相当するのであろう。いずれも破片のため、全形を窺うことはできないが、竪穴建物SH32の出土品（第59図189・190）のような形態になるものと推察される。

116・118・120・132～150は有文深鉢の胴部片であり、縄文と沈線文で加飾するもの（116・118・132・133・135～139・141・147～150）、沈線文のみで縄文のないもの（134・140・142・144～146）などがある。沈線文には、多条の垂下沈線を施すもの（137・141）の他、多重の区画文を施すもの（132）、渦巻き文など曲線的な文様を施すもの（120・134・136・146）の他、S字状文を施すもの（139）も少数ある。これら胴部片の多くは、おおむね深鉢A類と考えてよいであろう。

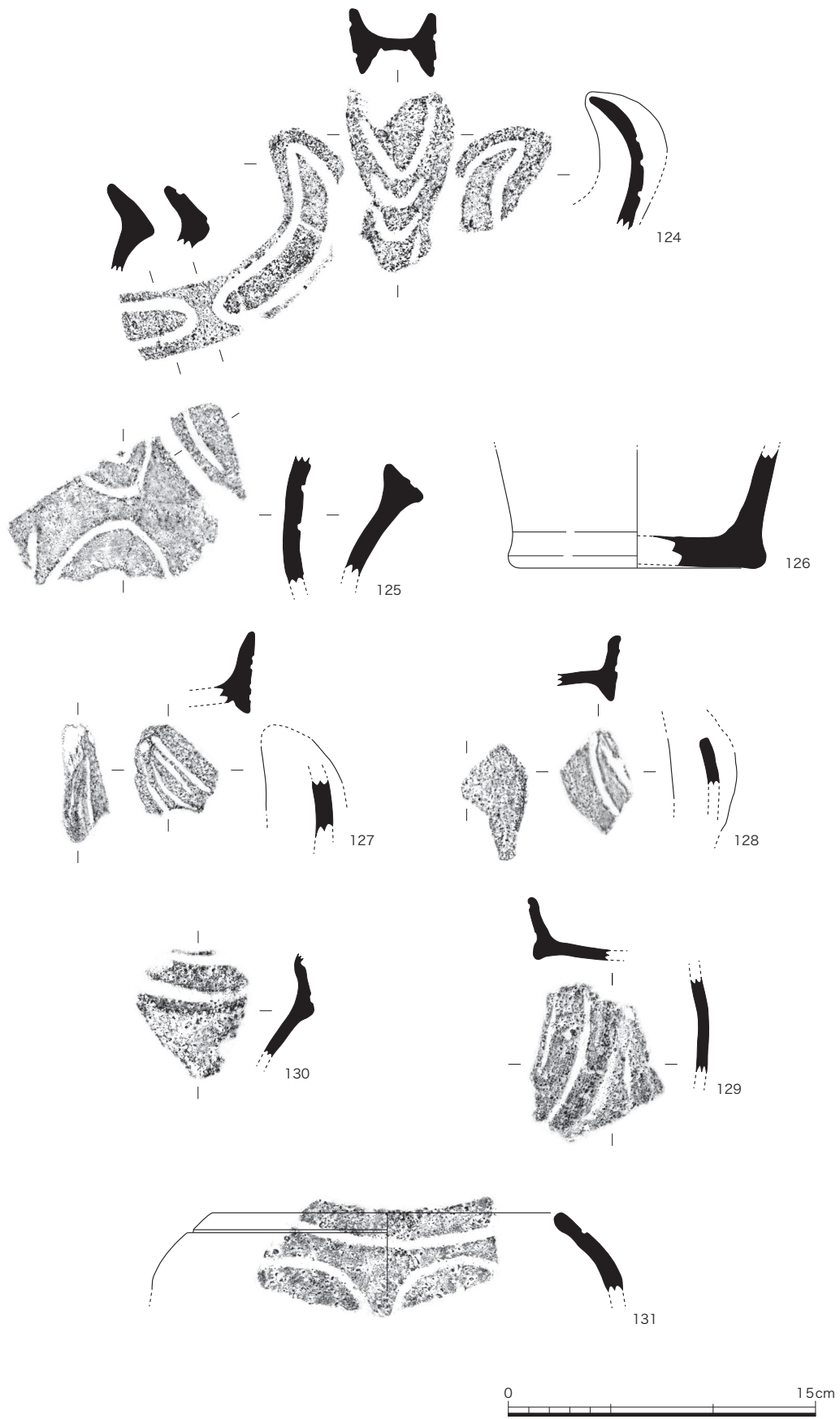
151～171は、深鉢ないし浅鉢形土器の底部片である。底部径が約7.8cmの小さなもの（156）から、14cmの大きなもの（170）まで各種ある。形態的には、底部から胴部にかけて垂直に近く立ち上がるものと、外上方に開くものの二者に分けることができ、おおむね平底を呈しているが、上げ底気味のもの（157・171）もわずかではあるが認めることができる。また、底部から胴部にかけて残る156・163・165には、外面に施された縄文が認められる。

浅鉢A類（131）は、口縁部が内湾しながら屈曲する有文の浅鉢で、深鉢に比べて出土数は極

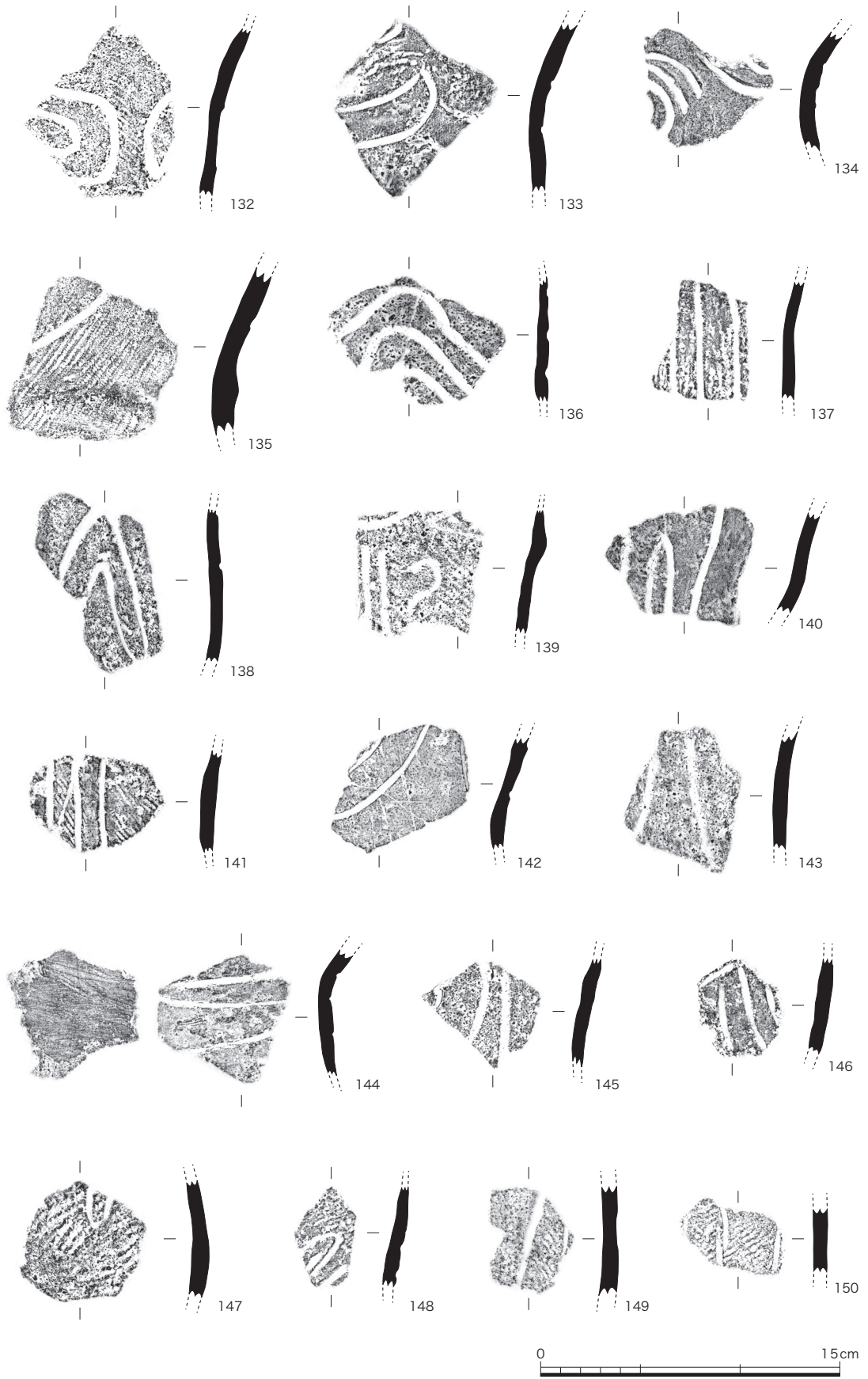




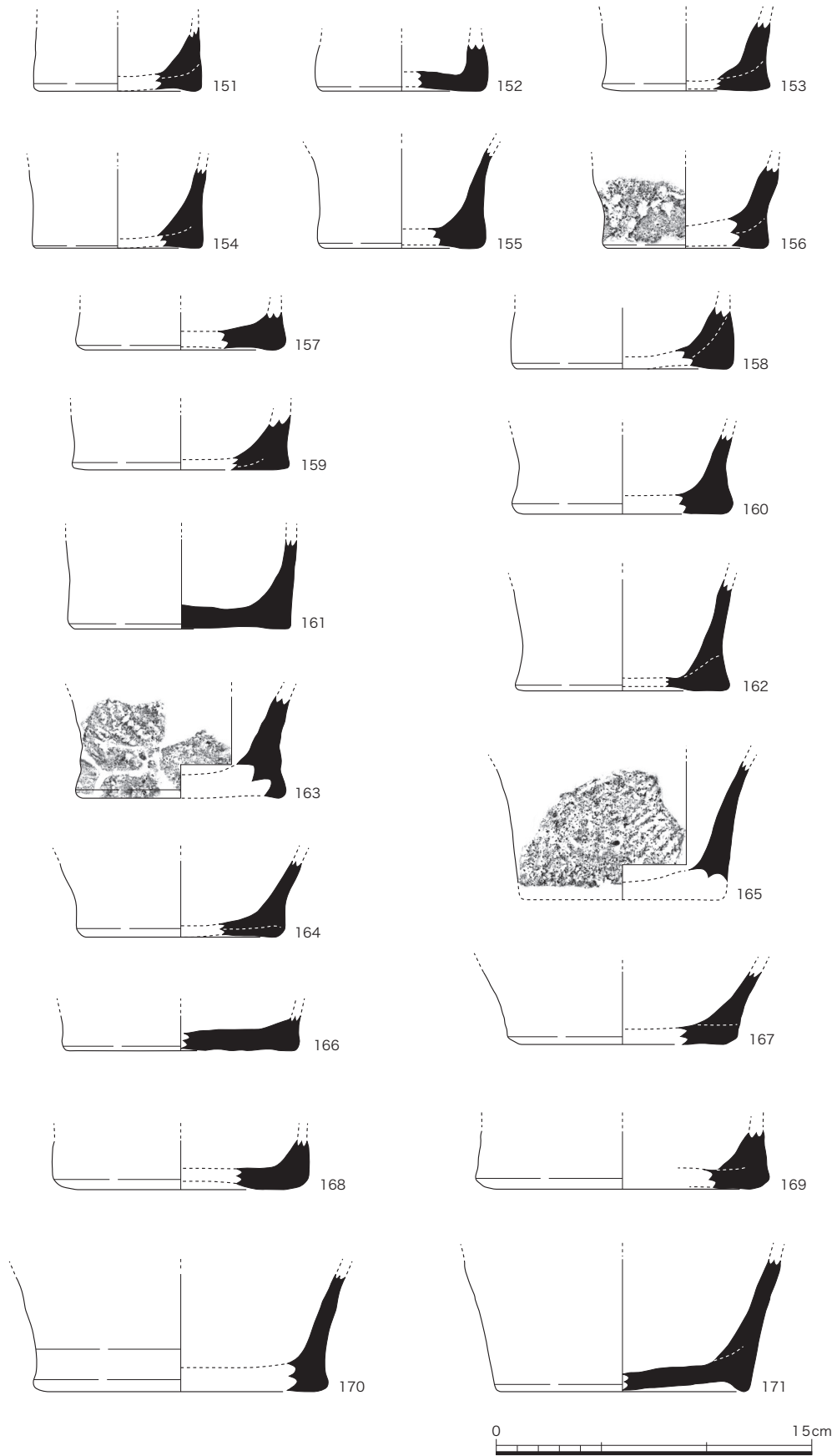
第54図 竪穴建物 SH39 出土縄文土器実測図-2 (1/3)



第 55 図 竪穴建物 SH39 出土縄文土器実測図-3 (1/3)



第56図 竪穴建物 SH39 出土縄文土器実測図-4 (1/3)



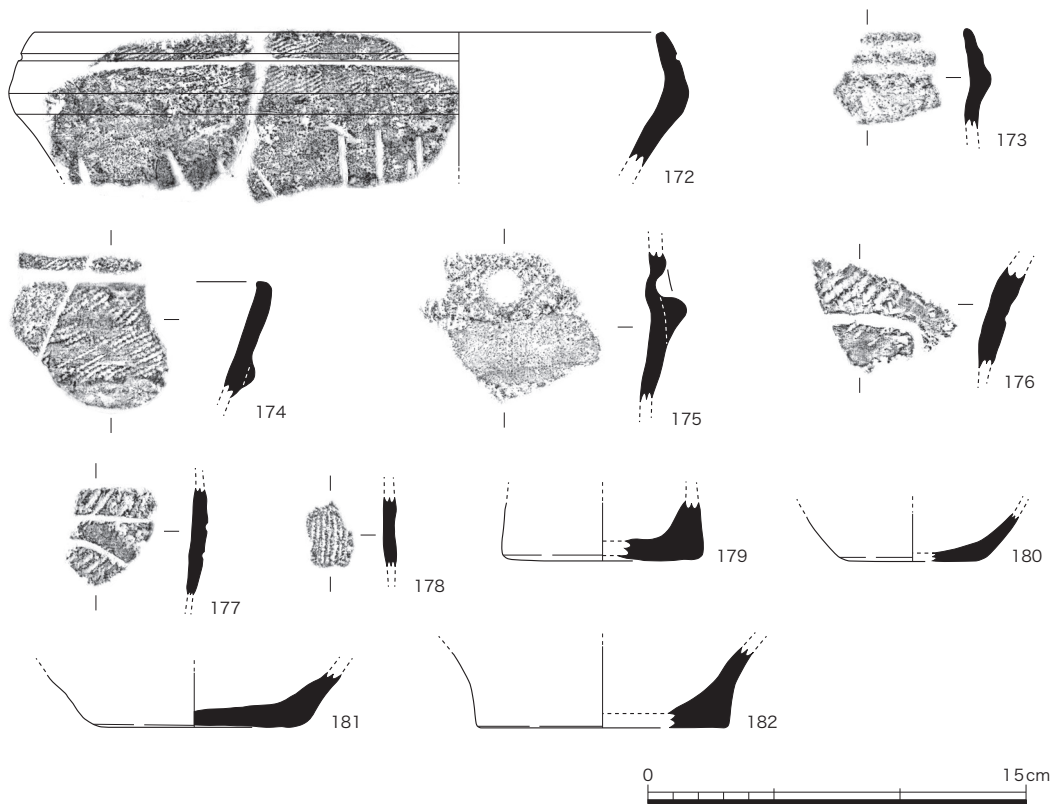
第 57 図 竪穴建物 SH39 出土縄文土器実測図-5 (1/3)

めて乏しいと考えられる。内湾しながら立ち上がる口縁部の破片で、縄文を施した後、口縁部に平行する直線文を1条とその下に弧状の沈線文を施して加飾している。口径は、約17cmに復元することができる。

**竪穴建物 SH17 出土土器**（第58図、図版38、付表-4） この遺構からも、北白川C式期の縄文土器片が出土しているが、量的にはさほど多くはなかった。

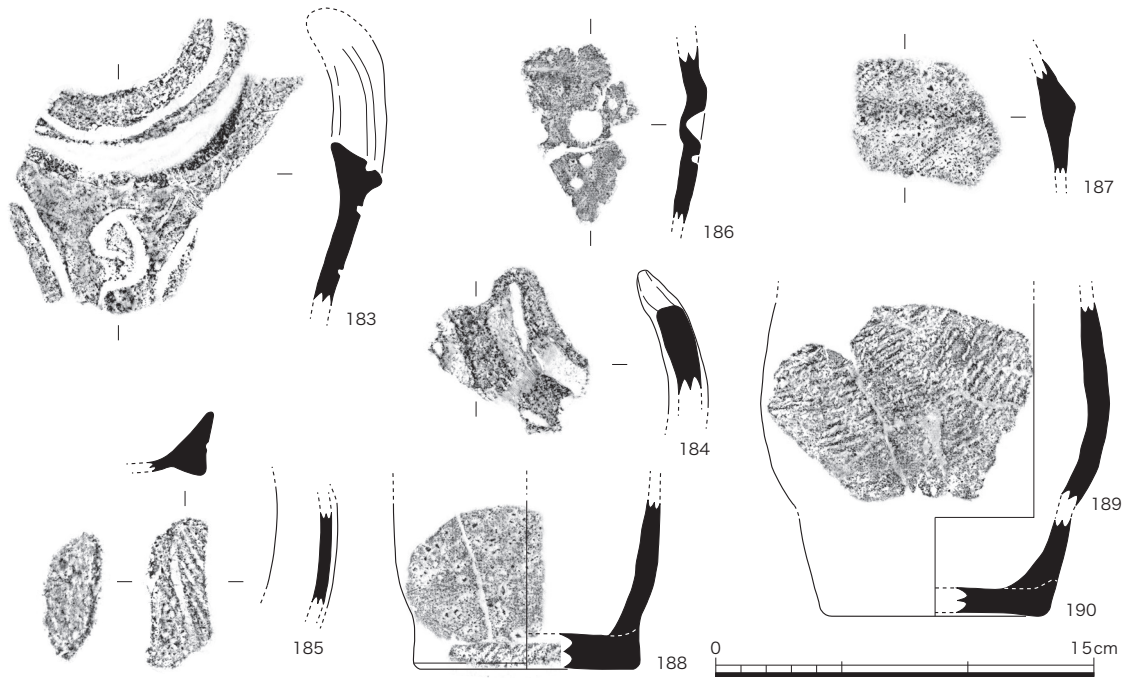
縄文土器には、深鉢A類（172～174）と深鉢B類（175）の他、胴部の破片（176～178）や底部の破片（179～182）などがある。172は水平口縁をもつ形態の深鉢A類の口縁部片で、口径は約25cmに復元できる。口縁部と胴部の境がわずかに肥厚し、口縁部には沈線文を1条、胴部には多条の垂下沈線文を施して加飾している。173は、口縁部に平行する沈線を2条施している。174は水平口縁をもつ形態の深鉢で、口縁部の下半に突帯を巡らし、口唇部にも縄文を施している。175は隆帯により楕円形の区画文を作る深鉢B類で、隆帯の上下に縄文を施し、上部には円形の凹点を押圧している。胴部の破片である176と177は、ともに縄文と沈線文を施して加飾している。178も胴部の小片で、縄文が認められた。179～182はいずれも底部の破片であり、180～182は平底の底部から胴部に向かって外上方に開く形態であるのに対して、179は垂直に近く立ち上がっている。底部径は、179が7.9cm、180が5.4cm、181が8.2cm、182が10cmに復元することができた。

**竪穴建物 SH32 出土土器**（第59図、図版38、付表-4） 建物の壁面が完全に削平を受けて

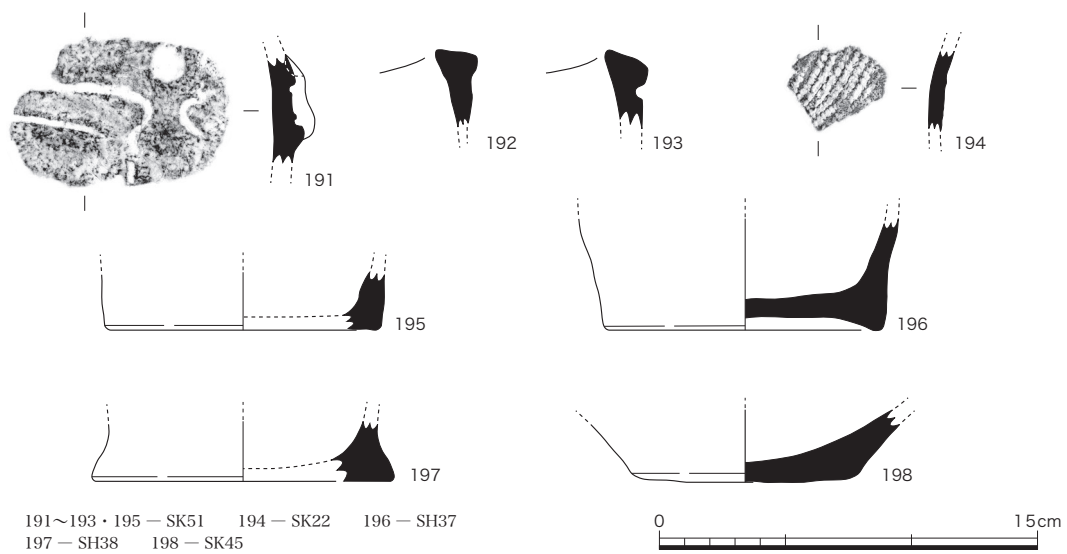


第58図 竪穴建物 SH17 出土縄文土器実測図 (1/3)

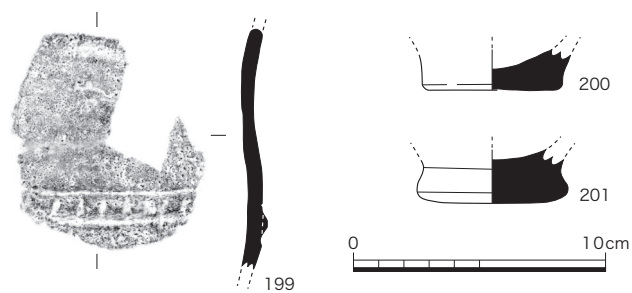




第 59 図 竪穴建物 SH32 出土縄文土器実測図 (1/3)



第 60 図 竪穴建物、土坑、小穴出土縄文土器実測図 (1/3)



第 61 図 土坑 SK33 出土縄文土器実測図 (1/3)



いたため、北白川C式期の縄文土器や石器などの遺物が出土したのは、大半が炉跡および支柱穴からである。このため、全体的に縄文土器の出土量は少なかった。

183～185は突起状の山形口縁をもつ深鉢C類の口縁部片で、183は、垂下沈線文の間にS字状沈線文を施して加飾している。184は突起部の破片で、183とともに南側の支柱穴P94から出土したものである。186・187は、深鉢B類の破片と考えられるものである。186には押圧文と刺突文が施されており、187には縄文が施文されている。ともに支柱穴P94からの出土である。188～190は、炉跡から出土した縄文を施文した小型の深鉢D類と考えられるもので、底部径は188が約9cm、190が約9.2cmに復元できた。189と縄文が施された190は、色調や胎土の特徴からみて、同一個体になる可能性が考えられる。

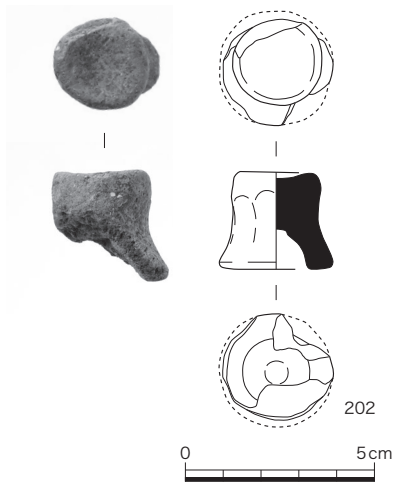
**土坑SK22・45・51出土土器**（第60図、図版39、付表-4） 191～193・195は、SK51から出土した縄文土器である。191は、北白川C式期の深鉢B類で、口縁部から少し下がった所に施された楕円形の区画文のつなぎ部が突起状になっている。192・193は、波状を呈する口縁の端部を肥厚させた形態の深鉢A類の破片と考えるものである。胎土には砂粒を多く含み、色調が焦げ茶色を呈していることなど、両者は同一個体の可能性が濃厚で、北白川C式期に比定することができる。194はSK22から出土した胴部の小片で、外面には縄文が施文されている。198は、SK45から出土した底部片。平底の底部から外上方に開く形態で、底部径は9cmに復元できた。194・195とも、明確な時期は決めたいが、北白川C式期のものであろう。

**土坑SK33出土土器**（第61図、図版39、付表-4） この土坑からは、晩期の縄文土器片が少量出土している。199は外反気味に緩やかに開く口縁部の破片で、口縁端部の突帯を欠失しているが、緩やかな肩部に突帯を1条巡らせていることから、2条突帯土器と考えられる。肩部の突帯は、断面三角形を呈しており、刻目を施している。200・201は底部の破片で、200は平底、201は丸味を帯びて若干膨らんでいた。いずれの土器片も、暗茶褐色を呈していて、砂粒を比較的多く含む特徴がある。底部の径は、200が5.6cm、201が6cmに復元することができた。2条の突帯をもち、底部が平底である上記の土器片は、いずれも縄文時代晩期末にあたる長原式の範疇に入るものと推察することができる<sup>(18)</sup>。

縄文時代晩期の伊賀寺遺跡では、第988次調査の小土坑から滋賀里Ⅲ式の土器が出土している他、第927次調査と第947次調査で少量の船橋式土器が、また第910次調査では石冠が出土している程度で、中期や後期に比べると出土事例が極めて乏しい状況であることから、集落形成が大きく衰退したことをうかがい知ることができる。

**その他の遺構出土土器**（第60図、図版39、付表-4） 縄文時代よりも新しい時代の遺構からも縄文土器が混入した状態で出土している。

196・197は、いずれも底部の破片である。平底の底部から垂直に近く立ち上がるもの（197）、上げ底気味の底部から垂直に近く立ち上がるもの（196）などがある。底部径は、196が11cm、197が11.1cmに復元できた。196は竪穴建物SH37、197は竪穴建物SH38からそれぞれ出土したものである。



第 62 図 竪穴建物 SH17 内  
土坑 SK44 出土耳栓実測図 (1/2)

上記の土器は、いずれも底部の破片であるために明確な時期を決め難いが、おそらく中期末の北白川 C 式期のものと考えて大きな間違いはないであろう。

### (2) 土製品

土製品は、耳栓と呼称される形態の耳飾りが竪穴建物 SH17 内の土坑 SK44 から 1 点出土しているのみである (第 62 図 202)。破損品ではあるが、裾が広がる臼状の形態になるものと推察され、上面は少し窪んですり鉢状を呈していた。上端径約 2.3cm、下端径約 3 cm、高さ約 2.6cm の分量に復元することができ、胎土は緻密で、硬質に焼成されていた。伊賀寺遺跡では、第 1078 次調査で確認された竪穴建物の可能性が濃厚な遺構から、北白川 C 式期の土器類とともに本例よりも一回り大きい耳栓が 1 点出土しており、本例が 2 例目ということになる<sup>(19)</sup>。

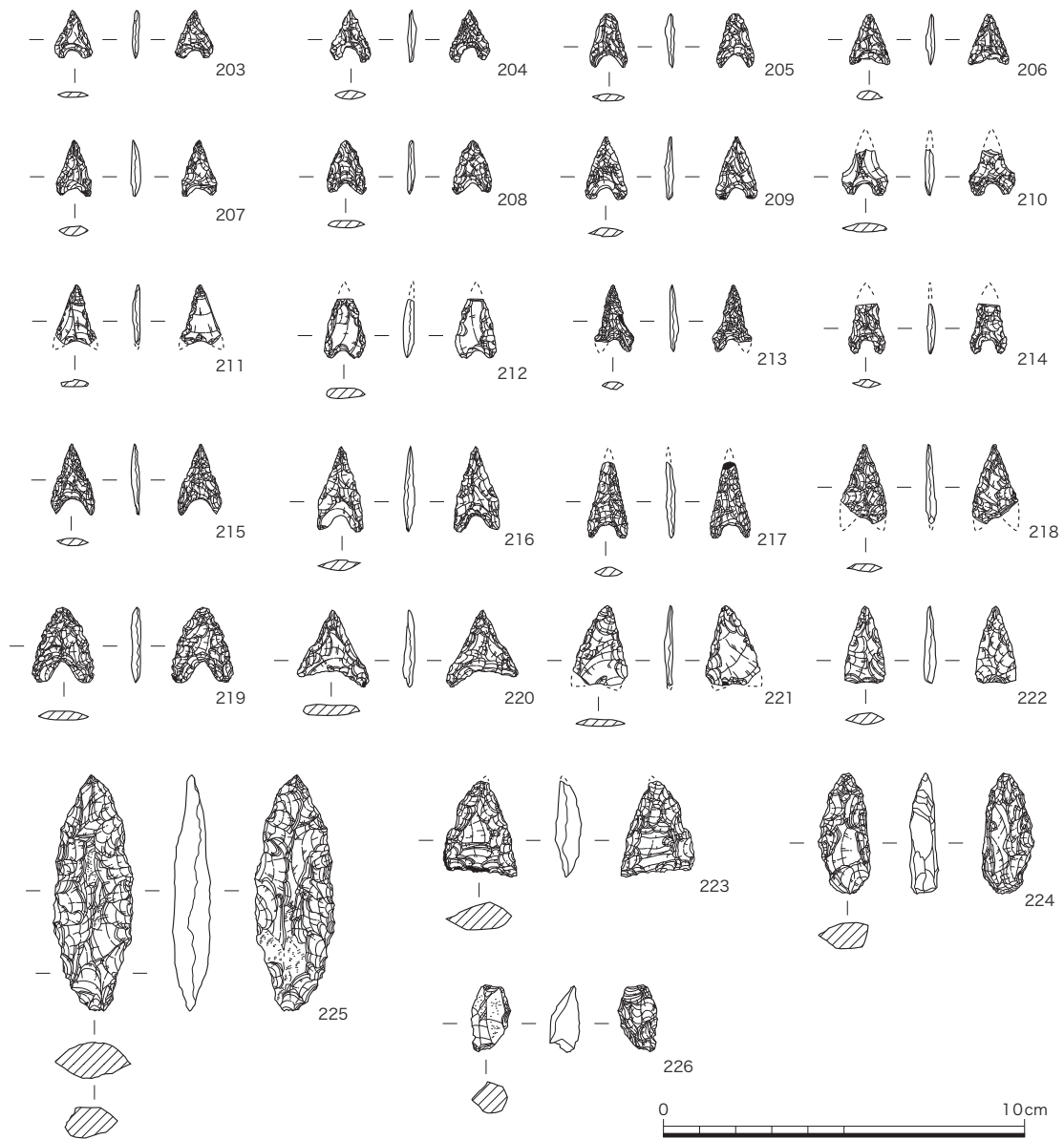
### (3) 石器

石器には、打製石器と磨製石器 (礫石器) があり、前者は石鏃・尖頭器・石匙・削器・楔形石器・剥片などが、後者は石斧・切目石錘・磨石・凹石・砥石・石皿など種類が豊富である。打製石器の大半は、サヌカイトで作られたものであるが、他に少量のチャートと水晶がある。磨製石器 (礫石器) に使用された石材は、砂岩や緑色岩などこの地域で産出するもの以外に、石英斑岩や流紋岩など他地域から搬入されたものも少なからず認めることができた。これら石器の大半は、縄文時代の遺構から出土しているが、とりわけ竪穴建物 SH39 からの出土量が突出して多い傾向がある。また、縄文土器の場合と同様に、新しい時代の遺構に混入した状態で出土したものも少なからず存在している。

**竪穴建物 SH39 出土石器** (第 63 ~ 66 図、図版 40 ~ 43、附表-5) 打製石鏃、打製尖頭器、削器、楔形石器、剥片、磨製石斧、切目石錘、磨石、凹石、石皿など各種のものが出土している。

打製石鏃は、22 点ほど出土している。凹基式鏃、平基式鏃、凸基式鏃の 3 形式に大別することができ、いずれもサヌカイト製と考えられる。サヌカイトの産出地については、大半が大阪府と奈良県との境に所在する二上山から産出されたものと考えられるが、四国の香川県に所在する金山産のものを含んでいる可能性が考えられる。

凹基式鏃 (203 ~ 220) には、正三角形に近い形態のもの (203 ~ 206・219・220) と長三角形のもの (207 ~ 218) に大別することができ、後者には 210・213 のように腸袂が肥大してハート形を呈するものが少量ある。約半数が完形品であったが、210・212・214・217 は先端部を、211・218 は両方の腸袂の先端部を、213 は片方の腸袂を欠損していた。基部の扱いは、全体的に丸味を帯びた深いものが多いが、211 のように浅いものもある。219 は、刃部のみならず両方の腸袂の先端も丸味を帯びた作りである。220 は、左右非対称の形態を呈しており、刃部は直線的に作られている。



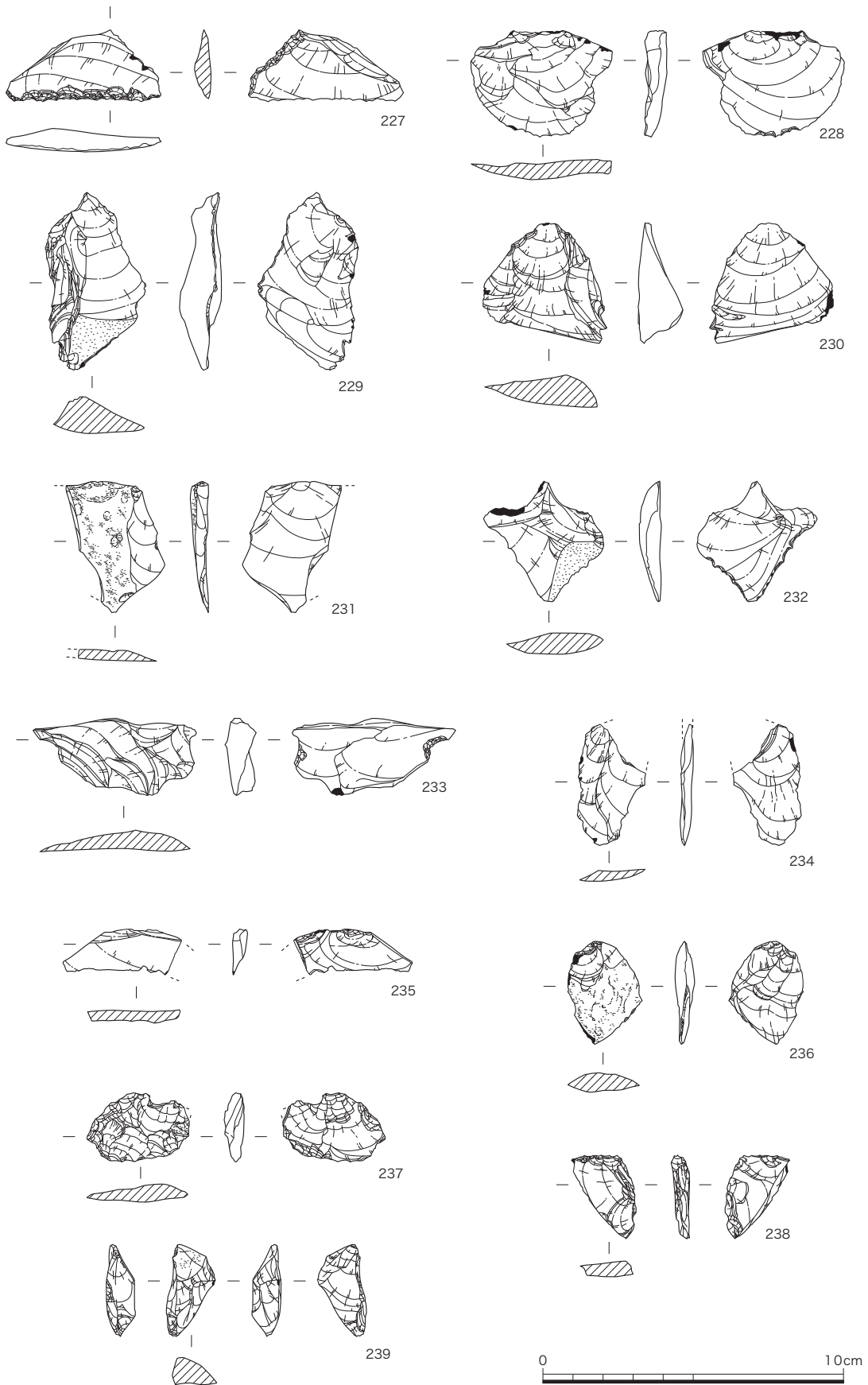
第 63 図 竪穴建物 SH39 出土打製石器実測図-1 (1/2)

平基式鏃 (221 ~ 223) は、いずれも長三角形を呈するように作られているが、222 が左右対称に形作られているのに対して、221・223 は非対称形になっている。

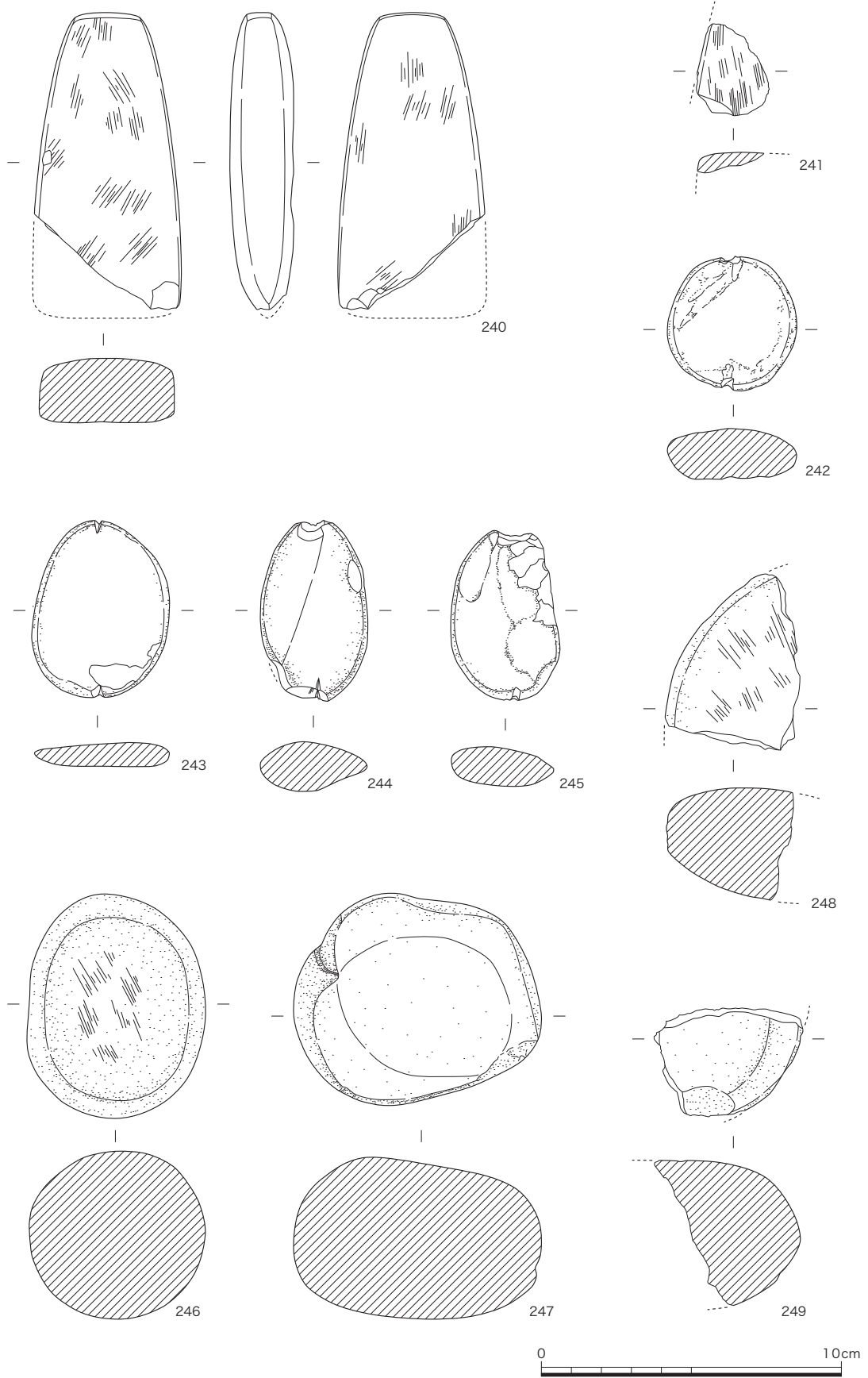
凸基式鏃 (224) は 1 点のみの出土であるが、歪な形態を呈しており、しかも刃部を十分に剥離調整していないことからすると、未製品である可能性も十分に考えられる。

打製尖頭器 (225) は、建物の支柱穴 P157 内から 1 点出土している。長さ 6.55cm、幅 2.15cm、厚さ 1 cm 前後の大きさがある完形品である。刃部を両面加工した厚みのある製品で、二上山産のサヌカイトを用いて作られているものと推察できる。

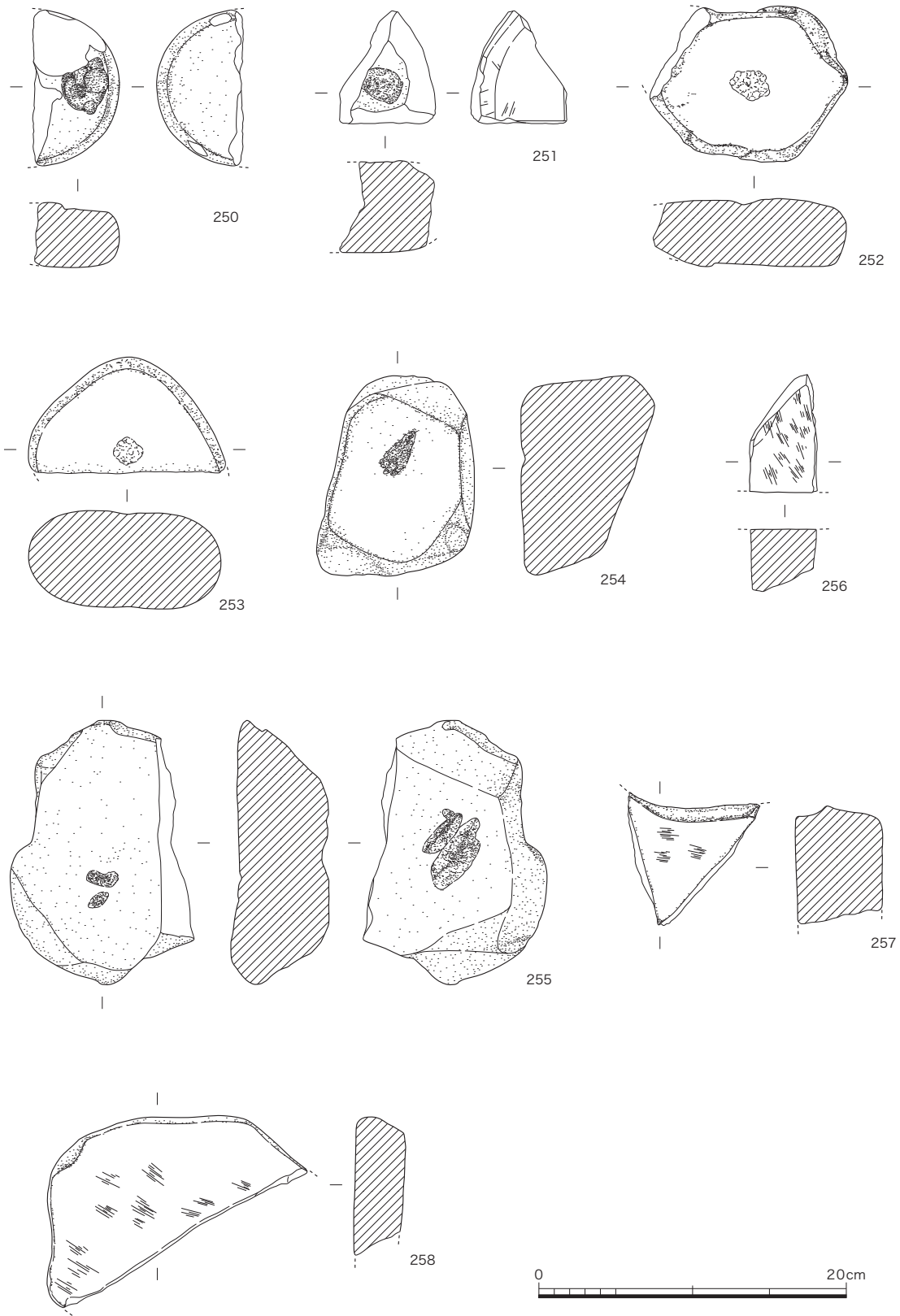
227 は、サヌカイト製削器の完形品である。横に長い剥片を使用しており、片面のみに刃部加工を施している。228 もサヌカイト製の削器と考えられるもので、片面を刃部加工している。238・239 は楔形石器と考えられる完形品で、ともにサヌカイト製である。226 も、楔形石器の



第64図 竪穴建物 SH39 出土打製石器実測図-2 (1/2)



第 65 図 豎穴建物 SH39 出土磨製石器実測図- 1 (1/2)



第 66 図 竪穴建物 SH39 出土磨製石器実測図-2 (1/4)



破碎片ではないかと考えられるものであるが、石材種がサヌカイトではなく、水晶(石英)<sup>(20)</sup>である点は注目に値することができよう。229～236は、いずれもサヌカイトの剥片、237はチャート製の剥片である。229と230は剥片のなかでもやや大型の部類に属するもので、231には自然の礫面が残っている。

磨製石斧は、2点出土している。240は刃部の大半を欠失している以外は、ほぼ旧状をとどめていた。基部から刃部に向かって幅が広がる撥形の形状で、各面とも非常に丁寧に研磨して仕上げられていた。破損面が極めて直線的であることからすると、意図的に破碎された可能性が考えられる。石材種は、この地域では産出しない流紋岩である。241は石斧の基部付近と考えられる小破片で、表面は丁寧に研磨されていて、平滑さを保持していた。石材種は安山岩(玢岩)であって、240と同じ磨製石斧であるとはいえ、使用石材は異なっていた。

切目石錘は、4点出土している。いずれも完形品もしくは完形に近い状態で遺存しており、扁平な自然の円礫の長軸両端をV字状に打ち欠いて縄を引っかけるための窪みを形作っている。245には、切目以外に連続的な剥離調整の施された形跡が認められた。242は楕円形、243～245は長楕円形を呈した自然礫を使用しており、石材種は243が黒雲母ホルンフェルス、他の242・244・245は緑色岩であって、これらの石材はすべてこの地域の河原などで採取できるものであった。

磨石は、完形品2点と破損品2点の計4点出土している。246は卵形の礫を平滑になるように研磨して仕上げた完形品であるが、247は側面を研磨せずに粗雑なままの作りであった。石材種は、246が正珪岩(オルソクォーツァイト)、247は砂岩である。248と249は、共に破損品であって、表裏面は丁寧に研磨されているが、側面はほとんど研磨されておらず、粗雑に仕上げられていた。ともに被熱を受けているようで、破損面を含めた全体に赤味がかっていた。石材種は248が花崗斑岩、249が石英斑岩である。

凹石(250～255)は、250が扁平な円礫を使用した破損品で、片面にのみ敲打による凹みが認められる。石材種は、砂岩である。251～255は不整形な円礫を使用して作られたもので、完形品である254以外はいずれも破損品であった。251～254は片面のみに、また255には表裏2面の中央部付近に敲打痕を認めることができた。石材種は、251と253が安山岩(玢岩)、252・254・255の3点ともが砂岩であった。

石皿(258)は、扁平な一面のみに平滑化された使用痕が認められるもので、他は自然面のままで加工された形跡はみられなかった。石材種は安山岩(玢岩)である。

256・257は、ともに砥石の破損品である。256は使用面が1面のみで、他はいずれも破損面である。257は1面が使用面、他は自然面と破損面で、表面は全体的に被熱を受けているようで、うっすらと赤色化している。石材種は、256・257ともに安山岩(玢岩)である。

**竪穴建物 SH17 出土石器** (第67・68図、図版43・44、附表-5) 石器には、打製石鏃(261・266)、磨石(272・273)、凹石(275)などが出土している。261は、腸袂を有する長三角形の凹基式鏃で、基部の袂りは丸味を帯びた深いものであった。266は、基部が丸味を帯び

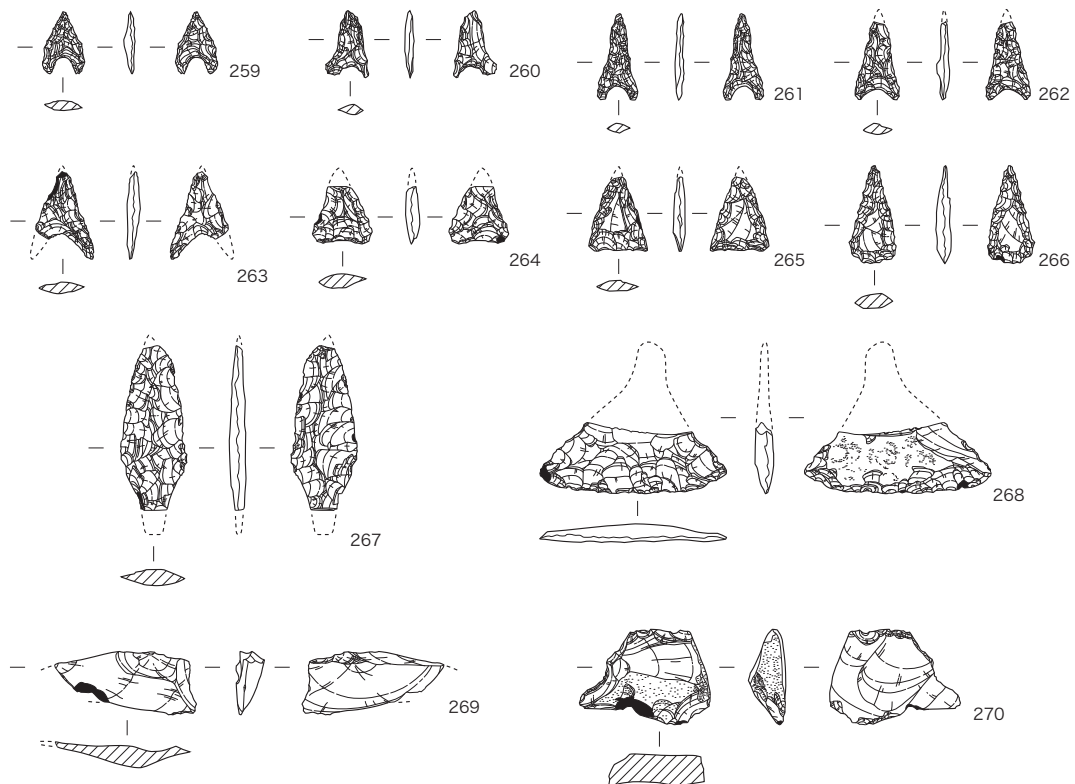
た長三角形を呈する凸（円）基式鏃で、261 とともにサヌカイトで作られた完形品である。

272 は表面全体を磨き上げた卵形を呈する磨石の完形品で、石材種は石英斑岩である。273 は卵形を呈した磨石の破損品で、表面は平滑になるまで研磨されている。建物内の土坑 SK44 から出土したもので、石材種は石英斑岩である。275 は凹石の破損品で、敲打痕のある面は平滑に磨き上げられている。石材種は安山岩（玢岩）である。

**竪穴建物 SH32 出土石器**（第 68 図、図版 44、付表-5） 石器には、磨石（271）がある。南側の支柱穴 P94 から縄文土器の破片と共に出土したもので、1/4 程度が残る破損品である。表面は、一部剥離していたが、全体に平滑に磨き上げられていて、破損面を含めて被熱を受けているため赤色化している。石材種は、砂岩であった。

**土坑 SK51 出土石器**（第 67 図、図版 43） この土坑からは、サヌカイトの剥片（269・270）が 2 点出土している。ともに長さが 3.5cm 前後しかない小片であるが、270 には一部に自然の礫面が残っていた。

**その他の遺構出土石器**（第 67・68 図、図版 43・44、付表-5） 縄文時代の遺構以外から出土した石器には、打製石鏃、打製尖頭器、石匙、石皿など各種ある。いずれも新しい時代の遺構に混入したものと考えられるが、石器そのものについてはおおむね縄文時代中期末に属するもの



259 - SB47 の P3    260・262・265 - SH38    261・266 - SH17  
 263 - SB50 の P137    264 - P92    267 - P40  
 268 - SB11 の P10    269・270 - SK51

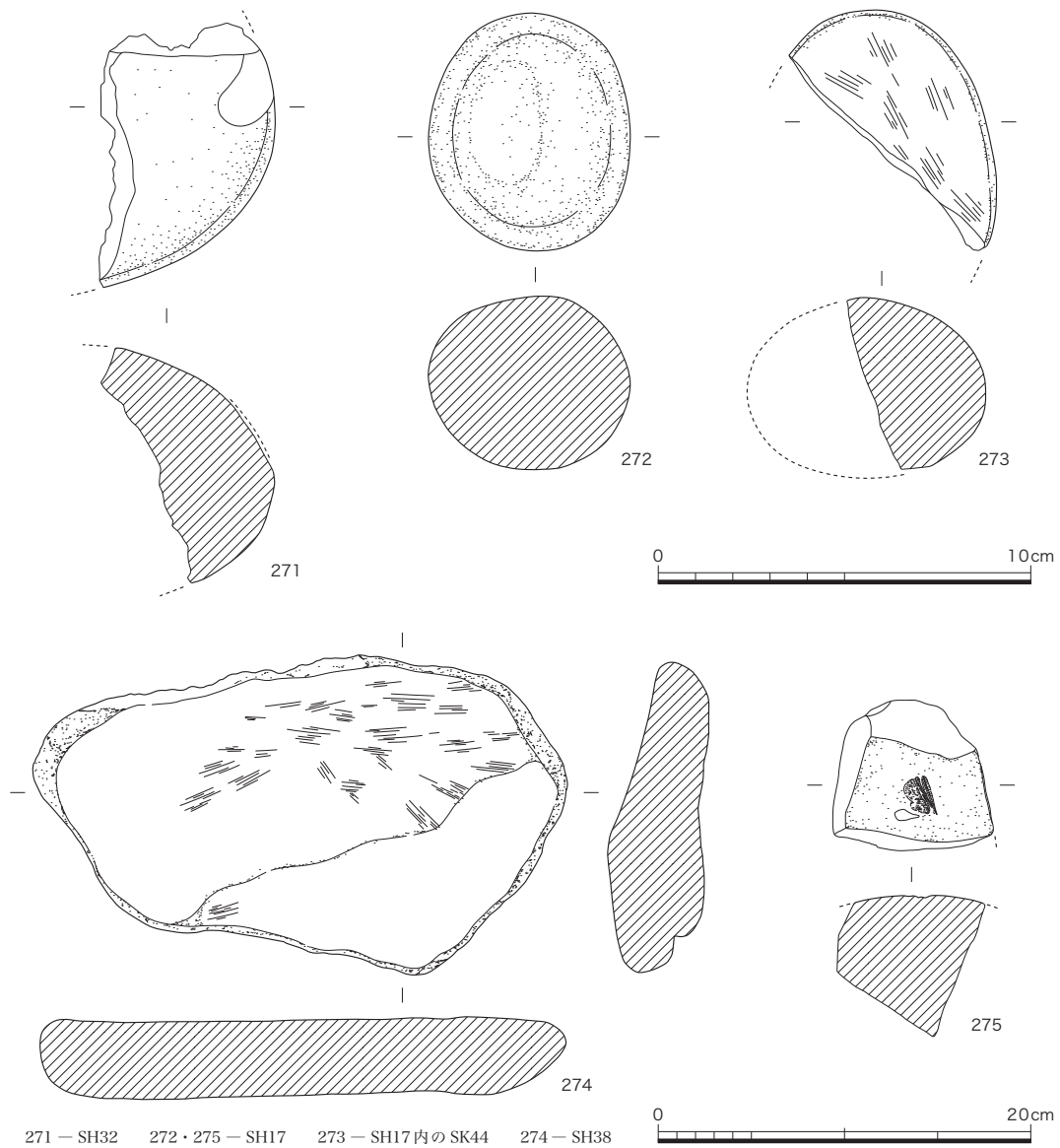


第 67 図 竪穴建物 SH17・土坑 SK51・小穴など出土打製石器実測図 (1/2)

と考えて間違いないであろう。

打製石鏃には、凹基式（259・260・262・263）と平基式（264・265）があり、いずれもサヌカイトの製品である。凹基式鏃である259は二等辺三角形を呈する小型品で、基部にやや深めの抉りを施す。長岡京期の掘立柱建物SB47の柱掘形P3の埋土中から出土したものである。260は左右非対称形に作られた完形品で、飛鳥時代の竪穴建物SH38から出土した。262は縦長の二等辺三角形を呈しているが、先端部を欠損する。この石鏃も、竪穴建物SH38から出土した。263は長三角形の凹基式鏃で、先端部と長く作られた腸袂の一方を欠損する。長岡京期の掘立柱建物SB50の柱掘形P137から出土したものである。平基式鏃の264・265は、ともに先端部を欠失しており、264は小穴P92から、265は竪穴建物SH38から出土した。

打製尖頭器（267）は、刃部を両面加工したサヌカイト製の尖頭器で、先端と茎部を欠損する。刃部を両面加工しており、法量はSH39の出土品に比べて一回り小さく作られている。小穴



第68図 竪穴建物・土坑・小穴出土磨製石器実測図（1/2・1/4）

P40 から長岡京期の須恵器杯B 蓋と共に出土したものである（第 22 図、図版 10）。

石匙（268）は、横長の形態であるが、基部をすべて欠損する。刃部を両面加工したサヌカイトで作られた製品で、刃部は緩やかに湾曲している。長岡京期の掘立柱建物 SB11 の柱掘形 P10 から出土した混入品である。

石皿（274）は、完形品であるが、飛鳥時代の竪穴建物 SH38 のカマド上に転用された状態で出土したため、被熱を受けたと見られる部分が薄赤色に変色していた。扁平な石材の一面のみが使用面であり、使用面は滑らかに凹んでいた。他の面は、いずれも手を加えていない自然面のままの状態であって、使用された形跡を認めることはできなかった。石材種は、安山岩（玢岩）である。

以上に説明した石器類の内、竪穴建物 SH38 から出土したものについては、重複した状態で検出した縄文時代中期末の竪穴建物 SH39 に本来は埋没していた可能性が濃厚ではないかと考えることができよう。

## 第4章 まとめ

以上みてきたように、今回の調査では、縄文時代中期から近世以降に至る長期に渡る各時代の遺構・遺物を確認することができ、大きな成果を得ることができた。以下では、本調査後の調査成果をも参考にしながら、長岡京の様相、飛鳥時代と縄文時代中期の集落の3項目について、若干の検討を加えてまとめとしておきたい。

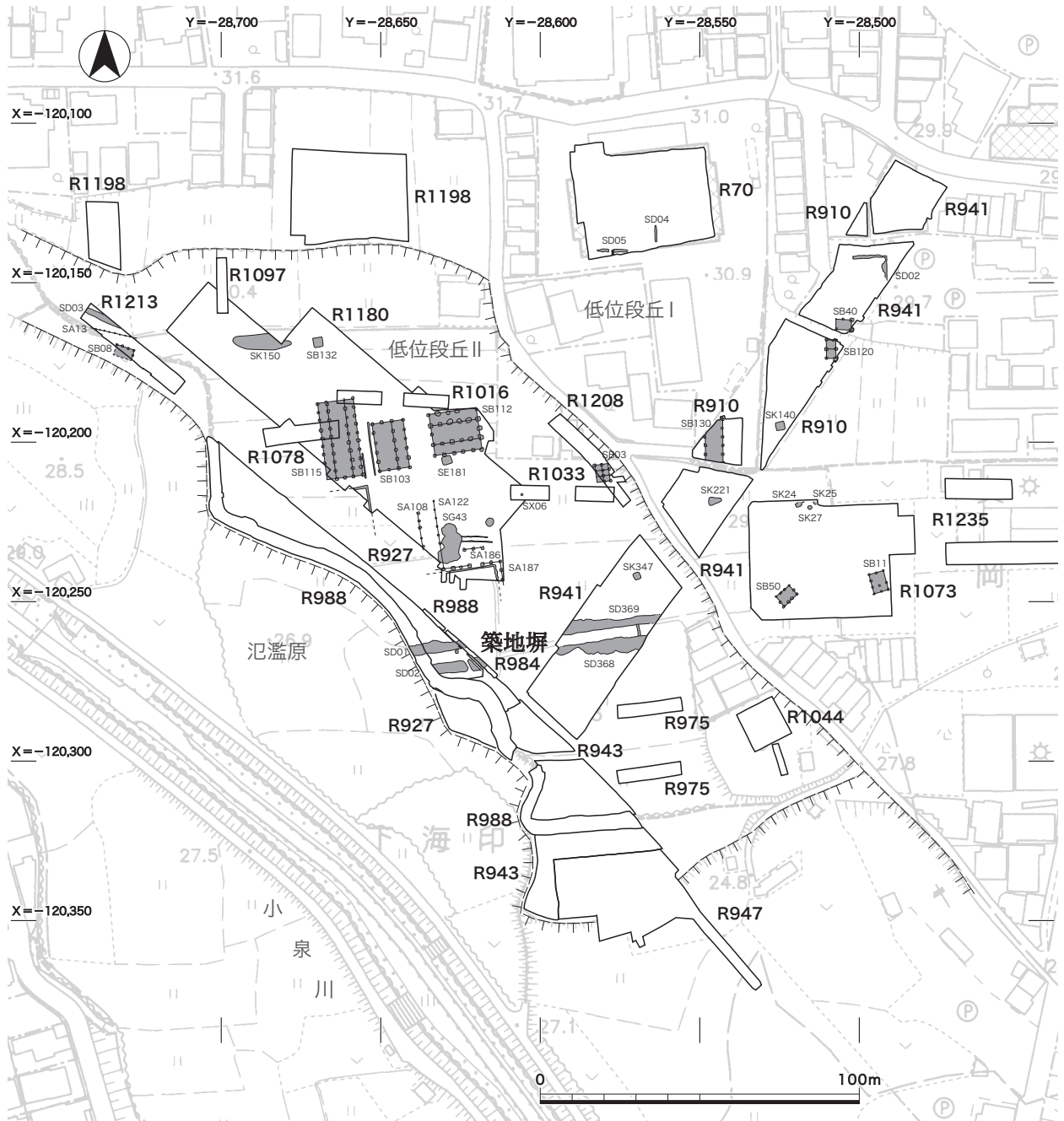
### 1 長岡京期の様相

今回の調査地が、長岡京の南西部にあたる右京八条三坊九町に推定されていることはすでに述べたが、九町内では過去に第 708 次<sup>(21)</sup>、第 910 次、第 941 次、第 975 次、第 1044 次<sup>(22)</sup>の計 5 回の発掘調査が実施されている。その中から長岡京期の遺構を抽出すると、第 708 次調査で西三坊坊間小路西側溝の可能性があるとされている南北溝 1 条、第 910 次調査で掘立柱建物 2 棟と方形土坑 1 基、そして第 941 次調査で土坑 1 基がそれぞれ確認されている。今回の調査では、掘立柱建物 2 棟と土坑 3 基、それにいくつかの小穴を確認したとはいえ、全体的にみれば、遺構の数量は必ずしも多いとはいえないであろう。

以上の長岡京期の遺構の特徴を述べると、まず今回検出した掘立柱建物はいずれも 2 間×3 間程度の小規模なものであったが、第 910 次調査で確認された建物は、柱間寸法が 10 尺（3 m）以上もある大型建物に復元できることは注意すべきであろう。建物の方位については、正方位を向くものもあれば、北で西に振れているものなど、必ずしも統一されていない特徴がある。これは、土坑についてもいえることで、こうした方位の相違は長岡京期の中で時間差を、あるいは京の南辺部という地域差を示唆している可能性を考えておく必要があるだろう。いずれにしても、九町での遺構の密度が乏しいことは事実視でき、活発な土地利用がなされなかったものと理解することが妥当であろう（第 69 図）。



次に、出土遺物に関しては、今回検出した土坑 SK24 から、通常長岡京で出土する典型的な土師器や須恵器などが一括で出土した他、土坑 SK27 から炉壁体の破片が出土していることは注目できる。第 941 次調査では、フイゴ羽口の出土や時期不明の鍛冶炉が 2 基検出されているが、今回検出した土坑 SK27 出土の炉壁体の存在を考慮すれば、2 基の鍛冶炉は長岡京期である可能性は充分にありうるわけで、九町内で金属製品を生産していた可能性が濃厚と考えられるのである。また、掘立柱建物 SB50 出土の土師器杯 A（第 51 図 47）のように、外面をヘラケズリ調整しないものや、土坑 SK24 出土の土師器杯 B（第 49 図 16）のように内面に放射状の暗文を施すものがあるなど、これまで長岡京で出土する事例の乏しい古い様相を示す土師器の杯・皿類が出



第 69 図 長岡京跡右京八条三坊九・十六町周辺の遺構配置図 (1/2000)

土していることも注意すべきことである。この類いの土師器類は、右京八条三坊十六町（第 941 次・第 1180 次調査<sup>(23)</sup>）や右京八条三坊二町（第 244 次調査<sup>(24)</sup>）、それに右京七条四坊五町（第 162 次調査<sup>(15)</sup>）などというように、いずれも長岡京の南部地域に偏在して出土する傾向があることは興味深いことである。

ちなみに、本調査以降に実施された第 1180 次調査などによって、西隣にあたる右京八条三坊十六町では方位が北で西に 8° 前後振れる大型建物を中心とする遺構群で構成される 1 町を占有する大規模宅地であることが確認された。こうした大規模宅地は、長岡宮に近接する地域周辺に所在している場合がほとんどであるが、こうした長岡京の南辺にいかなる理由で設置されたのかを含めて、今後京南部一帯の実態を究明していく必要がある。

## 2 飛鳥時代の集落

飛鳥時代と考えられる遺構は、竪穴建物 8 棟と掘立柱建物 3 棟を確認することができた。竪穴建物の特徴は、平面形態がほとんど長方形を呈していること、カマドは辺の中央ではなくて片寄った位置に設置されていること、そして支柱穴を確認することができなかつたことなどを指摘することができる。こうした特徴は、前段階である古墳時代後期の竪穴建物が方形の平面形態で、4 基の支柱穴を有する様相とは大きく相違していることを知ることができる。また、SH12 と SH13、SH15 と SH16 のように竪穴建物どうしが重複している事例があるが、重複関係からみて、古い建物群（SH13・16）のカマドが北西辺に設けられているのに対して、新しい一群（SH12・14・15・29・37・38）は北東辺に設置されていることが明らかになった。掘立柱建物は 2 間 × 3 間程度の南北棟建物で、建物方位は竪穴建物と大きな差は認められなかつた。そして、竪穴建物と掘立柱建物とに重複関係がないことを重視すれば、両者は並存していた可能性が濃厚ではないかと考えられる。

当地周辺における飛鳥時代の遺構分布を概観すると、北北西に位置する第 70 次調査で竪穴建物が 7 棟、第 910 次調査で竪穴建物が 1 棟確認されている他、本調査以降の調査においても第 1180 次調査で竪穴建物 2 棟と掘立柱建物 7 棟、第 1198 次調査<sup>(25)</sup>で竪穴建物 8 棟と掘立柱建物 2 棟、そして第 1208 次調査<sup>(26)</sup>で竪穴建物が 2 棟それぞれ確認されている（第 70 図）。第 70 次調査では、重複する建物があり、新しい建物の規模が大きいという特徴がある。建物の方位は、おおむね北で西に振れていて、その角度は 10° 前後から 50° 前後までの間で振れの範囲が大きい、25° から 35° 前後のものが多い傾向にある。平面形態は、長方形ないし台形を呈しており、周壁溝はあるが支柱穴はなく、カマドの位置は北西辺と北東辺に設けられた二者を認めることができた。建物の規模は、一辺 6 m を超過するような事例も少数もあるが、4～5 m 前後のものなど古墳時代後期の建物に比べて規模の劣るものが大半を占めている。遺物の出土した建物は乏しいが、須恵器の杯 G や杯 G 蓋の他、鉄製品が出土していることは注目できる。第 910 次調査の竪穴建物は、遺存状況は不良であったが、北西辺にカマドをもち、方位は北で西に 50° 程度振れている。床面からは、須恵器の杯 G 蓋や礎など 7 世紀前半代の遺物が出土している。





付表-1 伊賀寺遺跡の飛鳥時代竪穴建物一覧表

調査 次数	遺構 番号	規 模 (m)		カマドの位置	主柱穴	周壁 溝	遺 物	備 考	文 献
R1073	SH12	東西 4.3	南北 3.5	北東辺南寄り	未検出	無し	須恵器 (杯蓋)、 刀子		本 書
	SH13	東西 4.25	南北 4	北西辺北寄り	未検出	有り		SH12 よりも古い	
	SH14	東西 2.75	南北 3.4	北東辺南寄り	未検出	無し	須恵器 (杯 G・杯 G 蓋)、土師器 (杯 C・甕)、鉄釘		
	SH15	東西 3.5	南北 4.8	北東辺南寄り	未検出	有り	土師器 (杯 C)		
	SH16	東西 3.45	南北 4.4	北西辺	未検出	有り	須恵器 (杯)	SH15 よりも古い	
	SH29	東西 3.1	南北 4.6	北東辺南寄り	未検出	有り			
	SH37	東西 3.25	南北 3.4	北東辺南寄り	未検出	無し	須恵器 (杯・杯 B 蓋・平瓶)、土師 器 (甕)		
	SH38	東西 3.8	南北 4.8	北東辺南寄り	未検出	有り	須恵器 (杯・杯 B 蓋・壺)、土師器 (杯 G・椀・甕)、 鉄製紡錘車、鉄釘	SH37 よりも新し い	
SH40	不明	不明	不明	不明	有り				
R70	SB7009	東西	南北 6	北東?		有り			長岡京市報告書 第 9 冊
	SB7010	東西 4.8	南北 3.8	北東辺		有り			
	SB7011	東西	南北 3.9	不明	未検出	有り	須恵器 (杯 G・甕)		
	SB7012	東西	南北	不明	未検出	有り			
	SB7013	東西 4	南北 5.5	北東辺南寄り	未検出	有り	須恵器 (杯 G・杯 G 蓋・高杯・甕)、 土師器 (甕)、刀子、 鎌		
	SB7014	東西 4	南北 3.4	北西辺	未検出	有り			
SB7023	東西	南北	北西辺		有り				
R910	SH175	南西 4	南北 4	北西辺	未検出	無し	須恵器 (杯 G 蓋・ 甕)		京都府報告集 第 133 冊
R1180	SH179	東西 5.2	南北 5.8	北西辺	4	有り	土師器 (杯 C)		長岡京市センター年報 平成 30 年度
	SH190	東西 4.9	南北 6.2	北西辺		有り		カマド内に石を立 て支脚とする	
R1198	SH33	東西 4.5	南北 4.3	北辺		有り	土師器 (甕)、須 恵器 (杯 H・杯 A・ 杯 B)、鋤先	カマドの東隣に鋤 先を縦にして据え 置く	長岡京市センター年報 令和元年度
	SH36	東西 5 ~ 5.3	南北 5.7 ~ 6	東辺中央		有り	土師器 (甕)、須 恵器 (杯 H・杯 H 蓋・杯 G・杯 G 蓋)		
	SH38	東西 5.7	南北 4.3	北辺		有り	土師器 (甕)、須 恵器 (杯 H・杯 H 蓋・杯 G・杯 G 蓋・ 杯 B 蓋・壺)		
	SH39	東西 5	南北 3.6	北辺		無し	土師器 (甕)、須 恵器 (杯 H・杯 G 蓋・甕)	カマドの東隣に土 師器甕を 2 個据え 置く	
R1208	SH01	東西 3	南北 3 以上	北東辺		無し	土師器 (皿・甕)、 須恵器 (高杯)		
	SH04	東西 4	南北 2.5	南西辺		無し	土師器 (甕・甕)、 須恵器 (杯 B)		

立柱へ移行するのかを積極的に示す明確な情報は得られていないが、いずれにしても竪穴建物が7世紀の後半頃まで存続していることは確かなようである。また、建物の大半は、地形の傾斜に沿うように建てられていて、この段階では真北を指向するものはほとんど認められないことを指摘しておきたい。

以上みてきたように、今回の調査により飛鳥時代の集落に関わる遺構・遺物がまとまって確認できた意義は大きい。とはいえ、集落の範囲や構造を復元するにはまだ資料不足であり、さらなる情報の蓄積が不可欠であろう。また、当集落は律令制下においては弟国（和銅6年以降は乙訓）郡の鞆岡郷と長井郷との境界付近に位置するものと考えられているが、東側に近接して7世紀末頃に創建されたと考えられる鞆岡廃寺が所在しており、出土瓦の中に「田辺史牟也毛」という人物名をへら書きした平瓦が出土していることは注意すべきであろう。田辺氏は、河内国安宿郡（現在の大阪府柏原市付近）を本拠とする渡来系の氏族であり、本拠地のみならず摂津国住吉郡や山背国宇治郡山科などに居住していたことが知られており、山背国乙訓郡にも田辺氏と関わりがあると考えられる「田辺郷」の存在が本市の更ノ町遺跡出土の木簡から推察されている<sup>(27)</sup>。もちろん、田辺氏を鞆岡廃寺と直接関連付ける情報があるわけではないので、両者を安易に結びつけることをすべきではないが、伊賀寺遺跡の飛鳥時代集落を評価するに際して、鞆岡廃寺の造営主体の居住域として検討する必要があることは確実であって、その候補者の一つとして一応田辺氏を念頭に置いておくことも忘れてはならないであろう。

### 3 縄文時代中期の集落

今回の調査では、縄文時代の中期末に相当する北白川C式期の竪穴建物を3棟確認することができた。竪穴建物は、遺存状態が必ずしも良好ではなかったために不確定な要素を含んでいるが、平面形態が5m前後の隅円方形ないし楕円形を呈すること、建物中央に設けられた炉には石囲炉と地床炉の二者あること、炉を挟んだ南北に2基確認できた支柱穴の間隔は2.05m～2.5mであって、それを結んだ方位は3棟ともおおむね北で西に8～15°程度振れていることなどといった特徴を認めることができた。また、SH39からは、縄文土器や石器類などと共に、自然の礫が大量に出土していることは、建物の廃絶時に際して、意図的に廃棄されたものと理解するのが妥当であろう。こうした大量の礫が出土する事例を探索してみると、伊賀寺遺跡では第927次調査検出のSH65やSH75において認められる他、北白川追分町遺跡<sup>(28)</sup>や日野谷寺町遺跡<sup>(29)</sup>など他地域の集落においても確認されていることは興味深いことである（付表2）。つまり、そうした行為が各地域の集落において、普遍的に行われていたことを示唆しているものと推察することができるのである。そして、今回検出した3基の竪穴建物は、重複することなく、それぞれ20m前後離れて分布していることを考慮するならば、3基は同時期に併存していた可能性が濃厚ではないかと考えることができよう。

ところで、伊賀寺遺跡では、本調査以前の調査で9棟、以降の調査においても7棟以上の北白川C式期に属する竪穴建物が低位段丘Ⅱ上を中心に確認されており、今回の低位段丘Ⅰ上に立





付表-2 京都盆地縄文中期末の竪穴建物一覧表

## 伊賀寺遺跡(京都府長岡京市)

No	調査次数	遺構名	形態	規模(m)	炉	主柱穴	出土物	立地(標高m)	備考	文献
1	右京第 910 次	SH190	不明	不明	不明	不明	縄文土器、石錐、叩ぎ石	低位段丘 I (29.5)	レンズ状に窪む	京都府遺跡調査報告集 第 133 冊 (2009)
2	右京第 927 次	SH08	方形	東辺 5、西辺 3.9、南辺 4.2、北辺 4.5	石囲炉	4	縄文土器	低位段丘 II (28)		京都府遺跡調査報告集 第 136 冊 (2010)
3	々	SH57	方形	南西辺 4.5	焼土	不明	縄文土器、石錘	低位段丘 II (27.6)		京都府遺跡調査報告集 第 136 冊 (2010)
4	々	SH65	方形	南西辺 4	焼土	不明	縄文土器、石鏃、石槍、敲石	低位段丘 II (27.5)	埋土に焼土や焼けた礫を含む	京都府遺跡調査報告集 第 136 冊 (2010)
5	々	SH75	方形	北東辺 3.6 北西辺 3.1 南西辺 3.7 南東辺 3.2	不明	4	縄文土器	低位段丘 II (28)	埋土に礫を多量に含む	京都府遺跡調査報告集 第 136 冊 (2010)
6	右京第 941 次	SH520	方形	北西辺 5.1 南西辺 1.8 以上	不明	1	縄文土器、削器、剥片	低位段丘 II (26.8)		京都府遺跡調査報告集 第 137 冊 (2010)
7	右京第 943 次	SH20	不明	不明	石囲炉	6	縄文土器	低位段丘 II (26.6)	壁面は完全に削平を受ける	京都府遺跡調査報告集 第 133 冊 (2009)
8	右京第 988 次	SH85	隅円方形	東西 4.5 南北 5.4	焼土	不明	縄文土器、石鏃、石斧、削器	低位段丘 II (27.4)		京都府遺跡調査報告集 第 148 冊 (2012)
9	々	SH89	隅円方形	東西 6.5 南北 5	地床炉	不明	縄文土器、石鏃、石斧、磨石、敲石	低位段丘 II (27.4)		京都府遺跡調査報告集 第 148 冊 (2012)
10	右京第 1073 次	SH17	楕円形	東西 5 南北 4.9	石囲炉	2	縄文土器、耳栓、石鏃、磨石、凹石	低位段丘 I (29)	レンズ状に窪む、埋土に礫を含む	本書
11	々	SH32	不明	不明	地床炉	2	縄文土器、磨石	低位段丘 I (29)	壁面は完全に削平を受ける	本書
12	々	SH39	隅円方形	東西 4.5 南北 5.1	石囲炉?	2	縄文土器、石鏃、尖頭器、切目石錘、石斧、磨石、凹石、剥片	低位段丘 I (29)	埋土に多量の礫(焼けた礫も)を含む	本書
13	右京第 1078 次	SX01	隅円方形	東西 4 以上 南北 3 以上			縄文土器、耳栓	低位段丘 II (28)		長岡京市報告書 第 66 冊 (2014) 長岡京市報告書 第 79 冊 (2022)
14	右京第 1180 次	SH136	楕円形	東西 5.2 南北 5.6	石囲炉		縄文土器、石鏃、磨石、凹石、石棒、石皿、剥片	低位段丘 II (28)	埋土に大量の礫を含む	長岡京市センター年報 平成 30 年度 (2020)
15	々	SH145	楕円形	東西、南北			縄文土器	低位段丘 II (28)		長岡京市センター年報 平成 30 年度 (2020)
16	々	SH146	楕円形	東西 5.6 南北 4.6 以上			縄文土器、石鏃、石皿、剥片	低位段丘 II (28)		長岡京市センター年報 平成 30 年度 (2020)
17	々	SH161	楕円形	東西 5.6 南北 6.4	石囲炉		縄文土器、石鏃、磨石、剥片	低位段丘 II (28)		長岡京市センター年報 平成 30 年度 (2020)
18	々	SH178	楕円形	東西 6.2 南北 5.7	地床炉	2	縄文土器、石鏃、磨石、石皿、剥片	低位段丘 II (28)		長岡京市センター年報 平成 30 年度 (2020)
19	々	SH185	楕円形	東西 6.4 南北 6.4	地床炉	2	縄文土器、石鏃、磨石、石皿、削器、剥片	低位段丘 II (28)	埋土に大量の礫を含む	長岡京市センター年報 平成 30 年度 (2020)



## 北白川追分町遺跡（京都府京都市左京区）

No	調査回数	遺構名	形態	規模 (m)	炉	主柱 穴	出土 遺物	立地 (標高m)	備考	文献
1	北部構内 BF33 区	SB1	不明	不明	地床炉	不明	縄文土器	扇状地先端 (63)	礫が多数埋没	京都大学構内遺跡 調査研究年報 昭和 57 年度 (1984)
2	北部構内 BF33 区	SB2	隅円方形	一辺 5	石囲炉	不明	縄文土器	扇状地先端 (63)	礫が多数埋没、周壁 溝を巡らせる	京都大学構内遺跡 調査研究年報 昭和 57 年度 (1984)
3	北部構内 BF33 区	SK2	不明	不明	不明	不明	縄文土器	扇状地先端 (63)	礫が多数埋没、建物 の可能性	京都大学構内遺跡 調査研究年報 昭和 57 年度 (1984)

## 北白川上終町遺跡（京都府京都市左京区）

No	調査回数	遺構名	形態	規模 (m)	炉	主柱 穴	出土 遺物	立地 (標高m)	備考	文献
1			不明	不明	石囲炉	不明	縄文土器	扇状地先端 (77)		京都府史蹟名勝天 然記念物調査報告 第 16 冊 (1935)

## 日野谷寺町遺跡（京都府京都市伏見区）

No	調査回数	遺構名	形態	規模 (m)	炉	主柱 穴	出土 遺物	立地 (標高m)	備考	文献
1		SK379	不定形	約 4	石囲炉	不明	縄文土器	扇状地 (49)	B 区、不定形な落ち 込みの埋土中に大量 の礫が混入	昭和 59 年度 京都市埋蔵文化財 調査概要 (1987)
2		SK421	不定形	約 4	石囲炉	不明	縄文土器	扇状地 (49)	B 区、不定形な落ち 込みの埋土中に大量 の礫が混入	昭和 59 年度 京都市埋蔵文化財 調査概要 (1987)

## 薪遺跡（京都府京田辺市）

No	調査回数	遺構名	形態	規模 (m)	炉	主柱 穴	出土 遺物	立地 (標高m)	備考	文献
1	第 6 次	SH31	円形	不明	不明	不明	縄文土器	扇状地 (32)	4 トレンチ、一部に 周壁溝	京都府遺跡調査 概報 第 117 冊 (2006)
2	第 6 次	SH68	隅円方形	一辺 5	地床炉	4	縄文土器、 石皿	扇状地 (32)	4 トレンチ、周壁溝 を巡らせる	京都府遺跡調査 概報 第 117 冊 (2006)

り、出土した縄文土器と石器の種類や数量もかなりのものであることから、中期末の伊賀寺集落は京都府下はもとより、近畿地方においても注目に値する規模の大きな集落であると評価することができよう。

この伊賀寺遺跡が所在する小泉川の左岸流域には、上流から順に下海印寺遺跡や友岡遺跡、南栗ヶ塚遺跡、裕遺跡、下植野南遺跡などといったいくつもの縄文集落が展開しているが、広く桂川右岸流域に分布する乙訓地域の中では有数の密集地域であることを指摘することができ、この流域が縄文時代の前期から後期を経て、晩期に至るまで、断続的とはいえ集落形成に適した環境を備えていたことを示唆している。こうした多くの集落が形成された背景には、もちろん縄文人の生活に不可欠な山河の幸が潤沢であったであろうことは間違いがないが、それ以外にも人や物の流通が至便であったという地理的な環境であったことも考えておく必要がある。

- 注1) 高橋 美久二他「長岡京跡右京 70 次調査概要」『長岡京市報告書』第 9 冊 1982 年
- 2) 木村泰彦「右京第 118 次調査概報」『長岡京市センター年報』昭和 57 年度 1983 年
- 3) 小田桐 淳「右京第 136 次調査概報」『長岡京市センター年報』昭和 58 年度 1984 年
- 4) 小田桐 淳「右京第 387 次調査概報」『長岡京市センター年報』平成 3 年度 1993 年
- 5) 増田孝彦他「右京第 941 次・友岡遺跡・伊賀寺遺跡調査報告」『京都府センター報告集』第 137 冊 2010 年
- 6) 増田孝彦他「右京第 910 次・941 次・友岡遺跡・伊賀寺遺跡」『京都府センター報告集』第 133 冊 2009 年
- 7) 中川和哉「京都第二外環状道路関係遺跡平成 19 年度調査報告」『京都府センター報告集』第 136 冊 2010 年
- 8) 岩松保他「大山崎大枝線道路改良事業関係遺跡」『京都府センター報告集』第 133 冊 2009 年
- 9) 中川和哉他「京都第二外環状道路関係遺跡平成 21 年度発掘調査報告」『京都府センター報告集』第 148 冊 2012 年
- 10) 小田桐 淳「長岡京跡右京第 975 次調査概要」『長岡京市報告書』第 55 冊 2010 年
- 11) 岡崎研一他「京都第二外環状道路関係遺跡平成 20 年度発掘調査報告」『京都府センター報告集』第 137 冊 2010 年
- 12) 中島皆夫「右京第 708 次調査概報」『長岡京市センター年報』平成 13 年度 2003 年
- 13) 小田桐 淳「長岡京跡右京第 1033 次調査概要」『長岡京市報告書』第 61 冊 2012 年
- 14) この土器器杯 A は、形態的な特徴や外面をヘラケズリ調整しないこと、出土した建物が正方位ではなく北で西に振れていることなどから、調査の時点では長岡京期よりも古い奈良時代の所産と理解していた。ところが、平成 30 年～令和元年にかけて実施した右京第 1180 次調査において、長岡京の造営時に操業した谷田瓦窯産の軒平瓦 (6828Q 型式) と共に出土したことから、長岡京期に使用されていたものであることが判明した。
- 15) 小田桐 淳「右京第 162 次調査略報」『長岡京市センター年報』昭和 59 年 1985 年  
小田桐 淳「1. 右京第 162 次調査」『長岡京市資料選』(三) 2013 年
- 16) 岩崎 誠「右京第 1166 次調査概報」『長岡京市センター年報』平成 29 年度 2019 年
- 17) 泉 拓良「中期末縄文土器の分析」『京都大学埋蔵文化財調査報告』Ⅲ 1985 年
- 18) 縄文土器の鑑定や評価にあたっては、当センターの専門委員である千葉 豊氏 (京都大学準教授) のご教示による。
- 19) 岩崎 誠「右京第 1078 次調査概要」『長岡京市報告書』第 66 冊 2014 年  
山下 研編著『長岡京市報告書』第 79 冊 2022 年
- 20) 石器の石材種の同定にあたっては、高田雅介氏 (高田クリスタルミュージアム) のご教示による。
- 21) 中島皆夫「右京第 708 次調査概報」『長岡京市センター年報』平成 13 年度 2003 年
- 22) 原 秀樹「長岡京跡右京第 1044 次調査概要」『長岡京市報告書』第 64 冊 2013 年
- 23) 岩崎 誠「右京第 1180 次調査略報」『長岡京市センター年報』平成 30 年度 2020 年  
岩崎 誠「長岡京跡右京の邸宅検出例について」『条里制・古代都市研究』第 36 号 2020 年

- 24) 小田桐 淳「右京第 244 次調査略報」『長岡京市センター年報』昭和 61 年度 1988 年  
小田桐 淳「2. 右京第 244 次調査」『長岡京市資料選』(三) 2013 年
- 25) 岩崎 誠・山本輝雄「6. 右京第 1198 次調査概報」『長岡京市センター年報』令和元年度 2021 年
- 26) 岩崎 誠・山本輝雄「11. 右京第 1208 次調査概報」『長岡京市センター年報』令和元年度 2021 年
- 27) 高橋 美久二「古代寺院の建立」『長岡京市史』本文編一 1996 年
- 28) 清水芳裕「京都大学北部構内 BF33 区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和 57 年度 1984 年
- 29) 菅田 薫他「日野谷寺町遺跡」『昭和 59 年度 京都市調査概要』1987 年
- 30) 梅原末治『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』第 16 冊 1935 年
- 31) 柴 暁彦「薪遺跡第 6 次発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第 117 冊 2006 年

付表-3 出土遺物観察表-飛鳥時代以降

種類	器形	番号	法 量 (cm)			色 調	調 整	出土 遺構	備 考
			口径(長)	器高(幅)	底径(厚)				
染付	碗	1	11	(2.9)	-	灰白色	内外面：回転ナデ	SE03	
青磁	碗	2	-	(1.6)	9	素地：にぶ い赤褐色 釉：オリー ブ灰色	内面：回転ナデ 外面：回転ケズリ	SE03	見込みにトチン の痕跡、蛇ノ目 高台
染付	碗	3	11.2	(4.7)	-	白色	内外面：回転ナデ	SD04	
陶器	壺	4	-	(10)	-	素地：灰色 釉：暗赤褐 色	内面：回転ナデ 外面：カキメ	P102	
土 師 器	皿	5	8	1	-	にぶい 橙色	内面：ヨコナデ 外面：口縁部はヨコナデ・底部は未調整	SD18	
		6	8	1.3	-	にぶい 橙色	内面：ヨコナデ 外面：口縁部はヨコナデ・底部は未調整	SD18	
		7	8	1.3	-	橙色	内面：ヨコナデ 外面：口縁部はヨコナデ・底部は未調整	SD18	
		8	-	(1.3)	-	黄橙色	内面：ヨコナデ 外面：口縁部はヨコナデ・底部は未調整	SD18	
		9	12.9	2.4	-	黄橙色	内面：ヨコナデ 外面：口縁部はヨコナデ・底部は未調整	SD18	
須 恵 器	杯 B	10	-	(1.15)	8.2	灰色	内外面：回転ナデ	SD18	
	鉢	11	-	(2.7)	-	灰色	内外面：回転ナデ	SD18	片口有り、東播 系の鉢
	碗	12	-	(1.8)	7.6	灰色	内面：ミガキ 外面：体部はミガキ・底部はケズリ	SD18	緑釉陶器形態、 蛇ノ目高台
瓦 器	碗	13	-	(1.5)	5	灰白色	内外面：摩滅のため調整手法は不明	SD18	
土 師 器	杯 A	14	14	3.2	-	橙色	内面：ヨコナデ 外面：ケズリ (c 手法)	SK24	
		15	-	(3.1)	-	橙色	内面：ヨコナデ 外面：ケズリ (c 手法)	SK24	
	杯 B	16	-	(1.95)	12.6	橙色	内面：ヨコナデ後放射状ミガキ 外面：ケズリ後ミガキ	SK24	放射状の暗文
	碗 A	17	11	3.3	-	橙色	内面：ヨコナデ 外面：ケズリ (c 手法)	SK24	
	皿 A	18	14	(1.9)	-	橙色	内外面：ヨコナデ	SK24	
		19	17	2.4	-	にぶい 橙色	内面：ヨコナデ 外面：摩滅のため調整手法は不明	SK24	
20		20	2.1	-	橙色	内面：ヨコナデ 外面：口縁部はヨコナデ・底部はケズリ (b 手法)	SK24		

種類	器形	番号	法 量 (cm)			色 調	調 整	出土 遺構	備 考	
			口径(長)	器高(幅)	底径(厚)					
土 師 器	皿 A	21	20.2	(2.5)	-	橙色	全体に摩滅のため、調整手法は不明	SK24		
	壺 C	22	12	(2.1)	-	橙色	内面：ヨコナデ 外面：口縁部はヨコナデ、体部は未調整	SK24		
	壺 E	23	-	(2.8)	5	橙色	内外面：ヨコナデ	SK24		
	甕 A	24	14	(7.5)	-	にぶい橙色	内面：口縁部から体部上半はヨコナデ・ 体部下半はナデ 外面：口縁部はヨコナデ・体部はタテハ ケ	SK24	内面に煤が付着	
		25	19	(4.1)	-	にぶい橙色	内面：口縁部はヨコハケ後ヨコナデ 外面：ナデ	SK24		
		26	26.9	(14.5)	-	黄橙色	内面：ヨコハケ 外面：口縁部はタテハケ後ヨコナデ・体 部はタテハケおよびナナメハケ	SK24	体部外面に煤が 付着	
須 恵 器	杯 B	27	11.4	4.5	8.2	灰白色	内面：回転ナデ 外面：口縁部は回転ナデ・底部はヘラ切 り後ナデ	SK24		
		28	-	(1.4)	10	灰色	内外面：回転ナデ	SK24		
		29	-	(1.3)	11	灰色	内面：回転ナデ 外面：口縁部は回転ナデ・底部はヘラ切 り後ナデ	SK24		
		30	-	(2.4)	11.8	灰色	内面：回転ナデ 外面：口縁部は回転ナデ・底部はヘラ切 り後ナデ	SK24		
	壺	31	-	(2.6)	11	灰色	内面：回転ナデ 外面：口縁部は回転ナデ・底部はヘラ切 り後ナデ	SK24		
	杯 A	32	17.2	(1)	-	灰色	内外面：回転ナデ	SK24		
	杯 B 蓋	33	18.7	(1.5)	-	灰色	内面：回転ナデ 外面：口縁部は回転ナデ・天井部ヘラ切 り後ナデ	SK24		
		34	17.2	3.1	-	灰白色	全体に摩滅のため、調整手法は不明	SK24		
	壺	35	-	(8)	17.3	黄灰色	内面：回転ナデ 外面：回転ナデとケズリ	SK24	外面に自然釉が 付着	
	甕	36	20.4	(14.7)	-	灰白色	口縁部内外面：回転ナデ 体部外面：平行タタキ 体部内面：同心円当て具痕をナデ消す	SK24	外面全体に自然 釉が付着	
	瓦	軒 平 瓦	37	(10)	(8.1)	4.2	灰色	凸面：ケズリ 凹面：摩滅のため調整手法は不明	P95	4重弧文軒平瓦、 瓦質に焼成
		丸 瓦	38	(17.1)	16	1.6	浅黄橙色	凸面・凹面：摩滅のため調整手法は不明 布目圧痕、側面：ケズリ	SK24	軟質に焼成



種類	器形	番号	法 量 (cm)			色 調	調 整	出土 遺構	備 考
			口径(長)	器高(幅)	底径(厚)				
瓦	平瓦	39	(15.7)	(13.1)	1.6	灰色	凸面：縄タタキ 凹面：摩滅のため調整手法は不明 側面：ケズリ	SK24	瓦質に焼成
		40	(23.2)	(13.2)	2.3	灰黄色	凸面：縄タタキ後ケズリ 凹面：布目圧痕、側面：ケズリ	SK24	軟質に焼成
土師器	杯A	47	13.8	3.8	-	橙色	内面：ヨコナデ 外面：口縁部はヨコナデ・底部は未調整 (a 手法)	SB50 P137	
	杯B	48	-	(1.25)	11	にぶい黄橙 色	内外面：ヨコナデ	P12	
		49	-	(1.6)	12.8	橙色	内外面：ヨコナデ	P92	
	甕	50	29.6	(3)	-	橙色	内面：ヨコハケ、外面：ヨコナデ	P118	
		51	-	(4.1)	-	にぶい橙色	内面：口頸部はヨコナデ・体部はヨコハ ケ、外面：タテハケ	P37	外面に煤が付着
須恵器	杯A	52	13	(3.7)	-	灰白色	内外面：回転ナデ	SB50 P140	口縁端部の外面 に重ね焼きの痕 跡、火襷有り
		53	-	(2)	8	灰色	内面：回転ナデ 外面：体部は回転ナデ・底部はへら切り 後ナデ	SB11 P3	
	壺M	54	-	(4)	4.8	灰白色	内外面：回転ナデ	SB50 P54	
	杯B	55	-	(2.1)	10	灰色	内面：回転ナデ 外面：体部は回転ナデ・底部はへら切り 後ナデ	P91	
	杯B蓋	56	15.6	(2)	-	灰白色	内外面：回転ナデ	SB50 P141	
		57	15.6	2.15	-	灰色	内面：回転ナデ 外面：口縁部は回転ナデ・天井部は回転 ケズリ	P40	口縁端部に重ね 焼きの痕跡
		58	16.8	(1.4)	-	灰色	内外面：回転ナデ	P8	口縁端部に重ね 焼きの痕跡
	製塩土器		59	11.5	(6.5)	-	橙色	内外面：ナデ	P64
		60	10.4	(7.2)	-	にぶい黄色	内外面：ナデ	SB50 P55	
		61	13	(5)	-	橙色	内外面：ナデ	P84	
須恵器	杯G蓋	62	9.4	(1.6)	-	灰色	内面：回転ナデ 外面：口縁部は回転ナデ・天井部は回転 ケズリ	SH14 カマド 上	口縁端部内面に 自然釉が付着
	杯G	63	10.2	3.7	-	灰白色	内面：回転ナデ 外面：口縁部は回転ナデ・底部はへら切 り後ナデ	SH14	軟質に焼成され る

種類	器形	番号	法 量 (cm)			色 調	調 整	出土 遺構	備 考
			口径(長)	器高(幅)	底径(厚)				
須恵器	杯 G	64	9.8	3.4	-	灰色	内面：回転ナデ 外面：口縁部は回転ナデ・底部はへら切り後ナデ	SH14	
	杯 C	65	12.4	3.8	-	にぶい黄橙色	全体に摩滅のため、調整手法は不明	SH14	
土師器	甕	66	-	(5.4)	-	浅黄橙色	内面：ヨコハケ後ナデ 外面：摩滅のため調整手法は不明	SH14	
	甕	67	14.2	(3.7)	-	橙色	全体に摩滅のため、調整手法は不明	SH14	
須恵器	杯 B蓋	71	18	(1)	-	灰色	内外面：回転ナデ	SH37	
	杯 A or 杯 B	72	22	(3.3)	-	灰色	内外面：回転ナデ	SH37	
	杯 B	73	9.6	(2.3)	-	灰色	内外面：回転ナデ	SH37	
	平瓶	74	-	(4)	-	灰色	内外面：回転ナデ	SH37	外面に自然釉が付着
土師器	甕	75	-	(5.9)	-	にぶい黄橙色	全体に摩滅のため、調整手法は不明	SH37	
須恵器	杯 B蓋	76	17.6	(1.3)	-	灰色	内外面：回転ナデ	SH38	
	杯 A or 杯 B	77	18	(3.8)	-	灰色	内外面：回転ナデ	SH38	
	杯 B	78	19.8	(3.2)	-	灰色	内外面：回転ナデ	SH38	
	杯 A	79	11	(2.6)	-	灰色	内面：回転ナデ 外面：口縁部は回転ナデ・底部はへら切り後ナデ	SH38	
	壺	80	-	(4.6)	-	灰色	内面：回転ナデ、外面：回転ケズリ	SH38	
土師器	杯 G	81	12	(2.5)	-	浅黄橙色	内面：ヨコナデ 外面：剥離のため調整手法は不明	SH38	
	杯 C	85	15	(5.3)	-	橙色	全体に摩滅のため、調整手法は不明	SH15 カマド 内	外面に黒斑が認められる
須恵器	杯	86	-	(2.6)	-	灰色	内外面：回転ナデ	SH16	
	杯 H蓋	87	11.2	3.3	-	灰色	内面：回転ナデ 外面：口縁部は回転ナデ・天井部は回転へらケズリ	SH12	

付表-4 出土遺物観察表-縄文時代中期

器形	部位	番号	型式	外面調整と施文	内面調整	焼成	色調	胎土	出土遺構	備考
深鉢A類	口縁部	89	北白川C式	沈線文・刺突文	ナデ	良好	にぶい黄橙色	長石、チャート、赤色粒子	SH39	
	口縁部	90	北白川C式	沈線文・刺突文	ナデ	良好	浅黄橙色	長石、チャート、赤色粒子	SH39	
	口縁部	91	北白川C式	刺突文	ナデ	良好	橙色	長石、チャート、赤色粒子	SH39	92と同一個体
	口縁部	92	北白川C式	刺突文	ナデ	良好	橙色	長石、チャート、赤色粒子	SH39	91と同一個体
	口縁部	93	北白川C式	沈線文・縄文	ナデ	良好	にぶい褐色	長石、チャート、赤色粒子	SH39	
	口縁部	94	北白川C式	縄文	ナデ	良好	浅黄橙色	長石、チャート、赤色粒子	SH39	112と同一の可能性
	口縁部	95	北白川C式	沈線文・縄文	ナデ	良好	にぶい橙色	長石、チャート、赤色粒子	SH39	
	口縁部	96	北白川C式	刺突文	ナデ	良好	にぶい黄橙色	長石、チャート	SH39	
	口縁部	97	北白川C式	沈線文・縄文	ナデ	良好	にぶい黄褐色	長石、チャート、赤色粒子	SH39	100と同一個体
	口縁部	98	北白川C式	沈線文・刺突文	ナデ	良好	にぶい黄褐色	長石、赤色粒子、雲母	SH39	
	口縁部	99	北白川C式	刺突文・縄文	ナデ	良好	にぶい黄褐色	長石、雲母	SH39	
	胴部	100	北白川C式	沈線文・縄文	ナデ	良好	にぶい黄橙色	長石、チャート、赤色粒子	SH39	97と同一個体
	口縁部	101	北白川C式	沈線文・縄文	ナデ	良好	浅黄色	長石、チャート、赤色粒子	SH39	
	口縁部	102	北白川C式	沈線文・縄文	ナデ	良好	にぶい褐色	長石、赤色粒子	SH39	
	胴部	103	北白川C式	沈線文・刺突文	ナデ	良好	灰黄色	長石、チャート、赤色粒子	SH39	104と同一の可能性
	胴部	104	北白川C式	沈線文	ナデ	良好	にぶい黄橙色	長石、チャート、角閃石	SH39	103と同一の可能性
口縁部	105	北白川C式	沈線文	ナデ	良好	灰白色	長石、チャート、赤色粒子、雲母	SH39		
口縁部	106	北白川C式	縄文・沈線文	ナデ	良好	灰白色	長石、チャート	SH39		
深鉢B類	口縁部	107	北白川C式	縄文	ナデ	良好	にぶい橙色	長石、チャート、赤色粒子	SH39	
深鉢A類	口縁部	108	北白川C式	縄文	ナデ	良好	浅黄橙色	長石、赤色粒子、雲母	SH39	
深鉢B類	胴部	109	北白川C式	縄文・沈線文	ナデ	良好	にぶい橙色	長石、チャート	SH39	
深鉢A類	胴部	110	北白川C式	縄文・沈線文	ナデ	良好	にぶい橙色	長石、チャート、赤色粒子	SH39	
	胴部	111	北白川C式	縄文	ナデ	良好	にぶい黄橙色	長石、チャート、赤色粒子、雲母	SH39	
	胴部	112	北白川C式	縄文	ナデ	良好	浅黄橙色	長石、チャート、赤色粒子	SH39	94と同一の可能性
深鉢	胴部	113	北白川C式		ナデ	良好	にぶい橙色	長石、赤色粒子、雲母	SH39	
	胴部	114	北白川C式	沈線文	ナデ	良好	にぶい黄橙色	長石、チャート、赤色粒子	SH39	
	胴部	115	北白川C式	縄文・沈線文	ナデ	良好	灰黄褐色	長石、チャート、雲母	SH39	
	胴部	116	北白川C式	縄文・沈線文	ナデ	良好	にぶい赤褐色	長石、チャート、赤色粒子	SH39	
深鉢B類	胴部	117	北白川C式	沈線文	ナデ	良好	にぶい赤褐色	長石、赤色粒子、雲母	SH39	

器形	部位	番号	型式	外面調整と施文	内面調整	焼成	色調	胎土	出土遺構	備考
深鉢	胴部	118	北白川C式	縄文・沈線文	ナデ	良好	にぶい黄橙色	長石、チャート	SH39	
深鉢D類	胴部	119	北白川C式	縄文	ナデ	良好	にぶい褐色	長石、チャート、赤色粒子	SH39	
深鉢	胴部	120	北白川C式	縄文・沈線文	ナデ	良好	にぶい黄褐色	長石、チャート、赤色粒子、雲母	SH39	
深鉢D類	胴部	121	北白川C式	縄文	ナデ	良好	にぶい黄褐色	長石、チャート、赤色粒子、雲母	SH39	
	胴部	122	北白川C式	縄文	ナデ	良好	にぶい黄橙色	長石、チャート、赤色粒子	SH39	
	胴部	123	北白川C式	縄文	ナデ	良好	にぶい黄褐色	長石、チャート、雲母	SH39	
深鉢C類	口縁部	124	北白川C式	沈線文	ナデ	良好	灰白色	長石、チャート、雲母	SH39	125・126 と同一個体
	胴部	125	北白川C式	沈線文	ナデ	良好	灰白色	長石、チャート、雲母	SH39	124・126 と同一個体
	底部	126	北白川C式	—	ナデ	良好	灰白色	長石、チャート、雲母	SH39	124・125 と同一個体
	口縁部	127	北白川C式	沈線文	ナデ	良好	にぶい黄褐色	長石、チャート、赤色粒子	SH39	
	口縁部	128	北白川C式	沈線文	ナデ	良好	にぶい橙色	長石、チャート、赤色粒子	SH39	
	口縁部	129	北白川C式	沈線文	ナデ	良好	にぶい黄褐色	長石、チャート、赤色粒子、雲母	SH39	
	口縁部	130	北白川C式	沈線文	ナデ	良好	にぶい黄褐色	長石、チャート、雲母	SH39	
浅鉢	口縁部	131	北白川C式	縄文・沈線文	ナデ	良好	橙色	長石、赤色粒子、雲母	SH39	
深鉢	胴部	132	北白川C式	縄文・沈線文	ナデ	良好	橙色	長石、チャート、赤色粒子	SH39	
	胴部	133	北白川C式	縄文・沈線文	ナデ	良好	にぶい橙色	長石、チャート、赤色粒子、雲母	SH39	
	胴部	134	北白川C式	沈線文	ナデ	良好	にぶい橙色	長石、チャート、赤色粒子、雲母	SH39	
	胴部	135	北白川C式	縄文・沈線文	ナデ	良好	にぶい橙色	長石、赤色粒子、雲母	SH39	
	胴部	136	北白川C式	縄文・沈線文	ナデ	良好	にぶい黄褐色	長石、チャート、赤色粒子	SH39	
	胴部	137	北白川C式	縄文・沈線文	ナデ	良好	褐灰色	長石、チャート、赤色粒子、雲母	SH39	
	胴部	138	北白川C式	縄文・沈線文	ナデ	良好	灰白色	長石、チャート、雲母	SH39	
	胴部	139	北白川C式	縄文・沈線文	ナデ	良好	にぶい黄褐色	長石、チャート、雲母	SH39	
	胴部	140	北白川C式	沈線文	ナデ	良好	にぶい黄褐色	長石、チャート、雲母	SH39	
	胴部	141	北白川C式	縄文・沈線文	ナデ	良好	にぶい褐色	長石、チャート、赤色粒子	SH39	
	胴部	142	北白川C式	沈線文	ナデ	良好	にぶい赤褐色	長石、チャート、赤色粒子、雲母	SH39	
	胴部	143	北白川C式	沈線文	ナデ	良好	にぶい黄褐色	長石、チャート、赤色粒子	SH39	
	胴部	144	北白川C式	沈線文	ナデ	良好	にぶい黄褐色	長石、チャート、赤色粒子	SH39	

器形	部位	番号	型式	外面調整と施文	内面調整	焼成	色調	胎土	出土遺構	備考
深鉢	胴部	145	北白川C式	沈線文	ナデ	良好	にぶい黄橙色	長石、チャート、赤色粒子、雲母	SH39	
	胴部	146	北白川C式	沈線文	ナデ	良好	橙色	長石、チャート、赤色粒子	SH39	
	胴部	147	北白川C式	縄文・沈線文	ナデ	良好	褐灰色	長石、チャート、赤色粒子、雲母	SH39	
	胴部	148	北白川C式	縄文・沈線文	ナデ	良好	にぶい黄橙色	長石、チャート、赤色粒子	SH39	
	胴部	149	北白川C式	縄文・沈線文	ナデ	良好	にぶい橙色	長石、チャート	SH39	
	胴部	150	北白川C式	縄文・沈線文	ナデ	良好	橙色	長石、チャート、雲母	SH39	
深鉢 or 浅鉢	底部	151	北白川C式	—	ナデ	良好	灰白色	長石、赤色粒子、雲母	SH39	
	底部	152	北白川C式	—	ナデ	良好	褐灰色	長石、チャート、赤色粒子	SH39	
	底部	153	北白川C式	—	ナデ	良好	にぶい橙色	長石、チャート、赤色粒子	SH39	
	底部	154	北白川C式	—	ナデ	良好	にぶい黄橙色	長石、チャート、赤色粒子、雲母	SH39	
	底部	155	北白川C式	—	ナデ	良好	浅黄橙色	長石、チャート、赤色粒子	SH39	
	底部	156	北白川C式	縄文	ナデ	良好	にぶい黄橙色	長石、赤色粒子、雲母	SH39	
	底部	157	北白川C式	—	ナデ	良好	にぶい橙色	長石、チャート	SH39	
	底部	158	北白川C式	—	ナデ	良好	にぶい黄橙色	長石、赤色粒子、雲母	SH39	
	底部	159	北白川C式	—	ナデ	良好	にぶい黄橙色	長石、チャート、赤色粒子	SH39	
	底部	160	北白川C式	—	ナデ	良好	浅黄橙色	長石、チャート、赤色粒子、雲母	SH39	
	底部	161	北白川C式	—	ナデ	良好	橙色	長石、チャート、赤色粒子、雲母	SH39	
	底部	162	北白川C式	—	ナデ	良好	浅黄橙色	長石、チャート、赤色粒子	SH39	
	底部	163	北白川C式	縄文	ナデ	良好	にぶい黄橙色	長石、チャート、赤色粒子	SH39	
	底部	164	北白川C式	—	ナデ	良好	灰白色	長石、チャート	SH39	
	底部	165	北白川C式	縄文	ナデ	良好	にぶい黄橙色	長石、チャート、赤色粒子	SH39	
	底部	166	北白川C式	—	ナデ	良好	にぶい黄橙色	長石、チャート、赤色粒子	SH39	
	底部	167	北白川C式	—	ナデ	良好	灰白色	長石、チャート	SH39	
	底部	168	北白川C式	—	ナデ	良好	浅黄橙色	長石、チャート	SH39	
	底部	169	北白川C式	—	ナデ	良好	浅黄橙色	長石、チャート、赤色粒子	SH39	
	底部	170	北白川C式	—	ナデ	良好	浅黄橙色	長石、チャート、赤色粒子、雲母	SH39	
底部	171	北白川C式	—	ナデ	良好	浅黄橙色	長石、赤色粒子、雲母	SH39		
深鉢 A類	口縁部	172	北白川C式	縄文・沈線文	ナデ	良好	にぶい黄橙色	長石、チャート、赤色粒子、雲母、角閃石	SH17	
	口縁部	173	北白川C式	沈線文	ナデ	良好	にぶい黄橙色	長石、チャート、赤色粒子	SH17	



器形	部位	番号	型式	外面調整と施文	内面調整	焼成	色調	胎土	出土遺構	備考
深鉢A類	口縁部	174	北白川C式	縄文	ナデ	良好	にぶい黄橙色	長石、雲母、角閃石	SH17	
深鉢B類	胴部	175	北白川C式	縄文・押圧文	ナデ	良好	橙色	長石、チャート、赤色粒子、雲母	SH17	
深鉢	胴部	176	北白川C式	縄文・沈線文	ナデ	良好	にぶい黄橙色	長石、チャート、赤色粒子	SH17	
	胴部	177	北白川C式	縄文・沈線文	ナデ	良好	にぶい黄橙色	長石、チャート、赤色粒子	SH17	
	胴部	178	北白川C式	縄文	ナデ	良好	にぶい黄橙色	長石、チャート、赤色粒子	SH17	
深鉢or浅鉢	底部	179	北白川C式	—	ナデ	良好	淡黄色	長石、チャート、赤色粒子	SH17	
	底部	180	北白川C式	—	ナデ	良好	にぶい黄橙色	長石、チャート、赤色粒子	SH17	
	底部	181	北白川C式	—	ナデ	良好	にぶい黄橙色	長石、チャート、赤色粒子	SH17	
	底部	182	北白川C式	—	ナデ	良好	にぶい黄橙色	長石、赤色粒子	SH17	
深鉢C類	口縁部	183	北白川C式	沈線文	ナデ	良好	にぶい赤褐色	長石、チャート、赤色粒子、雲母	SH32、P94	184と同一個体
	口縁部	184	北白川C式	沈線文	ナデ	良好	褐灰色	長石、チャート	SH32、P94	183と同一個体
	口縁部	185	北白川C式	縄文・沈線文	ナデ	良好	灰黄褐色	長石、チャート、雲母	SH32	
深鉢B類	胴部	186	北白川C式	押圧文・刺突文	ナデ	良好	にぶい黄橙色	長石、チャート、赤色粒子	SH32、P94	
	胴部	187	北白川C式	縄文	ナデ	良好	にぶい黄橙色	長石、チャート、赤色粒子	SH32、P94	
深鉢D類	胴部	188	北白川C式	縄文	ナデ	良好	にぶい黄褐色	長石、チャート、雲母、角閃石	SH32、P94	
	底部	189	北白川C式	縄文	ナデ	良好	にぶい褐色	長石、チャート、雲母	SH32	190と同一個体
	胴部	190	北白川C式	縄文	ナデ	良好	明赤褐色	長石、チャート、雲母	SH32	189と同一個体
深鉢B類	口縁部	191	北白川C式	沈線文	ナデ	良好	にぶい橙色	長石、チャート、赤色粒子	SK51	
深鉢A類	口縁部	192	北白川C式	沈線文	ナデ	良好	褐色	長石、チャート、雲母	SK51	193と同一個体
	口縁部	193	北白川C式	沈線文	ナデ	良好	褐色	長石、チャート、雲母	SK51	192と同一個体
深鉢	胴部	194	北白川C式	縄文	ナデ	良好	褐灰色	長石、チャート、赤色粒子	SK22	
深鉢or浅鉢	底部	195	北白川C式	—	ナデ	良好	にぶい黄橙色	長石、チャート	SK51	
	底部	196	北白川C式	—	ナデ	良好	橙色	長石、チャート	SH37	
	底部	197	北白川C式	—	ナデ	良好	橙色	長石、チャート、赤色粒子	SH38	
	底部	198	北白川C式	—	ナデ	良好	にぶい黄橙色	長石、チャート、赤色粒子	SK45	
深鉢	口縁部	199	長原式	刻み目突帯文	ナデ	良好	にぶい橙色	長石、チャート、赤色粒子	SK33	
	底部	200	長原式	—	ナデ	良好	にぶい橙色	長石、チャート、赤色粒子	SK33	
	底部	201	長原式	—	ナデ	良好	にぶい橙色	長石、チャート	SK33	
耳栓		202	北白川C式	ナデ	ナデ	良好	橙色	長石、赤色粒子	SH17、SK44	

付表-5 出土遺物観察表-石器

種類	番号	法 量				石 材	出土遺構	備 考	
		最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)				
打製石鏃	203	1.3	1.05	0.2	0.2	サヌカイト	SH39	凹基式鏃、完形品	
	204	1.4	1.1	0.25	0.3	サヌカイト	SH39	凹基式鏃、完形品	
	205	1.45	1	0.25	0.2	サヌカイト	SH39 炉内	凹基式鏃、完形品	
	206	1.4	1.1	0.25	0.3	サヌカイト	SH39	凹基式鏃、完形品	
	207	1.55	1	0.3	0.3	サヌカイト	SH39	凹基式鏃、完形品	
	208	1.5	1.1	0.2	0.3	サヌカイト	SH39	凹基式鏃、完形品	
	209	1.75	1.2	0.25	0.6	サヌカイト	SH39	凹基式鏃、完形品	
	210	(1.25)	1.25	0.25	0.4	サヌカイト	SH39	凹基式鏃	
	211	1.65	1.05	0.2	0.3	サヌカイト	SH39	凹基式鏃	
	212	(1.6)	1.15	0.3	0.5	サヌカイト	SH39	凹基式鏃	
	213	1.85	1.1	0.2	0.2	サヌカイト	SH39	凹基式鏃	
	214	(1.4)	1	0.2	0.2	サヌカイト	SH39	凹基式鏃	
	215	1.95	1.25	0.25	0.4	サヌカイト	SH39	凹基式鏃、完形品	
	216	2.3	1.25	0.3	0.6	サヌカイト	SH39	凹基式鏃、完形品	
	217	(2.1)	1.1	0.25	0.5	サヌカイト	SH39	凹基式鏃	
	218	2.2	1.3	0.3	0.6	サヌカイト	SH39	凹基式鏃	
	219	2.05	1.7	0.25	0.9	サヌカイト	SH39	凹基式鏃、完形品	
	220	2.1	2	0.3	0.9	サヌカイト	SH39	凹基式鏃、完形品	
	221	2.2	1.5	0.2	0.7	サヌカイト	SH39	平基式鏃	
	222	2.1	1.1	0.35	0.7	サヌカイト	SH39	平基式鏃、完形品	
	223	2.65	2	0.75	3.1	サヌカイト	SH39	平基式鏃	
	224	3.3	1.4	0.75	4.3	サヌカイト	SH39	凸基式鏃、完形品	
	打製尖頭器	225	6.55	2.15	1	15.2	サヌカイト	SH39 主柱穴 P157	完形品
	楔形石器？	226	1.85	1.05	0.85	1.7	水晶	SH39	
削器	227	5.2	(2.35)	0.8	7	サヌカイト	SH39	完形品	
	228	4.4	3.55	0.7	11.5	サヌカイト	SH39		
剥片	229	5.9	3.45	1.4	17.7	サヌカイト	SH39		
	230	4.1	4	1.5	17.8	サヌカイト	SH39		
	231	4.35	3.3	0.6	7.2	サヌカイト	SH39		
	232	4	4	0.75	7.7	サヌカイト	SH39		
	233	(3.8)	(2.4)	8.5	10.5	サヌカイト	SH39		
	234	(4)	2.2	0.45	2.8	サヌカイト	SH39		
	235	3.9	1.5	0.5	2	サヌカイト	SH39	風化が顕著	
	236	3.4	2.5	0.65	4.3	サヌカイト	SH39		
	237	3.4	2.3	0.7	5.4	チャート	SH39		
楔形石器	238	2.8	2.1	0.6	3.1	サヌカイト	SH39	完形品	
	239	3	1.65	0.9	3.9	サヌカイト	SH39	完形品	

種類	番号	法 量				石 材	出土遺構	備 考
		最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)			
磨製石斧	240	(9.9)	4.95	2.15	178.4	流紋岩	SH39 炉内	
	241	(3.1)	(2.4)	(0.7)	4.8	安山岩(玢岩)	SH39	
切目石錘	242	4.5	4.3	1.7	44.2	緑色岩	SH39	完形品
	243	5.9	4.5	0.8	35.6	黒雲母ホルンフェルス	SH39	完形品
	244	6	3.55	1.65	49.3	緑色岩	SH39	完形品
	245	5.7	3.6	1.3	38.2	緑色岩	SH39	完形品
磨石	246	5.85	4.25	3.7	115.4	正珪岩	SH39	完形品
	247	7.5	5.9	5.6	348.5	砂岩	SH39	完形品
	248	(8.3)	(7.1)	(5.4)	437	花崗斑岩	SH39 炉内	完形品
	249	(5)	(3.6)	(4.9)	90.8	石英斑岩	SH39	
凹石	250	(10.15)	(5.65)	4.25	339	砂岩	SH39	
	251	(7.35)	(6.1)	6	342	安山岩(玢岩)	SH39	
	252	(12.7)	10.15	4.4	806	砂岩	SH39	
	253	12.9	(7.6)	6.25	844.5	安山岩(玢岩)	SH39	
	254	13.05	10.3	8.7	1507	砂岩	SH39	完形品
	255	(17.2)	(12)	6.4	1834	砂岩	SH39	
砥石	256	7.7	(4.35)	4.05	208.6	安山岩(玢岩)	SH39	
	257	(8.6)	(7.9)	(5.7)	483	安山岩(玢岩)	SH39 支柱穴 P157	
石皿	258	(16.1)	(9.6)	3.25	825.5	安山岩(玢岩)	SH39	
打製石鏃	259	1.65	1.1	0.3	0.3	サヌカイト	SB47 P3	凹基式鏃、完形品
	260	1.75	1.15	0.25	0.3	サヌカイト	SH38 P140	凹基式鏃、完形品
	261	2.3	1.05	0.25	0.4	サヌカイト	SH17	凹基式鏃、完形品
	262	(2.05)	1.2	0.35	0.5	サヌカイト	SH38	凹基式鏃
	263	2.3	1.5	0.35	0.7	サヌカイト	SB50 P137	凹基式鏃
	264	(1.5)	1.6	0.4	0.8	サヌカイト	P92	平基式鏃
	265	(1.95)	1.6	0.35	0.9	サヌカイト	SH38	平基式鏃
	266	2.6	1.25	0.4	1.2	サヌカイト	SH17	凸基式鏃、完形品
打製尖頭器	267	(4.35)	1.7	0.45	3.1	サヌカイト	P40	
石匙	268	4.95	(1.9)	0.5	4.4	サヌカイト	SB11 P10	横長形態
剥片	269	3.7	2.15	0.7	2.7	サヌカイト	SK51	
	270	3.45	2.5	1	7.9	サヌカイト	SK51	
磨石	271	(7.1)	(4.7)	(6.3)	180.2	砂岩	SH32 支柱穴 P94	被熱を受けている
	272	6.4	5.4	4.7	226.5	石英斑岩	SH17	完形品
	273	(6.45)	(3.2)	4.6	128.4	石英斑岩	SH17 土坑 SK44	
石皿	274	28.7	16.7	5	2900	安山岩(玢岩)	SH38	被熱を受けている 飛鳥時代の竪穴建物の カマドに転用
凹石	275	(8.6)	(8.1)	(7.55)	680.5	安山岩(玢岩)	SH17	凹のある面のみ平滑

付表-6 報告書抄録

ふりがな	ながおかきょうあとうきょうだい 1073 じはくつちようさほうこく
書名	長岡京跡右京第 1073 次発掘調査報告
副書名	
シリーズ名	長岡京市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第 58 集
編著者名	山本 輝雄
編集機関	公益財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター
所在地	〒 617-0853 京都府長岡京市奥海印寺東条 10 番地の 1

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
ながおかきょうあとうきょうだい 長岡京跡 いがじいせき 伊賀寺遺跡 ともおかいせき 友岡遺跡	ながおかきょうし 長岡京市 ともおかにしほた 友岡西畑 6 番 1 他、 しもかいいんじいがじ 下海印寺伊賀寺 45 番 1 他	26209	107	34°54'57"	135°41'17"	20131022 ) 20140228	1,690㎡	店舗 建設工事
			96					
			97					

※緯度、経度の測点は調査区の中心で、世界測地座標系の数値を使用している。

遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
伊賀寺遺跡	集落	縄文時代～中世	竪穴建物、掘立柱建物、土坑、溝、小穴など	縄文土器、石器、耳栓、土師器、須恵器、瓦器、陶磁器、鉄製品など	縄文時代中期末の竪穴建物や晩期の土坑の他、飛鳥時代の竪穴建物や掘立柱建物を数多く確認し、伊賀寺遺跡の集落構造や変遷を検討する上で貴重な成果が得られた。
友岡遺跡	集落				
長岡京跡 (右京第 1073 次)	都城	平安時代	掘立柱建物、土坑、小穴など	土師器、須恵器、製塩土器、瓦など	

# 圖 版







(1) 航空写真 (南東上空から)



(2) 航空写真 (北西上空から)





(1) 航空写真（南東上空から）



(2) 航空写真（北西上空から）





(1) 調査区全景 (北から)



(2) 調査区全景 (東から)





(1) 調査区全景 (西から)



(2) 調査区全景 (北西から)





(1) 土坑 SK02 全景 (西から)



(2) 井戸 SE05 全景 (南から)



(3) 井戸 SE09 全景 (南から)





(1) 溝 SD18 完掘状況 (南から)



(2) 溝 SD18 礫出土状況 (北から)



(3) 溝 SD18 礫出土状況 (南東から)





(1) 掘立柱建物 SB11 全景 (北西から)



(2) 柱穴 P10 (北西から)



(3) 柱穴 P7 (北東から)





(1) 掘立柱建物 SB50 全景 (南東から)



(2) 柱穴 P137 (北西から)



(3) 柱穴 P140 (北から)





(1) 土坑 SK24 遺物出土状況 (北東から)



(2) 土坑 SK24 完掘状況 (南から)





(1) 土坑 SK27 全景 (南東から)



(2) 土坑 SK25 全景 (南から)



(3) 小穴 P95 全景 (南東から)



(4) 小穴 P40 全景 (北西から)





(1) 竪穴建物 SH12・13 全景 (北西から)



(2) 竪穴建物 SH12 のカマド (南から)





(1) 竪穴建物 SH14 全景 (南西から)



(2) 竪穴建物 SH14 のカマド (西から)





(1) 竪穴建物 SH15・16 全景 (西から)



(2) 竪穴建物 SH15 のカマド (南から)





(1) 竪穴建物 SH29 全景 (南西から)



(2) 竪穴建物 SH29 のカマド (南から)





(1) 竪穴建物 SH37・38 全景 (北西から)



(2) 竪穴建物 SH37・38 全景 (北東から)





(1) 竪穴建物 SH37 全景 (北西から)



(2) 竪穴建物 SH37 のカマド (南から)





(1) 竪穴建物 SH38 全景 (北西から)



(2) 竪穴建物 SH38 のカマド (西から)





(1) 掘立柱建物 SB20 全景 (南東から)



(2) 柱穴 P8 (南から)



(3) 柱穴 P9 (南から)





(1) 掘立柱建物 SB23 全景 (南西から)



(2) 柱穴 P2 (北西から)



(3) 柱穴 P9 (南東から)





(1) 竪穴建物 SH17 全景 (北から)



(2) 竪穴建物 SH17 全景 (東から)





(1) 竪穴建物 SH17 の石囲炉と支柱穴（北から）



(2) 竪穴建物 SH17 の石囲炉（東から）





(1) 竪穴建物 SH32 全景 (南西から)



(2) 竪穴建物 SH32 の炉と支柱穴 (東から)





(1) 竪穴建物 SH32 の炉遺物出土状況 (北から)



(2) 竪穴建物 SH32 の炉 (南東から)





(1) 竪穴建物 SH39 検出状況 (南西から)



(2) 竪穴建物 SH39 完掘状況 (西から)





(1) 竪穴建物 SH39 検出状況 (南から)



(2) 竪穴建物 SH39 完掘状況 (南から)





(1) 竪穴建物 SH39 の遺物出土状況 (西から)

(2) 竪穴建物 SH39 の遺物出土状況(南東から)



(3) 竪穴建物 SH39 の遺物出土状況 (北から)

(4) 竪穴建物 SH39 の遺物出土状況(北西から)





(1) 竪穴建物 SH39 の炉と支柱穴 (西から)



(2) 竪穴建物 SH39 の炉 (南から)





(1) 土坑 SK22 全景 (南西から)



(2) 土坑 SK33 全景 (南東から)



(3) 土坑 SK33 縄文土器出土状況 (北東から)





(1) 井戸 SE03、溝 SD04・18、小穴 P102 出土遺物



(2) 掘立柱建物 SB11・50、小穴出土遺物

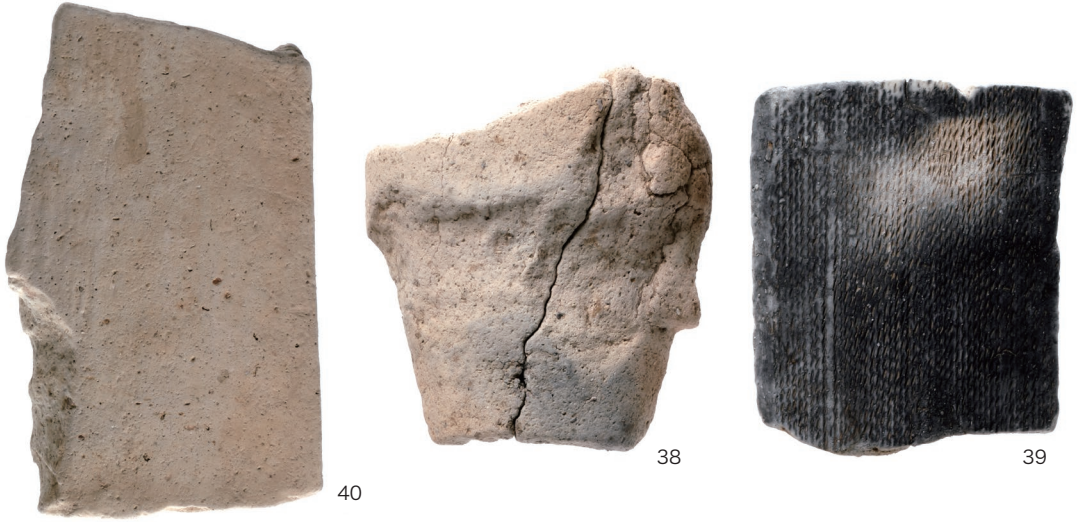




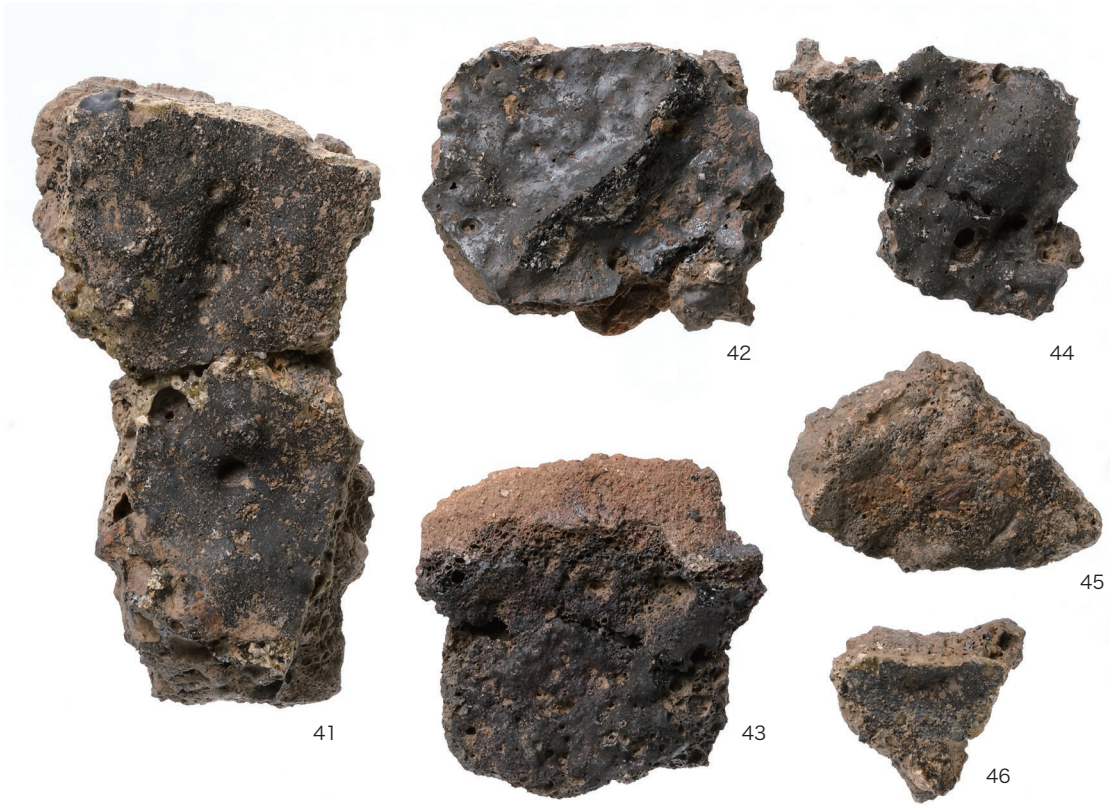
(1) 土坑 SK24 出土土師器



(2) 土坑 SK24 出土須恵器



(1) 土坑 SK24 出土瓦



(2) 土坑 SK27 出土炉壁体





土坑 SK24、竪穴建物 SH14、掘立柱建物 SB50 など出土遺物





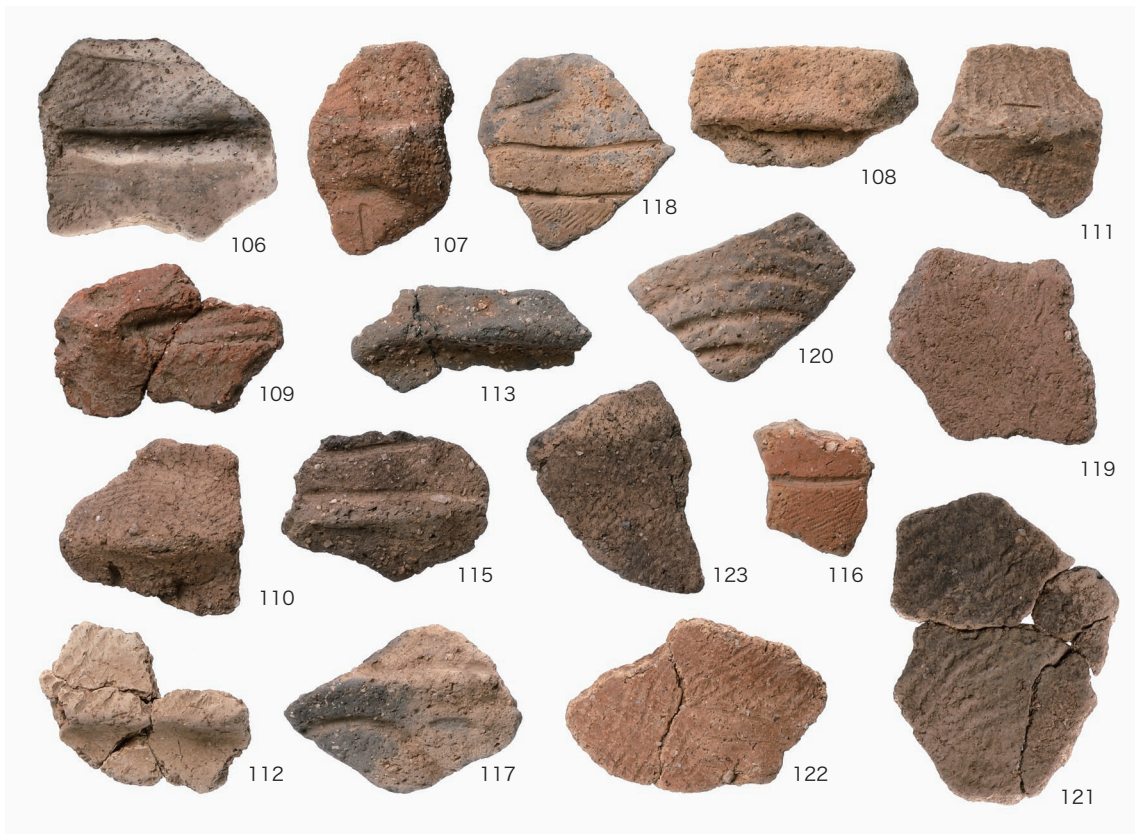
(1) 豎穴建物 SH14・38 出土遺物



(2) 豎穴建物 SH12・15・16・37 出土遺物



(1) 豎穴建物 SH39 出土繩文土器-1



(2) 豎穴建物 SH39 出土繩文土器-2





(1) 豎穴建物 SH39 出土繩文土器- 3



(2) 豎穴建物 SH39 出土繩文土器- 4





豎穴建物 SH39 出土繩文土器-5



豎穴建物 SH39 出土繩文土器-6





(1) 豎穴建物 SH17 出土繩文土器



(2) 豎穴建物 SH32 出土繩文土器

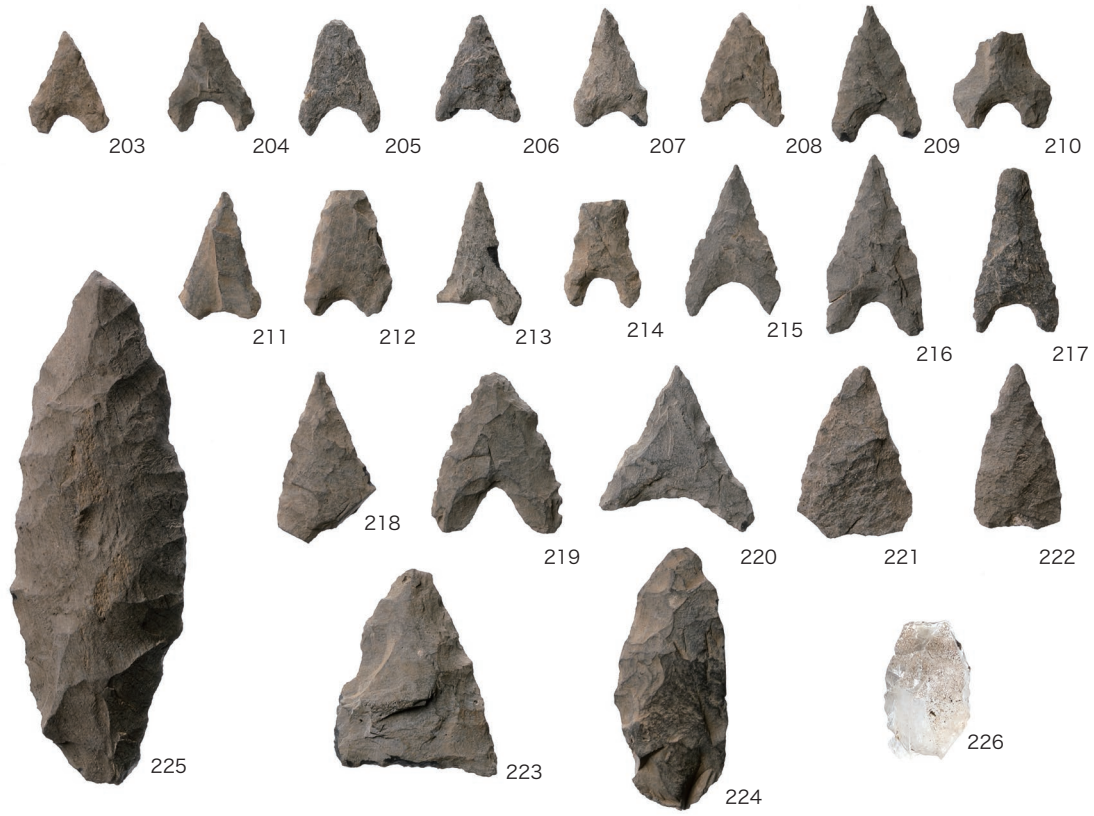




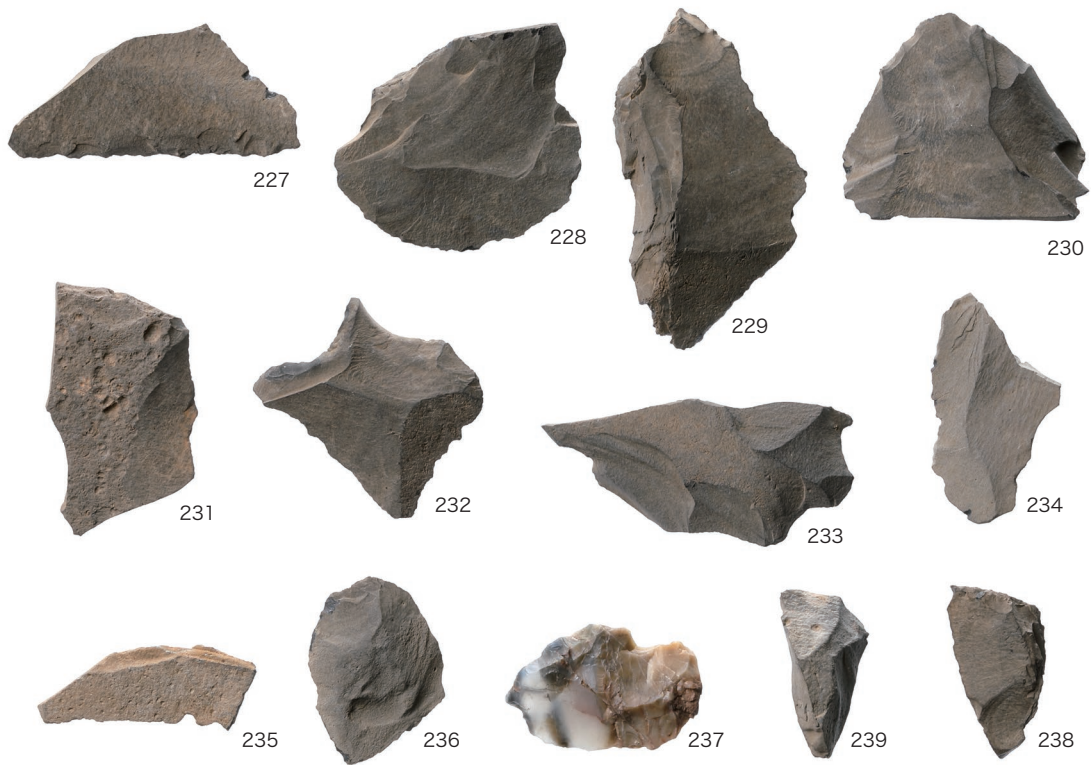
(1) 土坑 SK51 など出土縄文土器



(2) 土坑 SK33 出土縄文土器



(1) 豎穴建物 SH39 出土打製石器-1



(2) 豎穴建物 SH39 出土打製石器-2





(1) 豎穴建物 SH39 出土磨製石器- 1



(2) 豎穴建物 SH39 出土磨製石器- 2

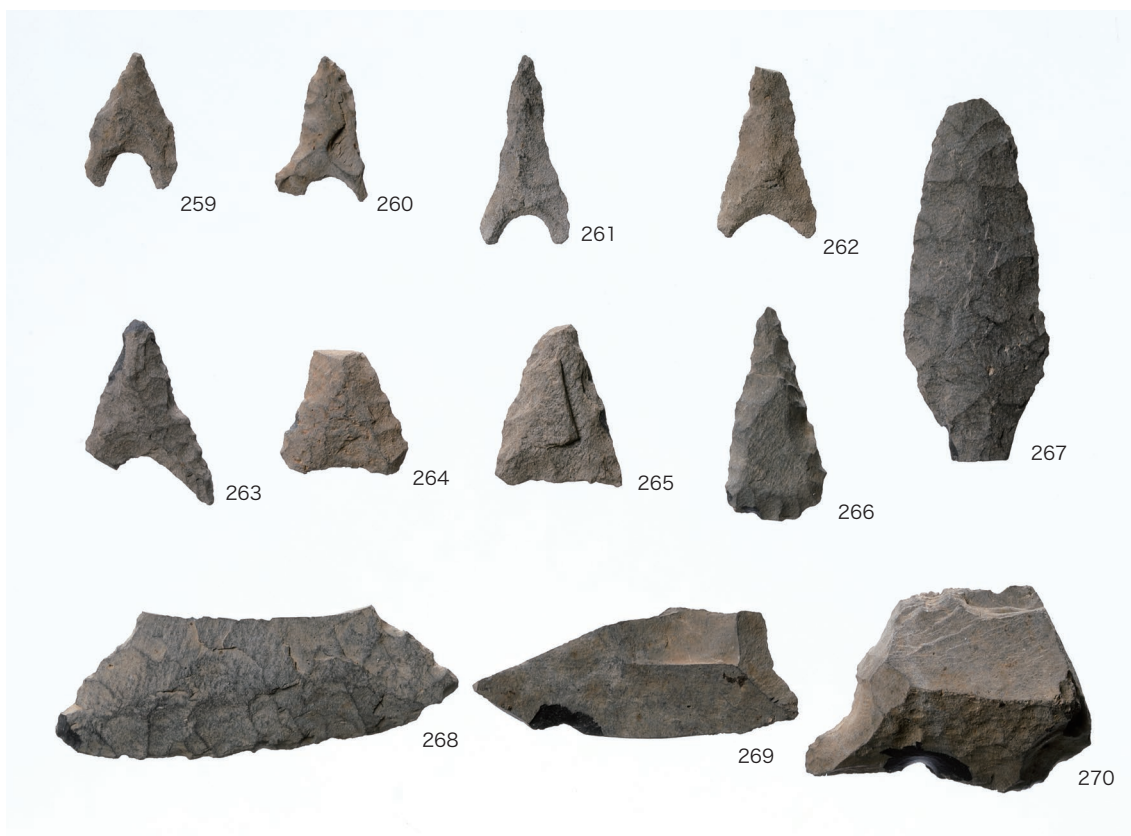




豎穴建物 SH39 出土磨製石器-3



(1) 竪穴建物 SH39 出土磨製石器-4



(2) 竪穴建物 SH17、土坑 SK51 など出土打製石器





竪穴建物 SH17 など出土磨製石器



**長岡京市埋蔵文化財調査報告書 第 58 集**

令和 5 年 3 月 30 日 発行

編集発行 公益財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター

〒 617 - 0853 京都府長岡京市奥海印寺東条 10 番地の 1

電 話 075 - 955 - 3622

F A X 075 - 951 - 0427

印 刷 山代印刷株式会社

〒 602 - 0062 京都府京都市上京区寺之内通小川西入

宝鏡院東町 588 番地

電 話 075 - 441 - 8177

F A X 075 - 441 - 8179

